

文學士有賀長雄編

增訂 帝國史略

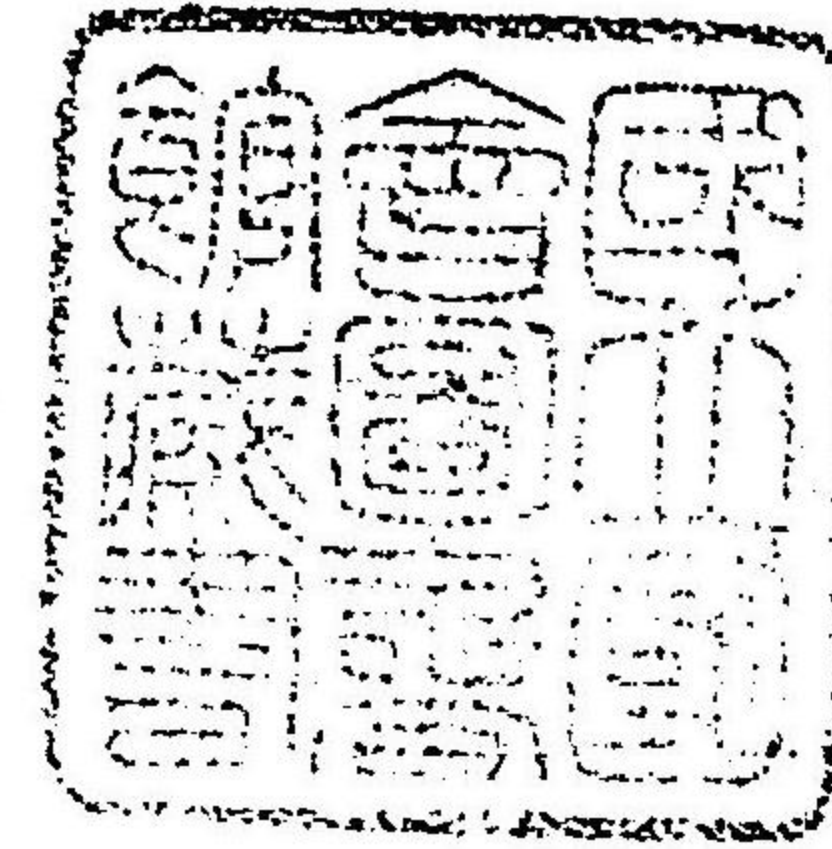


東京

博文館藏版

29

260.1  
A1748t  
2 (th)



212223

通只這手著之帝國  
史畧以贈与之意  
繕閱仕候閱明  
國史之深奧詳悉

先哲之未存真道  
國者之正字者也  
聖亦濟初志之美  
茲再經區志成一讀  
如

種之愉悅何極焉  
國家善治也圖書  
十部購求有人  
破古之聲名存也

教養先之忠母の  
書持事多き  
此家お甲子  
了り4月  
命  
打  
裁

明治六年の夏  
東京の海軍  
書局の  
書局

W. H. O'Connell  
書局

異因了共

其

一多也好

其

因

其

皇典講究所講師從六位文學士有賀長雄君  
帝國史略ヲ著シ本所ノ校閲ヲ需メラル由  
テ本所ハ之ヲ委員ニ付托セリ講師久米幹  
文同井上頼因二君專事實檢定ノ任ニ當リ  
三橋要也氏字句修正ノ勞ヲ取レリ今ヤ此  
ノ書成ル乃チ其ノ顛末ヲ記シテ之ヲ證明  
ス

皇典講究所幹事

明治廿五年五月

松野勇雄

## 自序

予帝國ノ歴史ニ於テ大ニ志ス所アリ明治十五年帝國大學編輯掛ノ職ヲ奉ジテ日本社會史ノ編纂ニ從事シ後皇典講究所及明治法律學校ニ於テ史學ヲ講授スルコト茲ニ數年稍得ル所アルヲ以テ自信ズ然レドモ乏テ現職ニ承ケテ以來專意ヲ公法ノ學ニ致シ殆餘力ナシ而シテ帝國歴史ニ於ケル予ノ所見ヲ以テ大方ニ質スコト能ハザルハ常ニ遺憾ト爲ル所ナリキ乃間ヲ忙裏ニ貪リテ其ノ要領ヲ記シ皇典講究所ノ校閲ヲ經テ梓刻ニ付ス予ノ力ムル所ハ唯變遷ニ於ケル原因結果ノ次第ヲ明ニスルニ在ルノミ願フニ史家優劣ノ由リテ分ル、所一ニ此ニ在ルカ其ノ大成ニ至リテ



ハ固ヨリ他日ナ期スル外アラザルナリ

明治廿五年五月晦日 於樞密院官舎 有賀長雄識

帝國史略第二版序

曩ニ明治廿五年六月ヲ以テ本書上卷ヲ刊行シ、翌六年ヲ以テ下卷ヲ刊行ス。爾來二閱年ニシテ印本盡キ、此ニ第二版ヲ發兌スルニ至レリ。因リテ更ニ引用ノ原書ニ就キテ字句ヲ校訂シ、魯魚ノ誤ヲ正シ、以テ其ノ精確ヲ期シタリ。又第一版ニ於テ未年號アラザリシ時代ハ、何天皇ノ第何年ヲ以テ時順ヲ表示スルノミナリシカドモ、再版ニ於テハ紀元第何年ヲ加ヘ、以テ事變ノ序次ヲ知ルニ便ニシタリ。其ノ他ノ點ニ於テハ敢テ加除スル所ナシ。

明治廿七年七月廿日

編者識

### 帝國史略第三版序

始メ本書ヲ刊行シテヨリ未タ數歲ヲ閱スシテ茲ニ第三版ヲ發兌スルニ至ル、著者ノ名譽ト謂フ可シ、曩ニ第二版ニ於テ一旦字句ヲ訂正シタルモ尙ホ遺漏アラシキヲ恐レ、而シテ此ノ遺漏ヲ補修スルハ著者ヨリ更ニ優等ノ學識ヲ以テスルニ非サレハ難キヲ念ヒ、再度ノ訂正ヲ舉ケテ三橋要也先生ニ囑托シタリ、先生授業ノ餘暇ヲ以テ字句ヲ校訂シ行文ノ妥當ヲ缺クモノ亦之ヲ修正シ綿密到ラサルヲシ、爲ニ幾倍ノ光彩ヲ添タルヲ疑ハス、因テ本序ニ於テ先生ノ勞ヲ鳴謝ス。

明治廿九年九月三日

編者再識

### 凡例

- 一本書ハ主トシテ國民變遷ニ於ケル原因結果ノ次第ヲ明ニセシトテ務メ、事實ハ成ル可ク正史ニ據リ、妄ニ新奇ノ臆說ヲ加ヘテ舊傳ヲ紛更セントスルコトヲ避ケタリ。
- 一字句ニ至リテモ緊要ノ段ハ大抵正史ノ文章ヲ抄撮シ、唯漢文ニ代フルニ假名交ノ時文體ヲ以テシタルモノ多シ。
- 一初メ本書ヲ起草スルニ當リテハ、太寶律令以下重要ナル古代法律ノ史傳ニ關係アルモノヲ編入セントシタリ、然レドモ爲ニ紙數ヲ増加スル不便アリ、且古代法律ハ特別ノ一科トシテ講究スベキ價值アルガ故ニ、中途ニシテ計畫ヲ改メ、別ニ日本古代法釋義ト稱シ一冊トシテ發行セリ、因リテ本書ノ律令ニ關スル部分ハ唯大綱ヲ舉グルニ止メタリ、其ノ詳細ヲ知ラントヒバ本書ヲ閱讀セラルベシ。
- 一全編ヲ分ケテ七期及今代トス、即左ノ如シ。

第一期 神武建國ヨリ起リ三韓征服ニ至ル

帝國史略 凡例

第二期 三韓征服ヨリ起リ佛法傳來ニ至ル

第三期 佛法傳來ヨリ起リ大化改新ニ至ル

第四期 大化改新ヨリ起リ藤氏攝政ニ至ル

第五期 藤氏攝政ヨリ起リ保平戰亂ニ至ル

第六期 保平戰亂ヨリ起リ德川幕府ニ至ル

第七期 德川幕府ヨリ起リ王政維新ニ至ル

今 代 維新更始ヨリ帝國議會開會ニ至ル

# 帝國史略目次

## 第一期 國民興起ノ代

### 第一章 神代

一節 建國神話

二節 三種分治

三節 天照太神ノ岩戸隱

四節 素戔嗚尊出雲ニ到ル

五節 大國主命ノ治

六節 天神瓊々杵尊ヲ大日本ノ主トシ給フ

七節 出雲護國

八節 天孫降臨

九節 日向帝居

### 第二章 神武天皇建國

一節 島軍東征

二節 倭國及長髓彦

三節 蝦八咫鳥及兄狝弟狝

四節 吉野ノ土民ヲ服ス

五節 天神ヲ禱リ八十集帥ヲ伐ツ

六節 饒速日命歸順

七節 處々土蜘蛛ヲ誅ス

八節 帝宅經營

九節 納妃

十節 登位

十一節 實功

十二節 祭祖

十三節 巡國

### 第三章 日本國民成立

第四章 國民當初ノ形勢

- 一節 民衆ノ成分
- 二節 天孫及天神地祇
- 三節 泉師民種
- 四節 穴居民種
- 五節 國家團結
- 六節 特殊ノ國體
- 一節 宮殿ノ構造
- 二節 朝廷ノ行事
- 三節 禁闕ノ兵衛
- 四節 祭政供給
- 五節 臣民ノ住居
- 六節 太古ノ衣服
- 七節 太古ノ食物
- 八節 太古ノ器具

第五章 綏靖天皇ヨリ崇神天皇ニ至ル

- 一節 綏靖以後八帝
- 二節 崇神天皇
- 三節 神人別處
- 四節 四道將軍
- 五節 武埴安彥背叛
- 六節 弭調手末調
- 七節 造松及堀池
- 八節 海外ノ交通
- 九節 三韓トノ關係

第六章 垂仁天皇及外患

- 一節 狹穗彥反ス
- 二節 倭奴國王侵漢ニ通ス
- 三節 伊勢神宮ヲ起ス
- 四節 兵器ヲ神社ニ藏ス
- 五節 任那ニ日本府ヲ置ク
- 六節 勸農
- 七節 野見宿禰及角力
- 八節 殉死ヲ廢ス

第七章 景行天皇

- 九節 常世國ニ歸ル
- 十節 朝政ノ形勢
- 一節 帝權擴張ノ原因
- 二節 天皇熊襲ヲ征シ給フ
- 三節 日本武尊熊襲ヲ伐シ
- 四節 日本武尊東夷ヲ伐シ
- 五節 天皇東巡
- 六節 御膳別王ヲ東國ニ封ス
- 七節 帝國版圖統一ノ難點

第八章 成務天皇及地方制度

- 一節 地方制度ヲ定ム
- 二節 別ノ皇子
- 三節 國造
- 四節 縣主
- 五節 稻置

第九章 神功皇后及三韓征服

- 一節 仲哀天皇
- 二節 三韓ノ遠征
- 三節 研坂王忍熊王謀反
- 四節 外藩ノ制度

第二期 國民隆盛ノ代

第十章 社會ノ組織

- 一節 前期復讐
- 二節 氏族

第十一章 國家ノ編制

- 三節 大兵小兵及兵上
- 四節 世襲業務及兵名
- 五節 部曲
- 六節 奴婢
- 一節 天皇ト臣民トノ關係
- 二節 御名代ノ民
- 三節 歸化及貢獻ノ民
- 四節 沒收ノ民
- 五節 天皇ト土地トノ關係
- 六節 屯田
- 七節 沒收ノ地
- 八節 征服ノ地
- 九節 天皇統治ノ範圍
- 十節 神事大權
- 十一節 兵馬大權
- 十二節 族制大權

第十二章 政治ノ機關(骨姓ノ制)

- 一節 骨姓ノ制
- 二節 神別諸氏
- 三節 皇別諸氏
- 四節 大臣、大連、臣、連
- 五節 國造及伴造
- 六節 血族國家

第十三章 應神天皇及文教工藝ノ渡來

- 一節 三韓トノ關係
- 二節 秦氏及漢氏
- 三節 文教傳來
- 四節 文教渡來ノ前後

第十四章 仁德天皇善政

- 一節 稚耶子大鷦鷯相頤
- 二節 難波ノ都

第十五章 武内宿禰及子孫

- 三節 水利ヲ起シ賦斂ヲ輕クス
- 一節 武内宿禰ノ事跡
- 二節 巨勢氏
- 三節 蘇我氏
- 四節 平群氏
- 五節 紀氏
- 六節 葛城氏

第十六章 履中天皇ヨリ安康天皇ニ至ル

- 一節 履中天皇、反正天皇
- 二節 九部天皇(衣通姫)
- 三節 安康天皇(肩輪王)
- 四節 當時帝室ノ事情

第十七章 雄略天皇專制

- 一節 市邊押磐皇子等ヲ殺シ位ニ即キ給フ
- 二節 天皇以心爲師
- 三節 天皇尊大ヲ示シ給フ
- 四節 任那國司ノ叛逆
- 五節 工藝ヲ獎勵ス
- 六節 大藏ヲ起ス

第十八章 清寧天皇ヨリ宣化天皇ニ至ル

- 一節 皇川皇子謀反
- 二節 清寧天皇
- 三節 弘計王、健計王
- 四節 顯宗天皇
- 五節 蚊屋野ニ遺骨ヲ求ム
- 六節 天皇ハ神聖ニシテ侵スベカラズ
- 七節 仁賢天皇
- 八節 平群大臣滅亡

九節 武烈天皇  
十一節 安閑天皇宣化天皇

第十九章 雄略天皇以後三韓ノ動靜……………二〇七

一節 新羅及日本府  
三節 高麗百濟ヲ伐ツ  
五節 百濟内亂  
七節 筑紫國造盤井叛逆  
二節 紀小弓等新羅ヲ伐ツ  
四節 紀生磐宿禰任那ニ據リ反ス  
六節 大伴金村任那ノ失政

第二十章 第二期ノ財政及刑律……………二一六

一節 財政  
三節 刑律  
二節 人口及土地ノ徵發  
一節 建築  
三節 松車  
五節 繪畫  
七節 歌垣  
二節 工藝  
四節 醫術  
六節 和歌  
八節 感信

第二十一章 第二期ノ風俗……………二二六

第三期 佛法傳來ノ代

第二十二章 大伴氏物部氏蘇我氏……………二二七

一節 前期復讐  
三節 物部氏  
五節 自餘諸大氏上  
二節 大伴氏  
四節 蘇我氏

第二十三章 佛教傳來……………二四五

一節 百濟上表  
三節 三教相關  
二節 佛法畧歴  
四節 朝廷兩隣

第二十四章 物部氏蘇我氏軋轢……………二五一

一節 敏達天皇  
三節 再佛法ヲ禁ズ  
五節 大連大臣始メテ障アリ  
七節 物部大臣ノ滅亡  
九節 蘇我馬子大道ヲ行フ  
二節 佛法再燃  
四節 佛法三々ビ起ル  
六節 用明天皇  
八節 崇峻天皇

第二十五章 推古天皇及聖德太子攝政……………二六二

一節 聖德太子  
三節 僧官ノ起原  
五節 隋唐ノ交通  
七節 舊記ヲ修ス  
九節 太子入滅  
二節 十七憲法  
四節 美術ノ獎勵  
六節 冠位ヲ定ム  
八節 曆數ヲ制ス

第二十六章 蘇我大臣惡逆……………二七五

- 一節 蘇我馬子專橫
- 二節 舒明天皇及皇極天皇
- 三節 蘇我蝦夷專權
- 四節 太子ノ遺族ヲ滅ス
- 五節 蘇我入鹿借擬
- 六節 中臣鎌子勤王
- 七節 入鹿ヲ朝ニ殺ス

第二十七章 第三期ノ文物風俗……………二八四

- 一節 文藝
- 二節 造寺(法隆寺)
- 三節 民俗

第四期 唐制摸倣ノ代

第二十八章 孝德天皇及大化改新……………二九三

- 一節 改新ノ朝廷
- 二節 僧曇及高向之理
- 三節 年號ヲ立シ
- 四節 國司ヲ置ク
- 五節 鐘ヲ懸ケ匠ヲ設ケ
- 六節 男女ノ法ヲ定ム
- 七節 民數ヲ校ス
- 八節 改新ノ大詔
- 九節 禮法ヲ定メ位冠ヲ制ス
- 十節 八省百官ヲ置ク
- 十一節 備道ヲ標準トス
- 十二節 遣唐使及留學生

第二十九章 大化改新ノ大義……………三〇八

第三十章 大化改新ノ國家……………三一五

- 一節 國家ト族制トノ分離
- 二節 爵位ノ起原
- 三節 公權私權ノ背馳
- 一節 國家ト人民トノ關係
- 二節 校民行政區畫及一國稅法
- 三節 國家ト土地トノ關係
- 四節 食封、國造任命及國司置設
- 五節 天皇統治權ノ範圍擴張
- 六節 改新ト革命トノ區別

第三十一章 齊明天皇……………三二九

- 一節 齊明天皇
- 二節 三韓事件
- 三節 蝦夷事件

第三十二章 天智天皇……………三三三

- 一節 天智天皇中興
- 二節 內大臣鎌足發メ
- 三節 近江律令
- 四節 朝禮戶籍

第三十三章 壬申ノ亂……………三三九

- 一節 壬申ノ亂
- 二節 弘文天皇
- 三節 壬申ノ亂ノ原因
- 四節 壬申ノ亂ノ結果

第三十四章 天武天皇……………三四九

- 一節 天武天皇
- 二節 壬申ノ功臣

(10)

三節	儀制	四節	官職
五節	兵事	六節	行政
七節	刑律	八節	法制及修史
九節	八色ノ姓ヲ定ム	十節	位階ノ號ヲ定ム
十一節	氏上ヲ定ム		

第三十五章 持統天皇……………三六三

一節	持統天皇	二節	政事
三節	奴婢ノ制	四節	皇位繼承ノ順定マル

第三十六章 文武天皇及大寶令大寶律……………三六九

一節	文武天皇	二節	大寶令大寶律
三節	律令格式	四節	官制
五節	官吏人民	六節	土地
七節	納稅		

第三十七章 元明元正女帝及修史事業……………三七九

一節	元明天皇	二節	平城ノ遷都
三節	律令ノ施行	四節	古事記
五節	風土記	六節	元正天皇
七節	按察使ヲ置ク	八節	日本書紀

第三十八章 聖武天皇及奈良朝ノ文化……………三八六

一節	聖武天皇	二節	奈良ノ都
三節	支那ノ交通	四節	留學生(仲麻呂、真吉備)
五節	入唐來朝ノ佛僧		

第三十九章 奈良朝ノ佛法……………三九五

一節	天皇受戒	二節	奈良大寺(大佛)
三節	正倉院寶庫	四節	國分寺
五節	行基菩薩	六節	衆庶感信
七節	役優婆塞、久米仙人		

第四十章 奈良朝ノ凋弊……………四〇七

一節	聖武ノ讓位	二節	孝德天皇ノ崇佛
三節	仲麻呂幸	四節	淳仁天皇(廢帝)
五節	僧道鏡及和氣清麿	六節	親政ノ厄運
七節	國郡ノ流弊	八節	利稻
九節	諸國盜起ル		

第四十一章 第四期ノ文藝……………四一八

一節	古文	二節	宣命文
三節	萬葉集	四節	八丸赤人



五節 慣風雜

第五期 藤氏攝關ノ代

第四十二章 藤原氏平氏源氏

- 一節 前期再說
- 二節 藤原氏ノ四家
- 三節 藤原百川英主ヲ迎ヘ立ツ
- 四節 藤原種繼是公繼繩
- 五節 諸王ニ姓ヲ賜フ
- 六節 平氏起源
- 七節 源氏起源
- 八節 氏長者及學院別當
- 九節 姓氏錄

第四十三章 光仁桓武ノ治績

- 一節 光仁天皇ノ制度整平
- 二節 桓武天皇ノ二大事業
- 三節 長岡ノ新宮
- 四節 平安ノ帝都
- 五節 大内遷
- 六節 遣唐使及入唐僧
- 七節 東夷ノ動靜
- 八節 紀古佐美ノ敗績
- 九節 坂上田村麿ノ軍功

第四十四章 藏人所及檢非違使廳

- 一節 三朝紀事
- 二節 參議及藏人所
- 三節 檢非違使廳
- 四節 藤原冬嗣

(111)

第四十五章 藤原氏ノ收權

- 一節 承和ノ歎
- 二節 藤原氏ノ出ヲ立ツ
- 三節 藤原良房ノ攝政
- 四節 藤原基經ノ關白
- 五節 藤原氏ノ人物
- 六節 阿衡始末
- 七節 延喜ノ歎

第四十六章 延喜時代ノ文學

- 一節 漢文
- 二節 漢詩(小野基)
- 三節 和歌(在原業平)
- 四節 和文(紀貫之)
- 五節 竹取物語
- 六節 書畫
- 七節 著述

第四十七章 地方ノ形勢

- 一節 都鄙ノ隔絶
- 二節 國司ノ事情
- 三節 權貴ノ私領
- 四節 莊園ノ起原

第四十八章 承平天慶ノ亂

- 一節 平將門謀反
- 二節 藤原純友謀反
- 三節 四國ノ形勢
- 四節 武家ノ興起

第四十九章 藤原氏ノ榮花

(112)

(一四)

一節	村上ノ朝廷	二節	冷泉園融ノ朝廷
三節	花山一條ノ朝廷	四節	關白道長ノ榮花
五節	榮花物語		

第五十章 朝廷地方ノ比較……………五〇七

一節	時勢ノ觀察	二節	朝廷ノ文學
三節	京師諸國盜起ル	四節	刀夷ノ入寇
五節	平忠常反ス	六節	前九年ノ役
七節	後三年ノ役	八節	源氏及藤原氏所屬ノ武家
九節	今昔物語		

第五十一章 後三條天皇ノ親政及白河

一節	後三條天皇	二節	院政……………五二一
三節	藤原氏ヲ抑フ	四節	院政ノ展開
五節	院政	六節	僧兵強盛
七節	朝貢遊蕩	八節	變亂ノ機動

第六期 武家争權ノ代

第一 源平時代

第五十二章 形勢變化ノ要領……………五三五

一節	地方生活ノ獨立	二節	武人ノ士氣
三節	家人耶黨	四節	武家ノ所領
五節	源氏嫡流	六節	平氏嫡流
七節	地方私戦ノ情況		

第五十三章 保元平治ノ亂……………五四三

一節	保元ノ亂	二節	源平骨肉相食
三節	後白河上皇	四節	藤原ノ逆遷(信四)
五節	平治ノ亂		

第五十四章 平清盛ノ權勢……………五五三

一節	文武ノ關係一轉ス	二節	平清盛ノ太政大臣
三節	一門ノ繁榮	四節	鹿谷ノ密謀
五節	關白ヲ流シ法皇ヲ幽ス	六節	源賴政兵ヲ擧グ
七節	藤原ノ遷都	八節	源氏諸國ニ起ル
九節	嚴島		

第五十五章 平氏亡ビ源氏興ル……………五六五

一節	源賴朝	二節	源義仲
三節	平氏四奔	四節	後鳥羽天皇即位

五節 義仲ノ滅亡

六節 平氏ノ末路

(16)

第二 鎌倉時代

第五十六章 源賴朝ノ幕府

.....五七三

- 一節 鎌倉ヲ開ク
- 二節 三幸ヲ奏ス
- 三節 侍所、公文所、問注所
- 四節 頼朝、義經、阿弖
- 五節 守護、地頭ヲ置ク
- 六節 内覽、議奏ヲ置ク
- 七節 四國及奥羽ノ平定
- 八節 源賴朝朝觀
- 九節 頼朝ノ爲人

第五十七章 二代頼家及三代實朝

.....五八四

- 一節 二位尼及時政
- 二節 頼家ノ非命
- 三節 時政ノ奸謀
- 四節 和田合戦
- 五節 實賴ノ横死
- 六節 將軍ヲ京ニ迎フ(頼經)

第五十八章 承久ノ亂

.....五八九

- 一節 承久兵亂ノ原因
- 二節 上皇兵ヲ擧グ給フ
- 三節 官軍利アラズ
- 四節 泰時ノ辭解
- 五節 承久兵亂ノ結果
- 六節 新補地頭

第五十九章 北條氏ノ執權

.....六〇一

- 一節 京都ノ兩六波羅
- 二節 關東評定衆
- 三節 泰時ノ善政
- 四節 貞永式目
- 五節 時頼ノ節儉
- 六節 最明寺ノ巡國
- 七節 青砥藤綱
- 八節 代々將軍ノ處置
- 九節 時宗及元寇

第六十章 鎌倉時代ノ文藝及宗教

.....六一二

- 一節 文藝ニ流ニ分ル
- 二節 京都ノ文藝
- 三節 鎌倉ノ文藝
- 四節 隱逸ノ風起ル(長明、四行、兼好)
- 五節 新宗ノ閉關(親鸞、一蓮、日蓮)

第六十一章 兩統及五攝家

.....六二五

- 一節 持明院統及大覺寺統
- 二節 五攝家

第六十二章 北條氏亡ヲ(元弘ノ亂)

.....六二八

- 一節 高時ノ暴逆
- 二節 天皇笠置ニ幸ス
- 三節 天皇ヲ隱岐ニ遷シ奉ル
- 四節 楠木正成赤松則村兒島高徳ノ勤王
- 五節 天皇隱岐ヲ出テントシ給フ
- 六節 名和長年ノ勤王
- 七節 高時ノ滅亡

第三 南北朝時代

(17)

第六十三章 建武中興 ..... 六三八

- 一節 軍令條々
- 二節 中興ノ計畫
- 三節 法度ノ不備
- 四節 京師ノ混雜
- 五節 藤房ノ還世
- 六節 地方ノ亂離
- 七節 藤原親王ノ還離

第六十四章 南北朝 ..... 六四九

- 一節 尊氏鎌倉ニ據ル
- 二節 義貞尊氏ヲ討ツ
- 三節 尊氏京師ヲ犯ス
- 四節 尊氏九州ニ走ル
- 五節 正成ノ戦死
- 六節 南北兩朝ノ分立
- 七節 義貞ノ戦死
- 八節 吉野ノ行宮
- 九節 正行ノ戦死
- 十節 北畠親房

第四 室町時代

第六十五章 足利氏初政 ..... 六六一

- 一節 京都幕府
- 二節 建武式目及式目追加
- 三節 足利氏ノ内患
- 四節 南軍三々々京師ヲ復ス
- 五節 義隆
- 六節 義滿

第六十六章 足利氏中世 ..... 六六七

- 一節 南北合一
- 二節 後小松天皇

第六十七章 足利氏ノ制度 ..... 六七七

- 一節 官職
- 二節 財略
- 三節 社寺
- 三節 儀四及關東ノ形勢
- 四節 義滿太政大臣ト爲ル
- 五節 義滿朝憲ヲ案ル
- 六節 稱光天皇及後花園天皇

第六十八章 室町時代ノ文藝美術 ..... 六八二

- 一節 文學
- 二節 遊伎
- 三節 美術

第六十九章 足利氏ノ末世 ..... 六八九

- 一節 義持、義隆、義教
- 二節 關東ノ足利氏亡テ
- 三節 赤松滿祐將軍義教ヲ弑ス
- 四節 義隆、義政
- 五節 德政及重課
- 六節 東山殿敷寄
- 七節 義政ノ興政
- 八節 關東ノ亂離

第七十章 應仁ノ亂 ..... 六九九

- 一節 應仁ノ亂原
- 二節 應仁ノ亂ノ結果
- 三節 義尚
- 四節 義植、義隆
- 五節 幕府主無シ
- 六節 松永久秀ノ暴逆

第五 戰國時代

第七十一章 各地紛亂ノ形勢

- 一節 概説
- 二節 朝廷ノ式微
- 三節 一向宗一揆
- 四節 關東及兩上杉氏、北條氏、里見氏
- 五節 加濃、越前、武田氏、上杉氏
- 六節 駿、遠、今川氏、北條氏、齋藤氏、織田氏
- 七節 關西及毛利氏、尼子氏
- 八節 四國及河野氏、長曾我部氏
- 九節 九州及大友氏、龍造寺氏、島津氏

(110)

七〇六

第六 織田時代

第七十二章 織田信長

- 一節 信長入京
- 二節 信長機略ヲ練ム
- 三節 信長近畿ヲ定ム
- 四節 織川家康ヲ援フ
- 五節 羽柴秀吉ヲ用フ
- 六節 光秀信長ヲ弑ス
- 七節 信長ノ事業
- 八節 信長ノ勤王

七二〇

第七 豐臣時代

第七十三章 豐臣秀吉

- 一節 秀吉ノ繁生
- 二節 秀吉入京
- 三節 小牧ノ陣
- 四節 秀吉家康ノ關係

七三一

第七十四章 豐臣秀吉ト朝廷

- 一節 後陽成天皇
- 二節 聚樂ノ御幸
- 三節 帝室御領ヲ定ム
- 四節 諸將ヲシテ勤王ヲ醫ハシム
- 五節 財寶ヲ分ツ
- 六節 北條氏ヲ亡シ織川氏ヲ封ス

七四五

第七十五章 朝鮮征伐

- 一節 朝鮮國王トノ往復
- 二節 書ヲ琉球國王ニ贈ル
- 三節 我が軍朝鮮八道ヲ席卷ス
- 四節 明使來朝
- 五節 如安使命ヲ全クセズ
- 六節 朝鮮征伐ノ結果
- 七節 秀吉死後ノ計畫

七五七

第七十六章 豐臣時代ノ文藝技術

- 一節 茶道
- 二節 和歌連歌

第七期 德川幕府ノ代

第七十七章 德川氏興起

- 一節 德川氏系譜
- 二節 秀吉家康ノ關係
- 三節 脱藩一則
- 四節 關原ノ役
- 五節 諸將ヲ封ス

七六一

(111)

第七十八章 德川氏及豐臣氏……………七七一

- 一節 家康將軍ニ任メ
- 二節 秀賴ノ動靜
- 三節 鐘銘事件
- 四節 大阪兩度ノ陣
- 五節 元和ノ偃武
- 六節 東照大権現ノ隆興ヲ賜フ
- 七節 家康百箇條
- 八節 御三家

第七十九章 德川幕府ノ初世……………七八三

- 一節 文教振起ス
- 二節 本朝通鑑
- 三節 山寺制度
- 四節 外交政略
- 五節 四教禁制

第八十章 二代秀忠三代家光四代家綱……………七九一

- 一節 德川氏外戚トナル
- 二節 天皇ノ御料ヲ定ム
- 三節 明正天皇即位
- 四節 三代家光
- 五節 外様譜代ノ別ヲ廢ス
- 六節 日光廟
- 七節 江戸城
- 八節 島原一揆
- 九節 鎖國主義
- 十節 奉佛命令
- 十一節 四代家綱
- 十二節 浪士ノ隱謀
- 十三節 明亡ヒ清起ル(鄭成功)
- 十四節 江戸市街ノ改正
- 十五節 海運ノ通利
- 十六節 幕府ノ政變ム

第八十一章 德川幕府初世ノ朝廷……………八〇五

- 一節 家康ノ勳王
- 二節 公武法制
- 三節 攝家傳奏、臨奏
- 四節 公家有職
- 五節 後關成天皇及家康
- 六節 後水尾天皇
- 七節 後光明天皇
- 八節 京都所司代

第八十二章 德川幕府ノ中世(元祿時代)……………八一四

- 一節 五代綱吉
- 二節 大名ノ幕獄ヲ親裁ス
- 三節 大老堀田殿中ニ刺サル
- 四節 孔子ヲ祭ル
- 五節 老中ヲ用部屋ニ移ス
- 六節 財政窮乏
- 七節 柳澤殿勳
- 八節 養犬及殺生禁斷
- 九節 赤穂浪士ノ復讐
- 十節 貞享元祿ノ文化
- 十一節 江戸ノ風俗

第八十三章 六代家宣、七代家繼、八代吉宗、九代家重、十代家治……………八二八

- 一節 六代家宣
- 二節 新井君英
- 三節 財政整理
- 四節 七代家繼
- 五節 八代吉宗
- 六節 櫻楓ヲ移シ美女ヲ放ツ
- 七節 尙武
- 八節 尙文
- 九節 三卿ノ制
- 十節 隔年勤番ノ制

(三三)

十二節 足高ノ制  
十三節 洋學  
十五節 九代家重

十二節 經濟  
十四節 刑政  
十六節 十代家治

第八十四章 德川幕府中世ノ朝廷

一節 東山天皇  
三節 歷朝ノ山陵ヲ搜訪ス  
五節 四親王家  
七節 櫻町天皇  
九節 後櫻町天皇、後桃園天皇  
二節 貞享曆  
四節 中御門天皇  
六節 勅使燒香ヲ廢ス  
八節 桃園天皇

第八十五章 德川幕府ノ末世(十一代家齊)

一節 天明ノ饑饉  
三節 節儉  
五節 官學振興  
二節 十一代家齊  
四節 風俗矯正  
六節 白川樂齋

第八十六章 德川幕府末世ノ朝廷

一節 光格天皇  
三節 尊號ノ紛囂  
二節 皇居遷替  
四節 院號ヲ止メ隆號ヲ復ス

第八十七章 國學及勤王論

一節 德川幕府ト國學及外交  
二節 幕府及古典

第八十八章 外寇及開港論

一節 幕府及外國  
三節 海防  
五節 開港論起ル  
三節 大日本史  
五節 荷田春滿、在滿  
七節 本居宣長  
九節 文化文政ノ國學  
四節 僧契沖及萬葉代匠部  
六節 加茂真淵  
八節 橋本昌一及群書類從  
十節 勤王論ノ起因  
二節 蝦夷始末  
四節 蘭學

第八十九章 十二代家慶

一節 一般ノ形勢  
三節 天保ノ饑饉  
五節 德川齊昭ノ建白  
七節 ヘルリ來航  
九節 將軍米使ヲ江戸城ニ見ス  
二節 幕府部内ノ形勢  
四節 十二代家慶及水野忠邦  
六節 亞米利加交通ヲ求ム  
八節 ヘルリ再航  
十節 條約修約

第九十章 十三代家定十四代家茂

一節 安政度ノ地異  
三節 孝明天皇  
五節 朝廷ノ學習所  
二節 水戸及攘夷論  
四節 幕府ノ武術獎勵  
六節 幕府ニ派ニ別ル

(三四)

(三〇)

七節	十四代家茂	八節	安政ノ獄
九節	櫻田ノ變	十節	皇妹降嫁
十一節	局面一變	十二節	攘夷ノ詔勅
十三節	幕府ノ威喪	十四節	將軍上洛
十五節	男山ノ御幸	十六節	外人薩藩ヲ襲フ
十七節	七廟長門ニ走ル	十八節	將軍再入朝
十九節	長州征伐(第一)	二十節	長州征伐(第二)
廿一節	兵庫ノ開港		

第九十一章 十五代慶喜……………九二二

一節	十五代慶喜	二節	松平容堂ノ上書
三節	對幕ノ内讒	四節	王政復古

附錄今代

第一章 維新更始……………九一七

一節	小御所會議	二節	官制改革
三節	慶喜大阪城ニ退ク	四節	伏見烏羽ノ役
五節	征東ノ令	六節	外交
七節	五條ノ誓勅	八節	職制改革
九節	廢輪	十節	彰義隊及會津ノ亂
十一節	五稜廓ノ戰	十二節	異教及財政

第二章 明治ノ昭代……………九三九

一節	昭興ノ分割	二節	廢藩置縣
三節	太政官官制ヲ改ム	四節	特命全權大使ヲ派ス
五節	兵制	六節	紙幣及公債
七節	法律	八節	維新後ノ新制及新事業
九節	刺殺及謀叛	十節	教育
十一節	地租及土地ノ名稱	十二節	征韓論
十三節	民衆議院	十四節	佐賀ノ亂
十五節	臺灣ノ役	十六節	元老院大審院及地方官會議ノ創立
十七節	江華灣ノ變	十八節	車駕東巡
十九節	熊本及山口ノ亂	二十節	車駕西遊
廿一節	西南ノ役	廿二節	勳章
廿三節	水戸及大久保	廿四節	竹橋暴動
廿五節	農商獎勵及交通	廿六節	沖繩縣設置

第三章 立憲君主政體確立……………九七一

一節	民權論起ル	二節	車駕北巡及國會開設ノ詔
----	-------	----	-------------



三節 武官ニ關ス  
 五節 岩倉右大臣薨ス  
 七節 華族令ヲ定ム  
 九節 官制改革  
 十一節 大日本帝國憲法  
 十三節 帝國議會

四節 朝鮮ノ變(其一)  
 六節 政黨員ノ選舉  
 八節 朝鮮ノ變(其二)  
 十節 宮城  
 十二節 皇太子冊立

(二八)

增訂帝國史略目次終

帝國史略

地勢概論

夫我が大日本國ハ、皇祖皇宗ノ之ヲ天神ニ承ケテ今日ニ傳ヘ統治シ給フ所ニシテ、神代ヨリ美國ト稱シ、地形ノ交錯ナル、氣候ノ順和ナル、天産ノ豐澤ナル、民俗ノ優雅ナル、實ニ渾然タル一個ノ衆香國ナリ、而シテ我が父祖ノ興リシ所ニシテ、我が國民ノ今日アルヲ致シシ所以タル帝國ノ歴史ハ、即此ノ衆香國裏ニ於テ三千年間ニ經行シタル一場ノ仙游ナリ、此ノ優美ノ邦土ニシテ此ノ光輝アル國史アリ、帝國ノ歴史ヲ知ラント欲スル者、豈帝國ノ地勢ヲ察セズシテ可ナランヤ。

我が帝國ハ亞細亞大陸ノ東岸ニ沿ヒテ、東北ヨリ斜ニ西南ニ走レル群島ノ星羅ヨリ成ル、其ノ中淡路島、伊豫、二名、島田、筑紫、島州、壹岐、島津、島對、隱岐、島佐、渡島ハ、上古ヨリ其ノ名史乘ニ著レ、本土ト合セテ大八洲ト曰フ、後ニ北海道、千島、琉球、小笠原島等ヲ加ヘ、之ニ屬スル小嶼ノ數亦頗衆ク、面積ノ合計ニ萬五千方

里ニ幾シ。其ノ長サハ直徑一千里ヲ越エ、幅員ハ參差一ナラザレドモ、大抵狹處ハ三十餘里ニシテ、廣處ハ百二十餘里ニ達ス。北緯二十四度六分ヨリ起リテ、五十度五十六分ニ至リ、東經百二十二度四十五分ヨリ始マリテ、百五十六度三十分ニ終レリ。

其ノ四疆皆海ニシテ、大陸ト相隔チ、波濤ノ爲ニ容易ク交通スルコト能ハザリシハ、我が國民ノ血統ヲシテ統一ナラシメ、我が國家ヲシテ獨立ヲ保持セシムルニ利アリキ。然リト雖亦隔絶ノ甚シキ海外文物ノ移入ヲ害スルニ至ラズ、就中隣國ナル朝鮮支那トハ、上世ヨリ交通シテ、我ニ益シタル所少カラザリキ。

内國諸島ノ間ニ於テモ多少ノ海水ヲ隔ツト雖、沿岸航海ノ術ハ神代ヨリ開ケタル爲ニ、曾テ全國ノ統一ヲ礙ケズ却リテ之ヲ助ケタルハ、神武東征ノトキ專海程ニ依リ給ヒ、日本武尊ノ東征モ亦始メ海道ヲ取ラレシニ因リテ知ルベク、之ニ反シテ其ノ歸途ハ山道ニ由ラレシガ爲ニ、種々ノ困難ニ遭遇シ給ヒシヲ思フヘシ。

地形ノ著キ現象ハ山脈ニ富メルニ在リ、國中到ル處翠峯蜿蜒トシテ脈絡縱橫

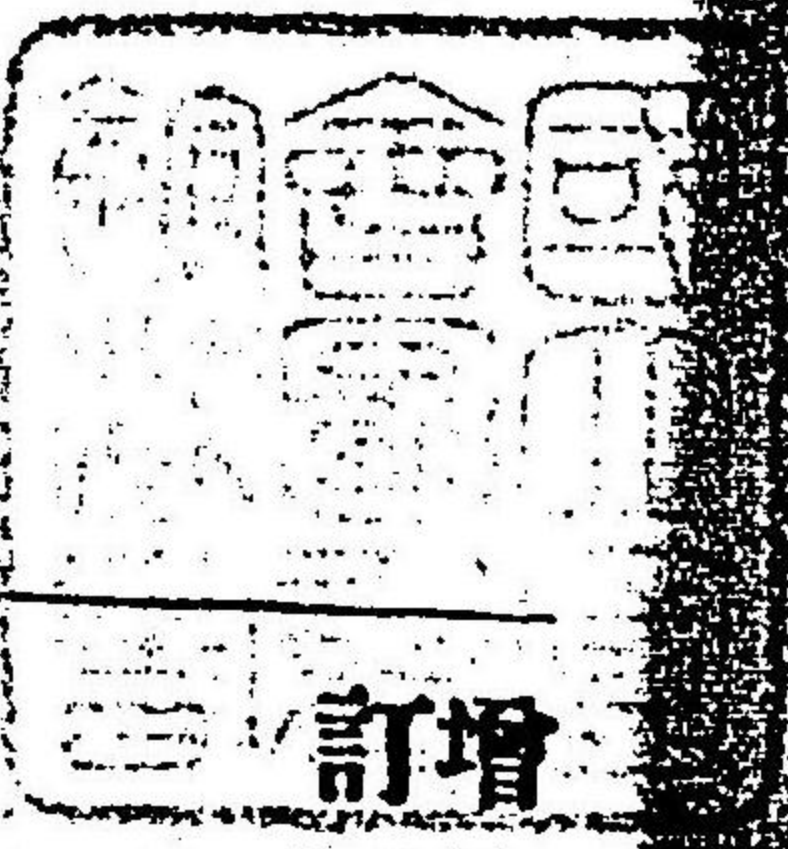
ニ亂走セリ。地文學者ノ説ニ據レハ、山脈ハ其ノ成立ノ性質ニ依リ、之ヲ古生紀山脈及火山質山脈ノ二種ニ區分スベシ。古生紀山脈ハ地皮凝化ノ際結成セル所ノ岩石ヲ以テ築カレ、概傾斜峻急ニシテ、屏障ノ如ク相連シ。コレニ屬スル山脈ハ植物繁茂シ、之ヲ望メハ森林蒼鬱タリ。火山質脈ハ地熱作用ニ依リ噴起セルモノナルガ故ニ、頂上常ニ倒扇形ヲナシ、其ノ舊火山ニ屬スルモノハ形體虧缺シ、奇巖怪石磊落トシテ、峭峻ノ狀ヲ呈ス。山麓ハ概延キテ廣漠タル原野ヲナシ、地味薄瘠ニシテ水濕ニ乏シク、或ハ卉木ヲ見ザルモノアリ。然レドモ水濕ノ溪澗ニハ樹幹長大ナル杉林及樺櫟等ノ森林アリ。要スルニ我が國ノ古生紀山脈ハ昔邦土ノ形勢ノ如ク粗<sup>\*</sup>粍形ヲ爲シテ連亘ス。則本邦ハ地皮凝縮ノ時ニ當リ、大陸東部ニ皺波ヲ爲シテ露出セシ波頭ニシテ、他ノ乾面ハ之ニ準シテ發育シタル舊墟ナルヲ知ルベシ。而シテ火山質山脈ハ其ノ内部ニ噴起シ、古生紀山脈ニ沿ヒテ駢越セルナリ。

矢津氏曰  
本地文學

此ノ如キ山脈ノ形勢ハ二ノ點ニ於テ歴史ニ影響シタリ。第一、山脈縱橫セルガ故ニ上古ヨリ諸道ヲ分ツニ主トシテ山脈ノ位置ニ循ヒ、國境亦多ク山岳ヲ以

テ割域トシタリ。箱根碓氷ノ山岳ハ中國ノ一部ヲ限リテ關東ト爲ス。則中央政權ノ萎靡セルニ當リテハ先離ル、モノヲ關東ナリトスルコト是古今ノ事跡ニ徴シテ其ノ歴史ニ影響セル最顯著ナルモノトス。不破鈴鹿ノ山岳ハ自近畿ノ要塞ヲ爲シ、壬申ノ亂起ルニ際シ、殆此ニ由リテ天下ヲ二分セントスル趨向ヲ生シタリ。又崇峰峻嶺遠ニ險ニ可カラザルヲ以テ、其ノ周遭ノ地ヲシテ宛然トシテ別境界ヲ爲シメ、久シク一統ヲ妨グタル例ハ、上古ノ大和ト近古ノ會津ニ視テ明瞭ナリ。而シテ交通ヲ阻遏スルニ至ラザルモ、地方各其ノ固有ノ習俗ヲ堅持シテ、互ニ相和融化洽スルコトナカラシメタリ。第二、古生紀山脈ト火山質山脈ト相錯ハレルヲ以テ、景致勝概變化極マリナク、激湍ノ鏡湖ハ各處ノ山上ニ散在ス。皆噴火口ノ跡ナリ。是ヨリ深淺タル淡水碧玉ヲ瀉ギテ巖壑ノ間ヲ流出シ、集リテ川河トナリ。郊野ヲ沃シテ終ニ海ニ入ル。山水ノ美ハ實ニ宇宙ニ冠絶セリ。而モ斷崖絕壁ヲ峭險恐ニシテ人ノ膽ヲ奪ヒ、望ム者ヲシテ自然勢力ノ崢嶸畏ル可キヲ惟ハシムルモノアルコトナク、概優和婉美明麗温軟ナルコト殆繪畫中ノ物ノ如シ。其ノ我が民種ヲシテ常ニ美術ノ念ニ富マ

シメ、優雅ノ情ニ厚カラシメタリシ効ハ固ヨリ著大ナリ。又惟フニ本邦人民ノ昔ヨリ今ニ至ルマテ華美ノ裝飾ヲ好マス、自然ノ素朴ヲ尊ブニ於テ、他ノ東洋民種ト大ニ異ル所アルモ、亦人工ノ美ヲ施サズト雖、自然ノ趣已ニ饒足セルニ由ルニ非ザルコト無キヲ得ゾヤ。地形ニ次ギテ本邦ノ歴史風俗ニ大關係ヲ有スルモノハ、氣候ノ和順ニシテ且變化多キニ在リ。地文學者ノ說ニ依レバ、日本ハ西北ニ莽蕩際ナキ大陸ヲ控ヘタルヲ以テ、其ノ氣象ニ感化セラル、コト多ク、他ノ同緯度ノ土地ニ比シレバ寒冷ノ候永シ。是冬季ハ主トシテ西北ノ風吹キ、大陸ノ冷氣ヲ齎シ來リテ夏日ノ氣温ヲ一掃シ去ルニ因ル。然レドモ幸ニ黑潮ノ南海ヨリ温氣ヲ運ビ來ルアリテ、版圖ノ四面ヲ環流スルガ故ニ、北來ノ嚴寒ヲシテ溫和ナラシム。從ヒテ種々ノ變化ヲ生ズ。四國島ノ南部ハ其ノ脊ニ三千五六百尺以上ノ連山ヲ環ラシ、南面ニハ黑潮ノ暖流ヲ受ク、之ニ感化セラル、ト雖、冬間ハ猶積雪皚々タルヲ見ル。其ノ最高ノ嶺ノ如キハ夏ニ至リテ始メテ消ユルモノアリ。又本州東南沿岸ノ郊野モ、冬期



# 帝國史略上卷

## 第一期 國民興起ノ代

### 第一章 神代

皇典講究所校閱  
文學士 有賀長雄編輯

#### ○節 建國神話

太古ノ時天照太神高皇產神ト相降リテ宜ハク  
夫ノ豊葦原瑞穗國ハ吾ガ子孫ノ玉タルベキ土地ナリ皇孫就テ治セ寶祚ノ  
隆エマサソコト天壤ト共ニ窮リ無カルベシト

我が日本建國ノ基礎實ニ此ニ在リ而シテ此ノ神話遠ク神代ノ昔ニ在リシヲ  
以テ其ノ由來ヲ知ラシメ建國以前ニ溯リテ神代ノ事ヲ述ベザルベカラズ  
高天原ニ神坐シキ天御中主神ト申シ其ノ次ヲ高皇產靈神ト申シ其ノ次ヲ神  
皇產靈神ト申ス之ヲ造化ノ三神トス。次ニ可美葦原彥與神次ニ天之常立神  
坐ス以上五神ヲ別天神ト云フ。造化ノ神天地ヲ創造シ給ヒテ後數神アリ國

造化ノ三神  
別天神

帝國史略 第一期 第一章 神代

天神七代

大八洲

諸册二神ノ  
三子

(11)

常立尊次ヲ豊斟淳尊次ヲ埜土煮尊沙土煮尊次ヲ角杵尊活杵尊次ヲ大戸道尊  
大苦邊尊次ヲ面足尊吾屋惶根尊トス此ノ六代ヲ經テ伊弉諾尊伊弉册尊ニ至  
ル之ヲ天神七代ト云フ。高天原ハ日本國民ノ遠祖タル諸神ノマシマス境域  
ナリ其ノ所在ヲ考定スルハ考古學ニ屬シ史學ノ直接ニ關スル所ニ非ズ。

○二 三神分治

伊弉諾尊伊弉册尊始メテ高天原ヨリ降りテ此ノ土ニ坐  
シ磯取盧島ニ入尋殿ヲ立テ都ト爲シ大八洲ノ國ヲ開キ給フ磯取盧島ハ即

淡路ノ小島ニシテ大八洲トハ淡路伊豫筑紫壹岐對馬隱岐佐渡大倭大國ナリ  
豐秋津洲ヲ云フ伊弉諾尊伊弉册尊三子ヲ生ミ給フ長子ヲ大日靈尊ト申ス光

華明彩四方ニ照徹ス二神喜ヒテ宣ハク吾ガ子多シト雖未此ノ如キ靈異ナル  
ハアラズ早ク天ニ送り授クルニ天上ノ事ヲ以テスベシト次ニ月神ヲ生ミ給  
フ其ノ光彩日ニアグリ故ニ又天ニ送ル。次ニ素盞鳴尊ヲ生ミ給フ勇悍ニシ  
テ無道ナリ常ニ哭泣シ給ヒシヲ以テ民人夭折シ青山變枯ス故ニ之ヲ根國ニ  
適ス所謂根國ノ所在モ亦考古學ニ讓リテ此ニ論議セズ。

○三 天照太神ノ岩戸隱

素盞鳴尊ノ根國ニ適セラレントシ給ヒシ時

天照太神天  
石窟ニ入り  
給フ

「暫ク高天原ニ赴キ姉尊ト相見テ而シテ後永ク退ラント請ヒ給ヘバ二神之ヲ  
許シ給ヘリ。尊ノ天ニ登リマサントスルニ當リ溟渤鼓動シ山岳鳴响ス天照  
太神素ヨリ尊ノ暴惡ヲ知り給フ來詣ノ狀ヲ聞キ給フニ至リテ驚キテ宣ハク  
「吾ガ弟ノ來ルコト豈善意ヲ以テセンヤ爾フニ奪國ノ志アラント乃髮ヲ結ヒ  
テ髻ト爲シ裝ヲ縛リテ袴ト爲シ八坂瓊五百箇御統珠ヲ以テ其ノ髻鬘及腕ニ  
纏ヒ背ニ千箇ノ鞆ト五百箇ノ鞆トヲ負ヒ臂ニ稜威ノ高柄ヲ着ク弓楯ヲ振リ  
起テ劍柄ヲ急握シ堅庭ヲ踏ミテ威勢ヲ示シ即尊ノ來マセル所以ヲ詰問シ給  
フ尊其ノ黒心ナキヲ誓ヒ自帶アル所ノ十握ノ劍ヲ太神ノ纏ヒ給ヘル八坂瓊  
五百箇御統珠ニ易ヘ以テ證トス。尊居ルコトヲ許サル而シテ其ノ所行甚無  
狀ナリ或ハ駒ヲ太神ノ御田ニ放チ或ハ太神新嘗ノ時ニ於テ新宮ヲ潰ス太神  
齋服殿ニ坐シテ神衣ヲ織リ給ヘル時殿甍ヲ穿チテ投ケ納レ給フニ至リ太神  
愠ヲ發シテ天石窟ニ入り磐戸ヲ閉ヂテ幽居シ給フ六合ノ内爲ニ常闇トナリ  
晝夜ヲ分タス群神愁ヘ迷フ。是ニ於テ高皇產靈神八十萬神ヲ天安河原ニ會  
シ騰ルベキ方ヲ議セシメ給フ。時ニ思兼神深ク思ヒ違ク慮リテ曰ハク太玉

八咫ノ鏡

八坂瓊の曲玉

神ヲシテ諸部ノ神ヲ率テ和幣ヲ造ラシムヘシ。石凝姥神ニハ天香山ノ銅ヲ以テ八咫ノ鏡三種ヲ鑄シメ、長白羽神ニハ麻ヲ種ニテ青和幣ヲ爲ラシメ、天羽槌雄神ニハ文布ヲ織ラシメ、柵機姫神ニハ神衣ヲ織ラシメ、柵明玉神ニハ八坂瓊五百箇、御統ノ曲玉三種ヲ作ラシメ、手置帆負彦狹知ノ二神ヲシテ御量ヲ作リ、大狹小狹ノ材ヲ伐リテ瑤殿ヲ作り、兼テ御笠及矛楯ヲ作ラシメ、天目一箇、神ヲシテ籬ノ刀斧鎌鐮ヲ作ラシメ、其ノ物既ニ備ハラベ、天香山ノ五百箇ノ眞賢木ヲ堀リ取り、上枝ニ玉ヲ懸ク、中枝ニ鏡ヲ懸ク、下枝ニ青白ノ和幣ヲ懸ケテ、太玉命ヲシテ捧持シテ稱讚セシメ、天兒屋根命ヲシテ相副ニ祈禱ヒシメ、又天鈿女命ヲシテ眞辟萬ヲ以テ鬘ト爲シ、蘿ヲ以テ手織ト爲シ、竹葉、飢賦木葉ヲ以テ手草ト爲シ、手ニ著鐸ノ矛ヲ持テテ石窟戸ノ前ニ立テ、延燎ヲ舉グテ巧ニ俳優ヲ作シ、相與ニ歌ヒ舞ハシムベシト。則具ニ議ノ如クス。時ニ天照太神獨謂ホサク、吾幽屏シテ天下悉闇カラシメ、然ルニ何ニシリテカ此ノ如ク歌樂スルト。聊戸ヲ開キテ窺ヒ給フ。爰ニ手力雄神其ノ扉ヲ引キ開ケテ、太神ヲ新殿ニ遷坐シ奉ル。此ノ時上天初メテ晴レ、衆俱ニ相見ルニ面地明白ナリ。手ヲ伸ベ歌舞

素盞鳴尊ヲ根國ニ逐ヒ給フ

素盞鳴尊大蛇ヲ斬リ給フ

素盞ノ劍

シ、相共ニ稱シテ曰ハク、アナオモシロト。面白ノ義ナリ。是ニ於テ素盞鳴尊ノ罪ヲ問ヒ、之ヲ根國ニ逐ヒ給フ。

○四節素盞鳴尊出雲ニ到ル 素盞鳴尊根國ニ行カントシ、先出雲ノ國ニ至リ給フ。時ニ籬ノ川上ニ老翁ト老婆トアリ、中間ニ一少女ヲ置キ、之ヲ撫テ、哭ク。尊其ノ故ヲ問ヒ給フニ、老翁對ヘテ曰ハク、吾ハ是國神ナリ。名ヲ足摩乳ト云ヒ、妻ガ名ヲ手摩乳ト云フ。童女ハ是吾ガ兒ナリ。奇稻田姫ト云フ。吾往ニ八箇ノ少女アリ、毎年八岐ノ大蛇ノ爲ニ吞マル。今此ノ少女亦將ニ吞マントス。故ニ哀傷ス。尊曰ハク、汝當ニ女ヲ以テ吾ニ奉ルヘシ。吾之ヲ救ハント。老翁勸ニ遣フ。尊乃命ヲテ八槽ノ酒ヲ釀サシメテ、大蛇ヲ待テ給フ。大蛇到ル。頭尾各、八岐アリ。松柏背ニ生シ、八丘八谷ノ間ニ蔓延ス。酒ヲ得テ酔ヒテ睡ル。是ニ於テ尊帶アル所ノ十握ノ劍ヲ以テ之ヲ寸斷シ給フニ、尾ニ至リテ、劍ノ刃少ク缺ケヌ。異ミテ之ヲ裂キ、一劍ヲ得給ヘリ。所謂叢雲ノ神劍三種一是ナリ。尊取リテ之ヲ天照太神ニ上獻シ給ヒキ。此ノ大蛇ト云フハ、出雲地方ニ在リシ勇猛ナル民族ノ酋長ナリシヲ、眞ノ大蛇ノ如ク傳ヘ誤リシモノニテ、女子ヲ取ルト云フハ、外

三十一文字  
ノ和歌ノ始

國祭祭服ノ  
ヲ定メ給

族ノ婦女ヲ掠奪シテ妻トスル野蠻ノ習慣ノ一例ナリト云フ説モアレド、必シ  
モ然ラズ。眞蛇ヲ神トシ畏レテ、婦女ヲ犠牲ニセシニモヤアラソ。又其劍ノ如キ  
ハ曾テ吞ミタル人ノ佩キタルモノノ腹中ニ残りシニモヤアラソ。素盞鳴尊ハ  
天國ノ文化ヲ受ケ、智勇モ高カリシニ因リ、容易ク此等ノ害毒ヲ除キテ、寶劍ヲ  
サヘ得給ヒシモノナルベシ。尊出雲ノ清地ニ宮ヲ構ヘ、奇稻田姬ヲ娶リ給フ。  
「やくもたつ、出雲八重垣つまごめに、八重垣つくる。その八重垣を」  
ト云ヘル歌ハ此ノ時ノ御詠ニシテ、三十一文字ノ和歌ノ始ナリ。奇稻田姬ノ  
生ミ給ヘル子ヲ大已貴神ト云フ。尊遂ニ根國ニ赴キ給ヘリ。

○五 大國主命ノ治 大已貴神ハ天孫ノ遺子トシテ國人ニ尊崇セラレタ  
リ。且高皇產靈神ノ子少彦名命モ亦來リテ、共ニ力ヲ戮セ、心ヲ一ニシテ天下ヲ  
經營シ、若生蕃産ノ爲ニ醫療ノ方ヲ定メ、又鳥獸昆虫ノ災ヲ攘フ爲ニ、禁厭ノ法  
ヲモ定メ給フ。是ニ因リテ權勢漸諸國ニ及ベリ。

案ズルニ大已貴神ハ素盞鳴尊ノ子トシテ、天神所傳ノ諸術ニ長シ給ヒシハ勿  
論、又韓土ト交通スルコトヲ得給ヒシニ因リテ、多ク近隣民族ノ知ラザル所ノ

大國主命  
出雲大社

葦原中國

諸術ヲ傳ヘ給ヒシモノカ。凡社會ノ未開ケザルニ當リ、衆人ヲ統屬スル權ヲ  
得ル所以ノモノ、武勇其ノ一二位シ、妙術之ニ次グ。社會學上ノ事實ヲ檢スルニ、  
醫術占術ヲ以テ君長タルコトヲ得タル者各地ニ多シ。案ズルニ大已貴神モ亦  
武勇ニ加アルニ、他人ノ知ラザル妙術ヲ以テシテ、大ニ衆人ニ歸服セラレ給ヘ  
ルモノナラン。既ニシテ大已貴神ノ德化ハ、出雲ヲ源トシテ廣ク山陰、山陽、北  
陸ノ諸道ニ被レリ。丹波ノ國名ハ、田庭ノ義ニシテ、命ノ此所ニ多ク農田ヲ拓  
キタマヘルニ由來スト云フ。時ニ伊弉諾尊伊弉册尊既ニ世ニ坐サズ、大已貴  
神獨權勢アリ、恰モ中央君主ノ如クナリキ。故ニ庶民之ヲ尊稱シテ大國主命ト  
云ヘリ。今出雲ノ大社ニ祭レル神是ナリ。大國主命ニ數子坐ス、長子ヲ事代主  
神ト云フ。父ノ權勢ヲ承ケテ邦土ヲ領シ給ヒキ。

○六 天神瓊々杵尊ヲ大日本ノ主トシ給フ 天照太神ニ男子坐  
ス、忍穗耳尊ト云フ。高皇產靈尊ノ女栲幡千千姬ヲ娶リ、彦火瓊々杵尊ヲ生ミ給  
フ。高皇產靈尊特ニ此ノ孫ヲ憐愛崇美シ、之ヲ立テ、葦原中國ノ主ト爲サント  
思ホス。葦原中國ハ豐葦原、瑞穗國又大八洲、大日本ト云フニ同シク、我が國ノ古

武甕槌神  
經津主神

名ナリ。時ニ其ノ國不順ノ徒多シ。故ニ高皇產靈尊之ヲ諸神ノ集議ニ問ヒ、先天  
穗日命ヲ遣シテ之ヲ鎮撫セシメ給フ。而ルニ天穗日命三年ニ至ルモ復命シ給  
ハズ。其ノ子大背飯三熊之大人ヲ遣ス。亦報聞ヒズ。乃更ニ諸神ヲ會シテ議シ、天  
稚彦ヲ遣シ給フ。其ノ武勇アルヲ以テナリ。而シテ天稚彦モ亦遂ニ復命セズ。却  
リテ女子ヲ娶リテ永ク葦原中國ニ坐ラント欲ス。後高皇產靈神ノ天ヨリ投ッ  
給ヒシ矢ニ中リテ死セリ。是ニ於テ又更ニ諸神ヲ會シテ議シ給フニ、兪曰ハク、  
「經津主神コソ佳クシト。時ニ武甕槌神進ミテ曰ハク、豈唯經津主神ノミ丈夫ニ  
シテ、吾丈夫ニ非ザラシヤト。其ノ辭氣甚慷慨ナリ。乃經津主神ト與ニ葦原中  
國ニ遣シキ。」

○七 節 出雲讓國

葦原中國ノカク治平ニ至リ難カリシハ、夫ノ大國主命ノ  
權勢既ニ廣ク諸國ニ及ビ、其ノ部下ニ殘賊強暴ノ徒多カリシニ因ル。是ヲ以テ  
經津主武甕槌ノ二神出雲ノ五十田狹ノ小汀ニ至リ、劔ヲ倒ニ地ニ植ユテ、大國  
主命ニ問ヒテ曰ハク、天照太神高皇產靈神天孫ヲ降シテ此ノ地ニ君臨セシメ  
給ハントス。故先我等二神ヲ遣シテ驅除平定セシメ給フナリ。汝ノ意何如當ニ

事代主命天  
孫命ヲ奉  
ル給フ

天ノ日嗣

寶祚無窮ノ  
神臨

三種ノ神器

避ルベキカ否ト。大國主命對ヘテ曰ハク、當ニ我が子ニ問ヒ、而シテ後報ズベシ  
ト。乃使者ヲシテ其ノ子事代主命ノ坐ス所ニ至リテ問ハシメ給フニ、事代主命  
使者ニ謂ツテ曰ハク、今天神此ノ借問ノ勅アリ。我が父宜シク避リ奉ルベシ。吾  
亦進フコト無カラント。言訖リテ先船ニ乘リテ去リ給フ。大國主命二神ニ白シ  
給ハク、我が怙メル子既ニ避リヌ。故ニ吾亦避ルヘシ。若吾防禦セバ、國內諸神必  
當ニ同シク防禦スベシ。今吾避リ奉ラバ、誰カ復敢テ順ハザル者アラント。乃其  
ノ劔ヲ以テ天神ニ奉リ給フ。時ニ大國主命ノ季子健御名方命天神ノ命ニ從  
ハズ。武甕槌神之ヲ敗リ、追ヒテ科野ノ洲羽海今ノ湖ニ至リ、竟ニ屈服セシメ給  
フ。大國主命之ヲ諭シテ曰ハク、天孫ハ既ニ天日嗣天日嗣タリ。僕及子孫常ニ相率井テ  
服從スベシト。天照太神ノ御系統ヲ天日嗣ト稱スルコト此ニ始マル。大國主  
命遂ニ去リテ常世國ニ入り坐シヌ。後世取防ナ配所ト似タルコト。

○八 節 天孫降臨

出雲平定ニ歸ス。天照太神ト高皇產靈尊ト寶祚無窮ノ神  
話ヲ垂レ給ヒシハ即此ノ時ナリ。太神乃三種ノ神器ヲ天孫ニ授ケ給フ。三種ノ  
神器トハ八咫鏡ト瓊雲劔ト八坂瓊曲玉トナリ。乃勅シ給ハク、吾ガ見此ノ寶鏡



天津神靈

中臣氏齊部  
米氏久祖

ヲ見ルコト當ニ吾ヲ視ルガ如クスベシ與ニ床ヲ同シクシ殿ヲ共ニシ以テ齋  
鏡ト爲ベシト。又天見屋根命太玉命天鈿女命ヲシテ配待セシメ勅シ給ハク  
汝天見屋根命太玉命二神宜シク天津神籬天津神籬用神ノ子孫ヲ齋フニ持チテ葦原  
中國ニ下リ吾ガ孫ノ爲ニ齋ヒ奉リ共ニ殿内ニ侍シテ能ク防禦セヨ又吾ガ高  
天原ニ所御齋庭ノ穗ヲ以テ當ニ吾ガ見ニ御ベシト又太玉命ニ勅シ給ハク宜  
シク諸部ノ神ヲ率ヒテ其ノ職ニ供奉スルコト天上ノ儀ノ如クセヨト。又天  
忍日命ヲシテ天穗津大來目ヲ帥井仗ヲ帶ヒテ前驅セシメ給フ。天見屋根命  
ニ中臣氏ノ祖太玉命ハ齊部氏ノ祖天忍日命ハ大伴氏ノ祖大來目ハ久米氏ノ  
祖ナリ並ニ勅ヲ奉シテ天孫ニ陪從シ歷世相承クテ各其ノ職ニ供シ給ヒキ。  
時ニ天孫ニ陪從シテ降來セルモノ總ベテ八十萬神ト稱ス猿田彦大神途ニ天  
孫ヲ迎ヘ奉ル天孫其ノ請ヲ納レテ筑紫ノ日向ノ高千穗峯ニ降り給フ日向ノ  
一國ノ稱ナリ

○九日向帝居 瓊々杵尊高千穗ニ降り給ヒシ後地ヲ四方ニ選ミ吾田ノ  
笠狹岬ヲ定メテ都トシ給フ今ノ薩摩加世田港是ナリ此ノ處ニ坐シテ木花咲

(110)

彦日々出見  
尊天位ヲ嗣  
給フ

天祖

耶姬ヲ娶リ火闌降命及彦日々出見尊ヲ生ミ給フ彦日々出見尊鹽土翁ノ故ニ  
依リ船ヲ造リテ綿津見國海神ノニ至リ坐ス歸ルニ及ビテ權勢火闌降命ニ越エ  
給フ火闌降命弟ニ推服シ其ノ宮ヲ護衛シ給ヘリト云フ命ノ後裔ヲ隼人ト稱  
ス一説ニ火闌降命彦日々出見尊共ニ日嗣ノ皇子ナリシガ其ノ間ニ争起リテ  
弟ノ皇子ヲ助ク奉ル者多ク出テ來シニ依リ兄ノ皇子ハ却リテ一地方ノ君長  
タルニ止マリ給ヒシナリト云フ。是ニ於テ彦日々出見尊瓊々杵尊ノ天位ヲ  
嗣ギ之ヲ其ノ御子鷦鷯草葺不合尊ニ傳ヘ給フ御母ハ綿津見神ノ女豐玉姬ニ  
坐ス葺不合尊御姨玉依姬ヲ娶リテ四子ヲ生ミ給フ長ヲ五瀬命次ヲ稻氷命  
次ヲ御毛沼命季ヲ磐余彦命ト云フ。葺不合尊崩シ給ヒシカバ日向ノ吾平山  
ノ陵ニ葬リ奉リヌ。以下三代ノ事跡ハ多ク傳ハラズ其ノ年所亦詳ナラズ概  
シテ天祖ト稱シ奉ル。

## 第二章 神武天皇建國

神武天皇  
東征ノ詔

○節一 皇軍東征 五瀬命、盤余彥尊、日向ニ坐ス。盤余彥尊、諸皇兄及諸皇子等ニ宣ハク、昔我が天神高皇產靈神、大日靈尊天照此ノ豊葦原瑞穗國ヲ舉ゲテ、我が天祖彥火瓊杵尊ニ授ヘリ。是ニ於テ瓊々杵尊、天關ヲ開キ、雲路ヲ披キ、仙蹕ヲ馭リ、以テ戻止シタマフ。是ノ時、運鴻荒ニ屬シ、時草昧ニ鍾レリ。故ニ藥以テ正ヲ養ヒ、此ノ四偏ヲ治ス。皇祖皇考乃神乃聖、慶ヲ積ミ、暉ヲ重テタマヒ、多ク年所ヲ歷タリ。而シテ遼遠ノ地、猶未王澤ニ霑ハズ。遂ニ邑ニ君アリ、村ニ長アリ。各自分レテ以テ相凌轢セシム。又鹽土翁ニ聞クニ曰ハク、東ニ美地アリ、青山四周ス。其ノ中ニ亦天ノ磐船イハフネニ乗シテ飛降セシ者アリト。余謂フニ、其ノ地ハ必以テ天業ヲ恢弘シ、天下ニ光宅スルニ足ルベシ。蓋六合ノ中心カ、厥ノ飛降セシ者ハ、是饒速日ニギハヤヒヲ謂フカ。何ゾ就キテ都セザランヤト日本諸皇子對ヘテ曰ハク、理實ニ灼然タリ。我等亦恒ニ以テ念ト爲ス。宜シク早ク之ヲ行ヒ給フベシト。

以上盤余彥尊ノ勅語ハ、日本國家ノ由來ヲ知ルニ於テ最緊要ナルモノトス。昔

東征ノ目的

東征ノ沿路

通歴史ノ傳フル所ニ依レバ、日本全國ヲ統治スル權ノ我が皇室ニ歸シタルハ、神武天皇大和ヲ征服シ、崇神天皇四道ニ將軍ヲ發シ、景行天皇日本武尊ヲシテ東夷ヲ征伐セシメ、給ヒタル結果トシテ、版圖漸増大セルニ因ルモノナリト。若夫此ノ如クナラバ、豊葦原瑞穗國ハ是我ガ子孫ノ王タルベキ地ナリト。宜ヘル神話ハ、將來ヲ期シタル豫言タルニ過ギズト雖、以上盤余彥尊ノ勅語ニ依レバ、神代ニ於テ日本全土ハ已ニ我が皇家ノ統治ニ歸シ、爾後ノ變遷ニ因リ、更ニ君長割據ノ狀ニ陥リタルモノナリ。是ヲ以テ神武ノ東征ハ、新土ノ占奪ニ非ズシテ、舊土ノ再興タリシナリ。是獨盤余彥尊ノ勅語ニ徵スベキノミナラズ、又事實ニ徵シテ明ナル所ナリ。例ヘバ下總ノ香取ニ香取神社アリ、常陸ノ鹿島ニ鹿島神社アリテ、經津主、武甕槌ノ二神ヲ祭レルガ如キ、安房ノ安房神社ニ天宮命ヲ祭レルガ如キ、皆以テ神武ノ時既ニ皇土ノ此ノ地方ニ及ヒタルヲ證スルニ足レリ日本。

甲寅ノ年紀元前十月、舟師ヲ發シテ東征シ、速吸水門ニ至リ給フ。時ニ漁人アリ、艇ニ乘リテ至リ白サク、臣ハ是國神ナリ。名ヲ珍彥ト云フ。曲浦ニ釣漁ス。天神ノ

長隨彦  
命ヲ奉ズ

御子來マセリト聞キ即迎ヘ奉ルナリト。乃珍彦ヲ以テ航路ノ導者ト爲シタマヘリ。蓋自何々ノ國、神ト稱セシハ、皆一地方部族ノ酋長ニシテ、其ノ祖神ノ後裔トシテ信崇セラレシモノナリ。皇軍筑紫ノ菟狹ニ至レル時ニ、菟狹津彦、菟狹津姫菟狹ノ祖、菟狹ノ川上ニ於テ一柱アヒトツツ、臈宮ヲ造リテ、皇子等ヲ饗シ奉ル。十一月、筑紫國ノ岡水門郡筑前遠賀ニ至リ、十二月、安藝國ニ入り、埃宮ニ坐ス。翌年三月、海ニ從リテ吉備國ニ入り、行宮ヲ造リテ居タマフ。之ヲ高島宮ト云フ。止マルコト數年、舟楫ヲ備ヘ、兵食ヲ蓄ヘ、一舉シテ天下ヲ平ケント思ホス。皇師遂ニ舩艦相接シ、東ノカタ浪速國津ニ至リ、進ミテ日下ノ藝津ニ抵リ、則上陸シテ龍田ニ赴キ給フニ、路狹險ニシテ人並行スルヲ得ズ。因リテ軍ヲ還シ、更ニ膽駒山ヲ踰エテ倭國ニ入ラントシ給ヘリ。

○二 倭國及長隨彦

時ニ倭國ノ登美郡城上ニ君長アリ。長隨彦ト云フ。彦ノ字ヲ其ノ名ニ負ヘルヨリ思ヘバ、元天孫ト同シ民種ナルベシ。饒速日命ヲ女婿ト爲シ、近隣ヲ統屬シ、權勢頗大ナリ。舊事記ニ依レバ、饒速日命ハ是火明命ノ異名ニシテ、天忍穗耳尊ノ子瓊々杵尊ノ兄ナリ。其ノ長子ニシテ皇統ヲ嗣ギ給ハ

長隨彦  
命ヲ奉ズ

ザリシハ、獨饒速日命ノミナラズ、太古ニ於テ多ク其ノ類例ヲ存スルナリ。長隨彦皇軍ノ來襲ヲ聞キ、大衆ヲ以テ逆戰ス。五瀬命、孔舍衙坂ニ於テ流矢ヲ脇脛ニ受ケ給フ。磐余彦尊之ヲ憂ヒ、策ヲ運ラシテ宣ハク、我等ハ是日神ノ子孫ナリ。而ルニ日ニ向ヒ虜ヲ征ス。コレ天道ニ逆フナリ。退キテ弱キヲ示シ、神祇ヲ禮祭シ、日ヲ負ヒ影ニ隨ヒテ戰ハソニハ若カズ。則又ニ血ヌラズシテ虜自敗レント、愈日ハク然リト。乃軍ヲ還シ給フ。五月朔、皇軍海ニ依リ芽渟山城水門ニ至ル。時ニ五瀬命矢創痛キコト甚シ、劔ヲ撫シ雄語シテ曰ハク、慨哉大丈夫、虜手ニ傷クラレ、報イズシテ死ナンヤト。因リテ其ノ處ヲ號シテ雄水門和泉國日根郡ト云フ。遂ニ軍中ニ薨シ給ヘリ。六月、皇軍名草邑ニ至ル。酋長アリ。名草戸畔ト云フ。皇命ニ服セザルヲ以テ誅セラル。遂ニ狹野ヲ越エテ熊野ニ到リ、天磐舟ニ登リテ漸進ム。海中風起リ、皇舟漂蕩ス。是ノ時稻氷命ハ海ニ入り給ヒ、御毛沼命ハ常世郷ニ往キ給ヘリ。一説ニ飴飯命ノ子孫後ニ新羅ノ主トナレリト云フ。磐余彦、皇太子手研耳命ト軍ヲ進メテ熊野ノ荒坂ノ津ニ至リ、酋長丹敷戸畔ヲ誅シ給フ。時ニ神アリ、毒氣ヲ吐キ、人物咸瘞ス。

新羅ノ主トナル

○三節 頭八咫鳥及兄猾弟猾

士卒復醒ムルニ及ビ進ミテ中州大和本部ニ入リ給ハントス。山中峻絶行ク可キ路ナシ。時ニ磐余彦尊ノ御夢ニ天照太神訓ヘテ宣ハク、朕今頭八咫鳥ヲ遣サシ。宜シク以テ嚮導者ヲラシムヘシト。果シテ頭八咫鳥アリ、空ヨリ飛ビ降ル。磐余彦尊宣ハク、此ノ鳥ノ來ルコト自祥夢ニ叶ヘリ。大哉赫哉。我が祖天照太神以テ基業ヲ助成シ給ハントスルカト。日臣命大來目ノ將士ヲ督シテ山ヲ蹈ミ啓行ス。乃鳥ノ向フ所ヲ仰觀シ、之ヲ追ヒテ遂ニ菟田下縣ニ達ス。此ノ功ニ因リ日臣命ノ名ヲ道臣ト改メ給フ。道臣ノ後ヲ大伴氏ト云ヒ、代々皇軍ニ將タリ。菟田縣ニ魁帥アリ。兄猾弟猾ト云フ。八月、之ヲ皇軍ニ召ス。兄猾ハ來ラズ、弟猾ハ即軍門ニ詣リテ拜シ、且白シテ曰ハク、臣ガ兄ナル兄猾天孫ノ到リ坐セルヲ聽キ、即兵ヲ起シテ襲ハントス。皇師ノ威ヲ望ミ、見懼レテ敢テ敵セズ。乃潛ニ其ノ兵ヲ伏セ、權ニ新宮ヲ作リテ、殿内ニ機ヲ施シ、請嬰ノ時ヲ以テ難ヲ作サントス。願ハクハ之ガ備ヲ爲シ給ヘト。乃道臣命ヲ遣シテ其ノ逆狀ヲ察セシメ給フ。道臣命審ニ其ノ賊心ヲ知り、大ニ怒リ、詰責シテ曰ハク、爾ガ造ル所ノ屋ニハ爾自居レト。劍ヲ接シ弓ヲ彎キテ、催シ入ラシム。兄猾

頭八咫鳥ノ嚮導

道ノ臣命ノ大伴氏

辭スルニ言ナク、乃自機ニ陥リテ壓死ス。而シテ弟猾ハ大ニ牛酒ヲ設ケテ皇朝ヲ褻シ奉リタリ。

○四節 吉野ノ土民ヲ服ス

是ヨリ後磐余彦尊吉野ノ地ヲ定メ給ハント欲シ、菟田ノ穿邑ヨリ親シク輕兵ヲ率非テ巡狩シ、吉野ニ至リ給フ。時ニ人アリ、井中ヨリ出ヅ。光リテ尾アリ。尊問ヒタマハク、汝ハ何人ゾ。對ヘテ曰ハク、臣ハ是國神ナリ。名ヲ井光ト云フ。今天孫ノ來マセルヲ聞キ、迎ヘ奉ルナリト。是即吉野首部ノ始祖ナリ。又進ミ給フニ、更ニ人アリ、磐石ヲ披キテ出ヅ。尊問ヒタマハク、汝ハ何人ゾ。對ヘテ曰ハク、臣ハ是磐排別ノ子ナリト。是即吉野ノ國巢部ノ始祖ナリ。又水ニ縁リ西行シ給フ。時ニ梁ヲ作り魚ヲ捕ル者アリ。尊問ヒタマハク、汝ハ何人ゾ。對ヘテ曰ハク、臣ハ是菟直擔ノ子ナリト。是即阿太養鷓部ノ始祖ナリ。凡此等ハ皆天孫ヨリ前ニ日本ノ國土ニ在リシ部民ニシテ、既ニ久シク此ニ土着シ、其ノ祖先ヲ神トシ崇ヒ、此ノ神ノ嫡流ヲ受ケタル者代々酋長トナリテ、自國神ト稱セシナルヘシ。而シテ天孫ノ至リマセルヲ聞キ、迎ヘテ之ニ歸服シ、天孫モ亦之ヲ奴婢トセズ、良民トシテ仍其ノ土地ニ住シ、其ノ國神ヲ奉ズルコト

吉野ノ國神

八十梟帥

(一八)

ヲ許シ給ヘルヲ以テ見レバ此等ハ元天孫ト別種ノ民族ニハ非ザリシナリ。  
 ○五節天神ヲ禱リ八十梟帥ヲ伐ツ 當時又所々ニ別種ノ勇悍ナル  
 民族アリ勇猛ニシテ群居セルニ因リ之ヲ八十梟帥ト稱ス。九月磐余彦尊高  
 倉山ニ陟リ國中ヲ瞻望シ給フ時ニ國見丘上ニ八十梟帥アリ男坂ニ男軍  
 正ヲ置キ女坂ニ女軍副ヲ置キ墨坂ニ煉炭ヲ置キ以テ備フ而シテ又磐余彦  
 尊ハ兄磯城弟磯城ノ軍充滿セリ賊虜ノ據ル所皆要害ノ地ナリ磐余彦尊之ヲ惡  
 ミ夜自祈リテ寢給フ夢ニ天神アリ訓ヘタマハク天香山ノ社ノ中ノ土ヲ取リ  
 テ瓮ヲ造リ以テ天神地祇ヲ敬祭スベシト醒メ給フニ及ビ弟猪亦奏シテ曰ハ  
 ク倭國ノ磯城邑ニ磯城ノ八十梟帥アリ高尾張邑ニ赤銅ノ八十梟帥アリ皆拒  
 キ戰ヒ奉ラントス宜シク天香山ノ土ヲ取リテ瓮ヲ造リ以テ天社國社ノ神ヲ  
 祭リ給フベシト尊其ノ御夢ト符節ヲ合スルガ如クナルヲ喜ビ椎根津彦ト弟  
 猪トニ弊衣ヲ著クテ老翁老嫗ノ裝ヲ爲サシメ天香山ニ到リ土ヲ取ラシメ給  
 フ而シテ賊虜之ヲ知ラザルナリ。瓮成リテ尊菟田川ノ朝原ニ於テ咒著シ乃  
 祈リテ宣ハク吾今瓮ヲ以テ水無クシテ飴ヲ作ラソ飴成ラバ則吾鋒刃ノ威ヲ

八十梟帥等  
ケノ賊虜ヲ平  
ケ給フ

兄磯城  
弟磯城

假ラズシテ天下ヲ平ケント飴即自成ル又祈リタマハク吾今瓮ヲ以テ丹生ノ  
 川ニ沈メシテ大小ノ魚醉ヒテ流ルコト枝葉ノ如クナラバ吾必能ク此ノ國ヲ  
 定メント頃ニシテ魚皆浮ミ出テ水ニ隨ヒテ喰嚼ス尊大ニ喜ビ菟田ノ川上ノ  
 五百箇眞坂樹ヲ以テ諸神ヲ祭り十月軍ヲ勒シテ八十梟帥ヲ國見丘ニ擊チ之  
 ヲ斬リ給フ又道臣命ニ勅シ大來目部ヲ帥井テ忍坂邑ニ於テ盛ニ宴饗ヲ設ケ  
 以テ虜ヲ誘ハシメ給フ酒酣ナルト道臣命起チテ歌フ士卒歌ヲ聞キ俱ニ其  
 ノ劔ヲ拔キテ一時ニ虜ヲ殺シ一人ヲ殘サザリキ。

十一月皇軍大舉シテ磯城彦彦同種ナリシヲ知ルベシトテ攻メントス先使ヲ遣シ  
 テ兄磯城ヲ徵サシメ給フ兄磯城命ヲ承ケズ次ニ頭八咫鳥ヲ遣シテ弟磯城ヲ  
 説カシメ給ヒシニ弟磯城命ニ服シテ詣リ乃白サク我が兄八十梟帥ヲ殺メ兵  
 甲ヲ具ヘテ抗シ奉ラントス早ク之ヲ圖リ給ヘト是ニ於テ磐余彦尊諸將ヲ會  
 シテ策ヲ問ヒ給フ諸將曰ハク兄磯城ハ賊賊ナリ宜シク先弟磯城ヲ遣リ之ヲ  
 諭サシメ并セテ兄倉下弟倉下ヲ説カシメ若竟ニ歸順セザラバ則兵ヲ擧ゲテ  
 之ニ臨ムモ未晚カラズト乃弟磯城ヲ遣リ利害ヲ説カシメ給フ而シテ兄磯城

萬軍ノ騷歌

等猶迷圖ヲ守リ、肯テ承伏セス。時ニ椎根津彦謀ヲ獻シテ曰ハク、宜シク先我ガ女軍ヲ遣リ、忍坂ノ道ヨリ出テシメ給フベシ、虜之ヲ見ハ、必銃ヲ盡シテ之ニ赴カン。吾則勁卒ヲ驅馳シテ直ニ墨阪ニ向ヒ、菟田川ノ水ヲ以テ其ノ炭火ニ灌ギ、進ミテ賊ノ不意ヲ突カント。尊此ノ策ヲ善シトシ、先女軍ヲ出タシ給フ。時ニ皇軍歴戰疲弊ス。尊乃謠歌ヲ爲リ、將卒ノ心ヲ慰メ給ヘリ。其ノ御歌ニ曰ハク、  
「たゝなめて、田並いなさのやまの伊那山、菟このまゆも、木水の、間いゆきまも  
らひ、行キ守たゝかへば、暇へわれはやえぬ、我肌エタ、鳴しまつとり、鳥うかひが  
とも、船船、渡渡、部いまずけに、今助ケニ來ト。

遂ニ男軍ヲ以テ墨阪ヲ越エ、前後ヨリ挾撃シテ兄磯城ヲ斬ルコトヲ得タリ。

金色ノ靈鷲

○六節 饒速日命歸順

十二月、遂ニ長髓彦ヲ擊チ給フ。連戰シテ勝タス。時

ニ忽然天陰リ雨降ル。乃金色ノ靈鷲アリ、飛ヒ來テ御弓ノ餌ニ止マル。光暉流電ノ如シ。長髓彦ノ軍卒之ヲ見テ迷眩シ、復力戰スルコト能ハザリキ。是ニ於テ長髓彦使テ磐余彦、尊ニ奉リテ言サク、此ニ天神ノ子坐ス。天磐船ニ乘リテ降り給ヘリ。楡玉饒速日命ト曰フ。吾ガ妹三炊屋姫ヲ娶リテ兒ヲ生ミタマフ。可美真

手命ト曰フ。故ニ吾饒速日命ヲ以テ君ト爲シ奉レリ。天神ノ子豈兩種アラノヤ。

謂フニ尊ニハ天神ノ子ト稱シテ、人ノ地ヲ奪ハントシ給フナリト。磐余彦、尊宣

ハク、天神ノ子亦多シ。汝ノ君トスル所是實ニ天神ノ子ナラバ、必表物アラソ。以

テ示スベシト。長髓彦乃饒速日命ノ天羽羽矢一雙及步鞞ヲ以テ示シ奉ル。是實

物ナリ。磐余彦、尊モ亦其ノ御スル所ノ天羽羽矢及步鞞ヲ以テ長髓彦ニ示シ給

フ。長髓彦其ノ偽ニ非ザルヲ知ルト雖、猶迷圖ヲ改ムル意ナシ。爰ニ饒速日命、天

孫ニシテ始メテ能ク此ノ如ク慰撫ナルベキヲ知り、又長髓彦ノ稟性復恨ニシ

テ、教フルニ天人ノ際ヲ以テス可カラサルヲ悟リ、乃之ヲ殺シ、其ノ衆ヲ率井テ

磐余彦、尊ニ歸順ス。尊褒メテ之ヲ寵シ給フ。饒速日命ノ後ハ、常ニ兵ヲ將井テ朝

廷ニ奉事シ、物部氏ト稱ス。此ノ氏ハ後ノ歴史ニ大ナル關係アリ。

○七節 處々ノ土蜘蛛ヲ誅ス 翌年二月、尊諸將ニ命ワテ士卒ヲ練ラシ

メ給フ。是ノ時波修、丘岬ニ新城、戸畔アリ。又和珉、坂下ニ居勢祝アリ。長柄、丘岬

ニ猪祝アリ。此ノ三處ノ土蜘蛛、其ノ勇力ヲ恃ミテ歸順セズ。乃偏師ヲ遣シテ皆

之ヲ誅シ給ヘリ。又高尾張、邑ニ土蜘蛛アリ。其ノ人ト爲リ身短クシテ手足長

葛城ノ地名  
土蜘蛛ノ義

シ。侏儒ト相似タリ。皇軍葛ノ綱ヲ結ビテ掩襲シ之ヲ殺ス。葛城ノ地名此ニ始マ  
ルトイフ。蓋土蜘蛛ハ國中各地ニ在リシ劣等ナル土民ナリ。ツチグモハ、ツチ  
ゴモリノ義ニシテ、其ノ穴居セシヨリ此ノ稱アリ。方今諸方ニ見ル所ノ穴居ノ  
跡ハ、此ノ民種ノ住ミシモノ多シ。脛長クシテ早ク走ル。故ニ八咫トモ云フ。又  
佐伯ノ稱アリ。民邑ヲ侵シ擾ス故ナリト云ヒ、又言語器シキ故ナリト云フ。此  
ノ民族ハ勇悍ナレドモ、未刀劍ノ用ヲ知ラズ。男女別ナク、父子親マズ、群黨ヲ結  
ビ、鳥獸ヲ獵リテ生活シ、常ニ侵奪ヲ事トセリ。

○八帝宅經營 三月、磐余彦尊令ヲ下シテ宣ハク、我東征シテヨリ茲ニ年  
アリ。皇天ノ威ニ頼リ、兇徒戮ニ就ク。邊土未清カラス、餘妖尙梗レタリト雖、中州  
和大地マタ風塵ナシ。賊ニ宜シク皇都ヲ恢廓シ、大壯ヲ規摹スヘシ。而シテ、今運  
此ノ屯蒙ニ屬シ、民心朴素ニシテ、巢棲穴居ノ習俗惟常ナリ。夫大人ノ制ヲ立ッ  
ルハ、義必時ニ隨フ。苟モ民ニ利アラバ、何ゾ聖造タルヲ妨ケン。且當ニ山林ヲ披  
拂シ、宮室ヲ經營シ、恭シク寶位ニ臨ミ、以テ元元ヲ鎮ムヘシ。上ハ即乾靈授國ノ  
德ニ答ヘ、下ハ則皇孫養正ノ心ヲ弘メン。然シテ後ニ六合ヲ兼テ都ヲ開キ、八

播磨ノ都

國家經營ノ  
第一段

正后ヲ華胄  
ニ求メ給フ

國家經營ノ  
第二段

紘ヲ掩ヒテ宇ト爲スベシ。亦可ナラズヤ、夫ノ畝傍山ノ東南播磨ノ地ヲ觀レハ、  
蓋國ノ塊區ナルカ。之ヲ治ムベシト。同月有司ニ命シテ帝宅ヲ經營セシメ給フ。  
リ。日本按ズルニ帝宅經營ハ、帝位ノ形體ヲ備フル始メナリ。而シテ其ノ意亦穴  
居巢棲ノ弊風ヲ改メ、民庶ヲ導キテ文明ノ域ニ進マシメ給フニ在リ。之ヲ皇祖  
國家經營ノ第一段トス。

○九納妃 次ニ磐余彦尊正后ヲ立テント欲シ、廣ク華胄ヲ求メ給フ。時ニ人  
アリ、奏シテ曰ハク、事代主神、三島瀧、楸耳神ノ女玉楯媛ニ婚シテ生ミ給ヘル子  
坐ス。名ヲ媛、昭韞五十鈴媛命ト云フ。是國色ノ秀ナル者ナリト。尊之ヲ悦ヒ、九月、  
納レテ正后トシ給ヘリ。蓋是ヨリ先尊既ニ后アリ。皇子アリ。而シテ更ニ正后ヲ  
華胄ニ求メ給ヘル所以ノモノハ、主トシテ系統ヲ重シ給フニ因ル。即萬人ノ  
尊敬ヲ受クベキ家系ニ出テタル女子ヲ納レ、以テ寶祚ヲ傳フルニ適セル日嗣  
皇子ヲ生マシメ給ハンガ爲ナリ。天神ノ系統ハ實ニ日本國家第一ノ基本ニシ  
テ、此ノ納妃ノ事ニ因リ、始メテ固キヲ得タリト謂フ可シ。之ヲ國家經營ノ第二  
段トス。

國家經營ノ  
第三段

神武天皇ノ  
御稱號

紀元第一年

地方制度ノ  
始

國家經營ノ  
第四段

(二四)

○十 登位 翌年正月、誓余彦尊帝位ニ、橿原ノ宮ニ即キ給フ。之ヲ國家經營ノ第三段トス。古語ニ之ヲ稱シテ、畝傍ノ橿原ニ、底磐根宮柱太立高天原、櫛風岐時始馭天下天皇ト申ス。御號ハ神日本磐余彦火火出見天皇ト申ス。正妃ヲ尊ミテ皇后ト爲シ給フ。皇子神八井耳命、淳名川耳尊ヲ生ミ坐ス。登位ノ年ヲ天皇ノ元年トシ、之ヲ紀元第一年ニ數フ。

○十一 賞功 二年二月、天皇功ヲ定メ賞ヲ行ヒ給フ。道臣命ニ宅地ヲ賜ヒ、鎭坂邑ニ居ラシメ、以テ之ヲ寵異ス。大來目ヲシテ畝傍山ノ西ノ川邊ニ居ラシム。是皇軍ノ居地ヲ定メテ護衛ニ供シ給ヘルナリ。因リテ其ノ地ヲ來目久邑ト云フ。珍彦ハ航路ヲ導キ奉リシ功ヲ以テ、倭國造トシ給フ。又弟猪熊ニ、猛田邑ヲ賜ヒ、因リテ猛田縣主ト爲シ、弟磯城ヲ磯城縣主ト爲シ、劔根ト云フ者ヲ葛城國造ト爲シ給フ。頭八咫鳥モ亦賞アリ。其ノ子孫ハ即葛野縣主、殿部コレナリ。カク地方ニ國造、縣主ヲ置カレシハ、即地方制度ノ始メニシテ、重要ナル政體ノ基本トナレルコト後ニ知ルベシ。而シテ兒屋根命ノ裔ト太玉命ノ裔トハ、常ニ宮中ニ陪侍シテ其ノ職ヲ盡セシナリ。以上ヲ國家經營ノ第四段トス。

靈時ヲ鳥見  
山ニ立ツ

祭祖ノ理由

國家經營ノ  
第五段

皇考ノ陵ヲ  
拜シ給フ

○十二 祭祖 四年二月、詔シ給ハク、我が皇祖ノ靈天ヨリ降臨シテ朕ノ躬ヲ光助シ給フ。今諸庸己ニ平キ、海内無事ナリ。以テ天神ヲ郊祀シ、用テ大孝ヲ申フベキナリト。乃靈時ヲ鳥見山ノ中ニ立テ、天照太神、高皇產靈神、神皇產靈神ヲ祭リ給フ。カク天神ヲ祭リ給ヘルハ、天照太神ハ天皇ノ皇祖ニ坐シテ、高皇產靈神、神皇產靈神ハ天祖ニマシマセハ、コレヲ天神ヲ尊敬シテ孝道ヲ盡シ、傍天皇ハ其ノ後アルコトヲ廣ク天下ニ示シ給ハシガ爲ナリ。蓋本邦ノ民、天孫ハ大八洲ノ君主ニ坐スコトヲ知ラザル者ナシト雖、世繼ノ次第ヲ知ル者尠ク、別クテ大和以東ノ人民ハ絶エテ之ヲ知ラザリシナルベシ。乃祖神禮拜ノ道ニ依リ、人心ヲ繫ギ給ヘルナリ。之ヲ國家經營ノ第五段トス。

○十三 巡國 日本紀古事記ニハ、錄セザルコトナレド、天書ノ傳記ニ依レバ、神武天皇大倭ニ於テ大業ヲ立テサセ給ヒ、シ後、十二年六月ヲ以テ、更ニ日向ニ行幸シ、皇祖皇考等ノ陵ヲ拜シ、之ヲ守衛セシメ給ヘル由見エタリ。而シテ學者皆天書ノ據ルベキヲ信ズ。三十一年四月、天皇倭國ヲ巡視シ、腋上磯間丘ニ登リテ國狀ヲ回望シテ宣ハク、あなにはや、斯ナクにをえつ、うつゆふのまさき



國家經營ノ  
第六段

我が國ノ古  
稱ノ字由來

大倭ヲ日本  
ニ改ム

二三〇

に内木輪、といへど、あきつ、晴の、となり、晴せるかごとし、是ヨリ大倭ヲアキ

ツト呼フコト起リ、諸國巡狩ヲ以テ國家經營ノ第六段トス。

此ノ時神武天皇ノ巡視シ給ヒシハ、後ノ所謂大和ノミナリシカモ知ルベカラ

ズト雖、日本全國ヲ指シテ、ヤマトト云フモ神代ヨリノコトナリ。日本紀記者ノ

語ニ、昔伊弉諾、尊此ノ國ヲ目シテ曰ハク、日本ハ浦安ノ國、細戈千足ノ國、磯輪上

秀眞ノ國ナリトアリ。又倭ノ字ヲ用ウルコトハ、倭奴ニ起ルト云フ。倭奴ハ筑

前ノ地名ニシテ、或ハ伊親、怡士等ノ字ヲ宛ツ。此ノ地ノ人始メテ漢國ニ通信

シヨリ、漢人我ヲ呼ビテ倭ト云ヘリトナン。其ノ後、全國ニハ大倭ノ字ヲ用井、

一國ニハ大和ノ字ヲ用井テ區別シタリ。孝徳天皇ノ朝ニ大倭ノ字ヲ日本ニ

改ム。日本ハ元韓漢ノ我ヲ稱スルニ用井シ所ナリ。而シテ初メハ之ヲモ、ヤマト

ト訓ミシガ、後ニハ字音ニテ、ニホムト讀ムコト、ナレリ。

四十二年、皇子淳名川耳尊ヲ立テ、皇太子トシ給フ。

七十二年三月、道臣命ヲ諸州ニ遣シテ皇風ノ王澤ヲ親ハシメ給フ。註

七十六年、天皇橿原宮ニ崩ッ給ヘリ。御年一百二十七歳ト傳フ。後ニ神武天皇

ト證シ奉ル。

第三章 日本國民成立

○一 民衆ノ成分 凡國民興敗ノ原因ヲ詳ニセント欲スル者ハ、國土ノ漸  
 擴張セシ次第ヲ知ルヲ要スルノミナラズ、又此ノ國土ニ如何ナル民種アリテ、  
 如何ナル勢力ヲ以テ之ヲ團結シタルカヲ知ラザルベカラズ、即各國地勢ハ大  
 同小異ナレドモ、國體ニ於テ大差アル所以ノモノハ、初メ其ノ國民ヲ組成シタ  
 ル民衆ノ情勢如何ニ因ルモノ多クレバナリ、山川風土固ヨリ國體ニ影響セザ  
 ルニアラズ、然レドモ其ノ影響ハ、民種ノ單純ナルト複雑ナルトニ因リ、又ハ專  
 武力ヲ以テ之ヲ團結シタルト、他ノ勢力ヲ以テ之ヲ統一シタルトニ因ルモノ  
 ニ比シテ遙ニ輕少ナリ、今日本國民ノ當初ニ於ケル民衆ノ成分ヲ察スルニ三  
 種アリ、曰ハク天孫及天神地祇ノ民種、曰ハク島帥民種、曰ハク穴居民種是ナリ

○二 天孫及天神地祇 正當ニ日本民種ト稱スルハ、即日本國民ノ本體  
 ヲ爲セルモノニシテ、固ヨリ言語相通シ、傳ヘテ同一ノ天國ヨリ來レルモノト  
 爲シ、其ノ天國ニ在リシ諸神ヲ仰ギテ祖先トスルモノナリ、此ノ民種ニハ既

三種ノ民種

島帥ノ神別

天孫

ニ發達セル政體アリテ、宗族制度ニ基キテ君長ヲ立テ、又甚綿密ナル祖先禮拜  
 ノ儀式アリ、而シテ其ノ軍隊亦多少ノ編制ヲ備ヘタルコトハ、前二章ニ述ベシ  
 所ノ事實ニ依リテ明ナリ、故ニ此ノ民種ニシテ容易ク他ノ蠻族ヲ平グテ、茲  
 ニ國家ノ基本ヲ定ムルコトヲ得タルハ、怪シムニ足ラズ、唯此ノ國家發達ノ  
 道ニ於テ、多少ノ困難ヲ感シタルハ、此ノ民種ノ部内ニ於テ、系統ヨリ起レル階  
 級ノ別アリシニ因ル、此ノ階級ノ別ハ、初メ天孫ト天神地祇トノ區別トシテ  
 歴史ニ顯レ、後ニ皇別ト神別トノ區別トナレルモノ是ナリ、皇別神別ノ稱ハ、弘  
 仁年間ニ萬多親王ノ選進セラレシ姓氏錄名書ニ於テ始メテ用井ラレタル所ナ  
 レド、其事實ハ最初ヨリ存セシナリ、

(二) 天孫 天孫トハ即皇族ナリ、凡日本民種ニ屬スル者ハ皆天神ノ後ニ非ザ  
 ルコトナシト雖、別クテ天孫ト稱スルハ、天照太神ノ嫡統ヲ承ク給ヘル者ニシ  
 テ、即神武天皇ノ東征ヲ譏シ給フニ當リ、諸皇兄及皇子ト指シ給ヒシガ如キモ  
 ノヲ云フ、建國ノ時ニ當リ、此ノ部ニ屬スル者其ノ數未多カラズト雖、皇親ヲ  
 距ルコト遠キ者ハ臣籍ニ入ルトノ例未有ラザリシニ因リ、世代ヲ經ルニ從ヒ

増加シテ自貴族ノ上流ニ位スル一階級トナリシナリ。天孫ノ宗家ノ長ヲ天日嗣トシ、其ノ他ノ諸氏ノ長ヲ臣ト云ヒテ、次ニ云フ連ト區別シタリ。蓋オミハ「大身」ノ義ニシテ、後ニ臣ノ字ヲ假用シタルナリ。又大化改制ノ後ハ「真人」ト稱シテ「朝臣」ト區別シタリ。

(二)天神地祇 天神ト云フハ天孫ト同シ民種ニ出テ、天照太神ノ系統ヲ其ノ民種ノ心中ト仰グト雖、亦太神ノ嫡流ヲ承ケタルニ非ス、或ル支流ノ祖神ノ系統ヲ承ケ、天孫ト共ニ此ノ土ニ降來シ、開國ノ偉業ヲ助ケタル功ニ因リ、世々貴族ニ列シ、國政ニ與レルモノヲ稱ス。例ヘバ天兒屋根命、太玉命、如キ是ナリ。又地祇ト稱スルハ、天神ト同シク支流ノ祖神ヨリ出テ、天照太神ヲ中心ノ遠祖ト仰グト雖、天孫ト同時ニ降來セシニ非ズ、却リテ天孫ヨリハ早ク此ノ土ニ遷來シ、土民ヲ征伏シテ、國民ノ端緒ヲ開キ、天孫ノ降臨ヲ給フニ至リ、其ノ宗家タル故ヲ以テ、地ヲ讓リ命ニ服シタルモノ是ナリ。例ヘバ大國主命、饒速日命ノ類ナリ。天神地祇ハ祖先ニ依リ之ヲ區別スレド、常ニ同一ノ尊敬ヲ受ケタリ。其ノ諸氏ノ長ヲ初メハ「連」ト稱シ、後ニ「朝臣」ト云ヘリ。「ムラサキ」ハ「群主」即部長ノ義ナリ

(110)

ト云フ。

○三 皇帥民種

此ノ民種ハ元一定ノ名稱アルニ非ス。歴史ニハ某ノ地ノ八十皇帥ト云ヘルヨリ、假ニカク名ゾケタルナリ。此ノ民種ト次ニ云フ穴居民種トノ差別ハ今ニ於テ明瞭ナラズ、或ハ是同一民種ニシテ文化ノ度ヲ異ニセルモノナリト云ヘリ。然レドモ皇軍東征ノ時、處々ノ八十皇帥ハ多少整頓セル軍隊ヲ有シ、之ヲ征伏スルニ幾分ノ軍略ヲ要シ、而シテ何々ノ土蜘蛛又ハ戸畔又ハ祝ト稱スル民族ニ至リテハ、一定ノ編制ナク、殆兵力ヲ勞スルヲ用非ザリシヲ見レハ、是同一民種ニハ非ザリシナリ。

此ノ後皇帥民種ハ大ニ西國ニ跋扈シ、景行天皇ノ前後ニ至リ、日本國民ニ對シ激シキ争鬭ヲ爲シタリ。而シテ其ノ情勢ヲ察スルニ、決シテ蕃族ニ非ズ。思フニ海外ノ民族ト應通シ、其ノ煽動ヲ被リ後援ヲ受ケテ、機ニ乘シ内地ヲ領有セントシタルモノナリ。「八十」ハ衆多ノ義ニシテ、皇帥ハ勇猛ノ義ナリト云フ。後ニ熊襲ト稱スル者モ、恐ラクハ同シ民種ナルベシ。

○四 穴居民種

コレ太古ノ民種中ノ最野蠻ナルモノニシテ、多ク水邊ニ

部落ヲ爲シ常ニ相凌轢シ男女雜婚シ倫序未發達セス冬ハ穴ニ寢テ夏ハ巢ニ棲ミ山野ヲ走ルコト鳥獸ノ如ク菓實菌茸鳥獸魚介ノ類ヲ料食トシタリ夫ノ葛網ニ係ケテ誅セラレタルヲ見テモ其ノ智力ノ陋劣ナリシヲ知ルベシ。逐箸ヲ恐レ人ヲ見ルトキハ逃レ穴ニ隠ルルカ故ニ穴口ニ草木ヲ充テ火ヲ放チテ薰殺シタルコトモアリキ。土蜘蛛佐伯八咫<sup>ヤチ</sup>ノ語意ハ前ニ述ベタリ而シテ此ノ民種ノ特ニ勇悍ナリシモノヲ蝦夷ト曰フ蝦ノ蝦魚ニ似タルヨリ此ノ字ヲ用ウ。又東夷ノ稱アリ。梟帥民種ノ多ク中國以西ニ居リシニ反シ此ノ民種ハ多ク東北ニ居タルモノ、如シ。初メハ野蠻ナリシガ日本民種ノ征伐ニ會フニ及ビテ其ノ劣弱ナル者ハ斃サレシモ強悍ナル者ハ生存スルコトヲ得タルヲ以テ優勝劣敗ノ理ニ因リ亦漸發達シ後ニハ輕ンズベカラザル外敵トナレリ。

國家團結ノ第一勢力

○五 國家團結 日本國民ノ成分ハ即前述ノ如シ而シテ之ヲ團結シテ一個ノ國家ト爲シシハ如何ナル勢力ニ因レルカト云フニ第一ニ祖先ノ系統ヲ重シズルコト其ノ最大原因ヲ爲セリ。天孫ト共ニ降來セシ諸氏即天神ノ諸

假夷

國家團結ノ第二勢力 族制

氏ノ始終天孫ヲ奉戴シテ一心ヲカリシモ專此ニ因ル。又大國主命ノ領土ヲ天孫ニ讓リ饒速日命ノ長髓彦ヲ誅シテ歸順シ其ノ他處々ニ於テ自國神ト稱セシ者即地祇ノ諸氏ノ概<sup>オホムネ</sup>抗戰セズシテ歸順シ或ハ却リテ天孫ヲ嚮導シテ遠征ヲ助ケ奉リシモ一ニ天孫ノ天照太神ノ嫡流ヲ承ケサセ給ヒシニ因ラズンバ非ズ。即皇別ノ一流ニ於テ神別ノ諸流ヲ統一スルコトヲ得タルハ全ク系統ノ勢力ニ因ルモノナリ。此ノ勢力ニ依リタル結果トシテ祖神欽崇ト族制保守トハ日本國家ノ團結ヲ保持スル所以ノ第二勢力トナレリ。族制トハ親族系統ノ制ヲ云フ。然リト雖夫ノ梟帥民種ト穴居民種トニ至リテハ素ヨリ別種ニ屬スルヲ以テ系統ノ威ヲ以テ制スベカラズ天孫ノ尊キハ彼等ノ與リ知ル所ニ非ザリキ故ニ我ノ恃ミテ以テ彼等ヲ制スベキ所ノモノハ唯兵力アリシノミ。即武力ハ國家團結ノ第三勢力トナレリ。磐余彦尊天祖ノ正系ヲ承ケ給ヒ加フルニ斯ノ武ヲ以テシテ遂ニ偉業ヲ立ツルコトヲ得給ヒシハ豈偶然ナランヤ。而シテ兵力ヲ以テ異種民族ヲ征伏シタル結果トシテ起レルモノハ尙武ノ風ト奴婢ノ制トナリ奴婢トハ降伏シタル男女ノ勝者ノ資産トシ

尙武ノ風ノ起因

國家團結ノ第三勢力 武力

以種ノ原因

(三四)

テ使役セラルル者ヲ云フナリ。奴婢ノ原因ノ此ニ在ルヲ知ラザルトキハ、後ニ至リテ之ニ關セル種々ノ法度慣例ノ起リタル所以ヲ明ニシ難カラソ。

○六特殊ノ國體 上ニ述ベシガ如キ民種ヲ、此ノ如キ勢力ヲ以テ團結シ

我が國家ノ組織

タル結果トシテ、茲ニ起レル日本帝國ノ國體ハ、世界萬國ト大ニ其ノ趣ヲ殊ニセリ。其ノ理由ヲ明ニスルコト最重要ナリトス。而シテ其ノ異ナル點ハ、我が

支那君位ノ基本

國家ノ組織ハ單純ニシテ、支那及泰西ノ國家ノ組織ハ複雜ナルニ在リ。我が國ニ於テハ皇別ト云ヒ神別ト云フモ、天孫ト云ヒ天神地祇ト云フモ、唯嫡支ノ系統ヲ異ニスルニ因リテ階級ヲ異ニスルノミ、民種ニ至リテハ皆一ナリ。而シテ民種ノ異ナル者ハ、鼻帥民種ノ如キ穴居民種ノ如キ、悉皆誅戮セラレタルニ非ズ、則奴婢トシテ國家公民ノ資格ヲ許サレザリキ。故ニ日本國民ハ日本民種ノミヲ以テ之ヲ組織シタルニ同シ。支那及泰西ハ大ニ之ト異ナリ。支那ノ國體ハ尙書ニ現然タルガ如ク、懿德ヲ以テ君位ノ基本トセリ。故ニ有德ノ禹ハ卑位ヨリ舉グラレテ帝位ニ登リ、無德ノ桀ハ王位ニ居テ臣下ノ爲ニ弑セラレタリ。人之ヲ論シテ、桀ヲ弑シタルハ君トシテ之ヲ弑シタルニ非ズ、君タルベ

支那ノ國體

キ德ヲ缺キタルガ故ニ、匹夫即一私人ノ君權ヲ恣ニスル者トシテ之レヲ殺シタルナリト言ヘリ。則支那ハ世襲君主國ナリト雖、其ノ君位ノ基ハ道德ニ在リテ、德ヲ失フトキハ位ヲ失フモノトシタリ。是支那ノ國體ナリ。而シテ支那ノ國體ハ何ヲ以テ斯ノ如クナルカト言ヘバ、其ノ因由スル所ハ實ニ姓氏ノ區別ニ在リ。支那ニ於テハ姓ノ制度甚重クシテ、同姓同婚ハ今ニ至ルモ猶之ヲ嚴禁セリ。抑、支那ハ大陸ノ一國ナルガ故ニ、崑崙ノ地ヨリ河流ニ沿ヒテ中原ニ入リシ部屬數多アリテ、初メハ別在シ、後ニ合セシ者は諸姓ナリ。而シテ君位ニ登ル者、其ノ己ノ姓ニ屬スル者ヲ治ムルハ、系統ニ依ルコトナレバ、固ヨリ容易ナリシト雖、他ノ姓ニ屬スル庶民ヲ治ムルハ甚難カリシナリ。是ヲ以テ尙書ニ百姓ヲ平章シ得タルヲ帝堯ノ德トセリ。即他姓ニ屬スル者ハ、系統ノ關係ニ依リテ制ス可カラザルガ故ニ、善德アルニ非ズバ、其ノ上ニ立チテ君タルコトヲ得可カラザリシナリ。西洋モ同然ナリ。西洋今日ノ國家ノ摸範ハ多ク之ヲ羅馬ニ取レリ。而シテ羅馬建國ノ次第ヲ見ルニ、ロミユラスノ部屬ヲ率テパレチン丘上ニ居ルニ當リ、近隣ノ諸丘ハ他姓ノ部屬ノ居ル處ト爲レリ。サツルニ

西洋ノ國體

ヤ、丘上ノサビイノ人、シリヤ、丘上ノエツルスカ人ノ如キ是ナリ。是等ハ皆伊多利ノ北部ヨリ南遷セル氏族ニシテ、以前ハ同種ニ屬シタリト雖、中途ニシテ分別シ、言語モ大體ハ同一ナレドモ小差ヲ存シ、又其ノ民祖トシテ拜スル所ノ神祇ヲ異ニシタルモノナリ。而シテ當初ハ相和セズ、互ニ侵奪ヲ事トシタルモ、後ニ至リテハ協同シテ外敵ヲ防クニ非ズバ、自他ニ不利ナルモノアラソトスルヨリ、當時最勢ヲ得タル以上ノ三姓、ツライイフヲ各十氏、キユーリ、ニ分チ、三十氏ヲ合シテ一ノ氏會、コンミチヤ、キユリヤタト云ヘル者ヲ開キ、ロミラス王位ニ在リト雖、其ノ下ニ令スル所ハ必此ノ會議ノ決議ヲ經ベキモノトシタリ。是即君民共治體ノ始ナリ。ロミラス死スルニ至リテ諸姓ノ間ニ王位ヲ爭フヲ以テ、勢其ノ人ヲ民選スルニ決シタル事史乘ニ昭々タリ。由是觀之、異姓相聚、リテ成レル國民ノ國家ニ於テ元首タル者ハ、血統上ヨリシテ民庶ノ上ニ立ツベキ資格ノ全カラサルニ因リ、必他ニ君位ノ基本トスル者アラソトヲ要ス。即支那ハ此ノ基本ヲ道德ニ取リ、羅馬ハ之ヲ協議ニ取レリ。儒道ノ始メテ支那ニ盛ニシテ法律ノ始メテ羅馬ニ盛ナリシハ、固ヨリ故アルナリ。我が帝國ハ

君民共治體ノ始

西洋國體ノ基本

則然ラス、民庶ハ悉一姓ナリ、天孫降臨ノ前ニ此ノ土ニ入りテ局地ヲ統領シタル者モ、皆其ノ源ハ天孫ト一ナリシヲ以テ神武天皇ノ宗家ノ正嫡ニ坐スコトヲ爭フ者ハ皆之有ラズ、加フルニ天祖神誥ノ顯著ナリシヲ以テ、其ノ到來シ給ヘルニ遂ヒテ忽降順シタリ。而シテ後ニ至リテハ、海外ノ煽動ヲ被リテ反テ謀リシ熊襲ノ如キモ、悉之ヲ伐テ退ケ、元來島嶼ノ國ナレバ、外民ノ侵入ヲ防クニ利アルヲ以テ、遂ニ他姓ノ部屬ヲ離ヘズシテ國ヲ成スニ至レリ。故ニ我が國家ノ民庶及其ノ子孫ハ、永ク族制上ノ關係ヨリシテ、天皇ヲ君ト仰ギ奉ルベキ本分アリ。我が民庶ノ中ニハ、天皇ノ系統ニ代リ奉ルベキ資格ノル者絶エテ無シ。支那ノ道德上ヨリ君位ヲ動カシ、羅馬ノ風ヲ承ケタル共和國ノ協議約東ヲ以テ君權ヲ限ルトハ、大ニ其國體ヲ異ニスル所以ノ者實ニ此ニ在リ。

日本ノ國體

### 第四章 國民當初ノ形勢

#### ○一 宮殿ノ構造

皇族ノ宮殿  
六御門

上古宮殿ノ構造ハ先中央ニ大柱ヲ掘リ立ツ。之ヲ天御柱ト云フ。地下大磐石ノアル處ヲ認メテ掘リ下ケ之ヲ礎トシテ埋メ立ツルナリ。即古語ニ於底津石根宮柱布刀斯理於高天原峻峙辨風而居ト云フ是ナリ。辨風峻峙トハ宮殿ノ高キヲ云フ。屋根ヲ茅葺キニシ千木ヲ置キ風ニ備フ。今ノ神社ノ建築ハ即其ノ遺風ナリ。其ノ柱及床板ハ皆良材ヲ擇ミタリ。故ニ古書ニ「柱即高太板則廣厚」日本ナド言ヘリ。皇孫ノ宮殿ハ此ノ如ク高カリシカバ御垣ノ上ニ遙ニ拔ケ出テ中天ニ聳エテ見エタリ。故ニ之ヲ形容シテ朝日のたゞさす宮照日直又ハ夕日のひてる宮又ハ朝日のひかげる宮ナド云ヘリ。當時臣下ノ家屋ハ低ク庶民ハ多ク土居シ。獨天皇ノ宮殿ノミ宏壯ナリキ。故ニ天皇ヲ大御門トモ云ヘリ。

#### ○二 朝廷ノ行事

次ニカク宏壯ナル宮殿ノ中ニテ營マレンシ事ノ有様ヲ叙セシニ其ノ後世ト異ル所ハ政治ト祭祀トヲ混シ行ハレタルニ在リ。前章

天照太神ノ

祭政一致

ニ述ベタル如ク皇室ノ尊威ハ天祖ノ正統ヲ繼承シ給ヘルニ在ルヲ以テ祖先ヲ欽崇スルハ即國家ヲ統御スル所以ナリシナリ。而シテ天照太神ノ勅ニ吾ガ見此ノ鏡ヲ視ルコト當ニ吾ヲ視ルガ如クナルベシ。床ヲ同クシ殿ヲ與ニシ以テ齋鏡トスベシトアリシヲ以テ常ニ神器ヲ宮中ノ正殿ニ置キ天兒屋根命太玉命ヲシテ之ニ配侍セシメラレタリ。又榎原宮ニ至リテハ太玉命ノ孫天宮命齋斧齋鉏ヲ以テ山材ヲ採リ正殿ヲ構立ス。其ノ物既ニ備ハリ諸ノ齋部ヲ率井テ天璽劍鏡ヲ取り正殿ニ安キ奉リ並ニ瓊玉ヲ懸ク其ノ幣物ヲ陳テ殿祭祝詞シ次ニ宮門ヲ祭ル。此ノ時ニ當リ帝ト神ト其ノ際未遠カラズ。殿ヲ同クシ床ヲ共ニシ此ヲ以テ常ト爲ス。故ニ神物官物未分別セズ宮内ニ藏テ立テ號シテ齋藏ト云フ。齋部氏ヲシテ永ク其ノ職ニ任セシムト古語拾遺ニ見エタリ。サレバ此ノ時ハ宮殿ハ神器ノ正宮ニシテ且天皇ノ所在タリシナリ。後世此ノ有様ヲ稱シテ祭政一致ト云フ。

#### ○三 禁闕ノ兵衛

系統ト祭祀トニ次ギテハ武力ヲ以テ帝權ノ重ナル基本トシタリシコト前章ニ述ベタルガ如シ。即天孫降臨ノ時既ニ大伴氏ノ遠祖

兵事ノ職ヲ  
奉スルニ氏  
族

天忍日命、來目部ノ遠祖天穗津大來目ヲ帥、背ニ天盤、鞆ニ稜威ノ高  
鞆ヲ著ク、手ニ天梶弓、天羽々矢ヲ提リ、八目鏑矢ヲ副ヘ持テ、又頭禰劍ヲ帶ヒ、天  
孫ノ前ニ立テテ遊行降來ス。ト云フコト見ユタリ。而シテ、橿原帝宅經營ノ後モ、  
殊ニ宮闕ノ武備ヲ嚴ニシテ威勢ヲ天下ニ示シ給ヒタリ。此ノ時ヨリシテ兵  
事ヲ以テ職ヲ朝廷ニ奉ズル氏族ニニアリキ。曰ハク物部氏曰ハク大伴氏はナ  
リ。而シテ大來目ノ氏族ハ常ニ大伴氏ノ手ニ屬シタリ。即古語拾遺ニ道臣命  
ハ來目部ヲ帥、井テ宮門ヲ衛護シ、其ノ開闔ヲ掌ル。饒速日命ハ内物部ヲ帥、井テ  
矛盾ヲ造備ス。然ル後物部乃矛盾ヲ立テ大伴來目仗ヲ建テ門ヲ開キ、四方ノ  
國ヲ朝セシメ、以テ天位ノ貴キヲ觀ストアル是ナリ。物部氏ハ饒速日命ヨリ  
出テ、大伴氏ハ日臣命後ニ道臣ヨリ出ツ。天忍日命ノ後ナリ。而シテ來目部ノ長  
ヲ大來目氏ト云ヒキ。  
天忍日命武勇ヲ以テ天孫ヲ助ケ奉リシヨリ、其ノ玄孫ナル日臣命モ亦磐余彦  
尊ノ東征ニ從ヒ、督將元戎ヲ率、井テ兎渠ヲ剪除シ、命ヲ佐ケル功肩ヲ比アル  
者有ルコト無カリキ。拾遺因リテ朝廷之ヲ重シテ世、大將ノ分ニ居ラシメ給

(四〇)

來目氏

ヘリ。然ルニ饒速日命モ亦虜ヲ殺シ衆ヲ帥、井テ官軍ニ歸順シタル忠誠ノ功  
ニ因リ、殊ニ褒寵ヲ蒙リ、拾遺世武ヲ以テ朝廷ニ事フルコト、ナレリ。一書ニ  
饒速日命降來ノトキ五部造ヲ伴領トシ、天物部二十五人ヲ率、井テ供奉セシム  
トアリ。即一隊二十五人ヲ五部ニ分テ、各部ニ一造ヲ置キタルモノナリ。按ズ  
ルニ兵權ハ重大ナリ。之ヲ一家ニ專任スルハ以テ安全ノ策ト爲ス可カラス。故  
ニカク二氏ニ分配セラレシモノカ、天孫深慮ノ坐シマシ、所固ヨリ伺ヒ知ル  
ニ由無シ。而シテ後ニ至リテハ此ノ二氏互ニ權勢ヲ争ヘリ。故ニ此ニ其ノ伏線  
ヲ設クルナリ。  
來目ハ又久米ト書ス。クミノ義ニシテ、大伴氏其ノ部下ノ人數ヲ粗ミ立テ、一  
隊トシタル稱ナリト云フ。大來目ハ此ノ一部ノ人數ノ部長ナリシガ、其ノ系統  
ハ、日臣命及ヒ饒速日命ニ比スルトキハ遙ニ卑カリシガ如シ。後ニ來目部ノ中  
ヨリ鞆負部ト稱スル一派ヲ生シタリ。  
○四節 祭政ノ供給 朝廷ニ於テカク祭祀ヲ營ミ、兵備ヲ嚴ニシ給フニハ、多  
ク資財ヲ要セシナルヘシ。此ノ資財ハ如何ニシテ之ヲ供シタルカト云フニ、天



皇ハ天祖ノ正統ヲ繼ギ給ヘル故ヲ以テ自餘ノ諸氏ニ代リ天神地祇ヲ禮祭シ給ハントシテ諸氏ヲ地方ニ遣リ代々產物ヲ貢セシメ以テ祭政ノ費ニ充テラレタルモノナリ。サレバ我が國ニ於テハ人民納税ノ義務モ神事ヨリ始マリシナリ。古語拾遺ニ「檜明玉命ノ孫御所玉ヲ造ル其ノ裔今出雲國ニ在リ毎年調物ト共ニ其ノ玉ヲ貢進ス天日鷲命ノ孫木綿麻並ニ織布ヲ造ル仍リテ天宮命ヲシテ天日鷲命ノ孫ヲ率井テ肥饒ノ地ヲ求メ阿波國ニ遣シテ穀麻ノ種ヲ殖ニシムトアリコレヨリ大嘗ノ年ニハ阿波ヨリ木綿麻布及種々ノ物ヲ貢クヲ例トセリ又同書ニ天宮命更ニ沃壤ヲ求メ阿波ノ忌部ヲ分チ率井テ東土ニ往キ麻穀ヲ播殖ス好キ麻ノ生スル所ナルガ故ニ之ヲ總國今ノ上越ト云フ穀木ノ生スル所ナルカ故ニ之ヲ結城郡ト云フ阿波ノ忌部ノ居ル所ヲ便安房郡ト云フ又手置帆負命ノ孫予竿ヲ造ル其ノ裔今分レテ讚岐國ニ在リ毎年調貢ノ外ニ八百竿ヲ貢スコレ其ノ事ノ證ナリト見エタリ。

○五 臣民ノ住居 神代ハ言フニ及バズ神武天皇ノ以後ニ至リテモ臣下ノ家宅ハ高ク構造セザリキ又皇族ノ宮殿ト臣下ノ家宅トハ區別アリ皇族ノ

宮殿ハ屋上ニ堅魚木ヲ設ケ以テ風鎮ト爲シタレドモ臣下ノ家宅ハ堅魚木ヲ上ケズ繩ヲ用井テ幾ヲ結ビタリ此ノ繩天盤ノ紐下民ニ至リテハ皆穴居セリ蓋下民トハ天孫ト共ニ降來セシ諸民并ニ舊來此ノ地ニ在リノ諸部ノ酋長ニシテ特功ニ依リ舉用セラレタル者ノ外ヲ假ニ稱スル階ナリ而シテ神武天皇以後ハ其ノ誘導ニ依リ家屋ニ住居スル風漸起リシカドモ尙一時ニ舊習ヲ去ルコトノ不便ナリシヲ以テ最初ハ土ヲ深ク掘リ下ケ其ノ穴ノ内ニ家屋ヲ作リテ住ミタリ是穴中ニ居レハ寒暑並ニ凌キ易キニ因ルト云フ而シテ其ノ屋根ノ軒端ハ幾ハクモ地上ヲ離レズ故ニ出入ノ爲ニ穴ノ縁ヲ斜ニ穿チテ道ヲ開キ其ノ所ヨリ道ヒ入り道ヒ出テタリ今尙家ノ出入口ヲ道入口ト云フハ古語ノ遺レルナリ。又其ノ内部ノ形状ヲ按ズルニ先大牀ニ薦ヲ藉キ其ノ上ニ臥シテ體ノ上ニ絹或ハ布ノ類ヲ掩ヒ牀ノ周圍ニハ防壁ヲ立テタルガ如シ古事記中卷神武天皇ノ條下ニ「天皇伊須氣余理比賣ノ許ニ幸シ一宿御寢座也後伊須氣余理比賣宮内ニ參入タマフ時天皇御歌ニ阿斯波良能志祁去岐袁夜須賀多多美伊夜佐夜斯岐豆和賀布多理泥斯トアリ志祁去岐袁夜ハ醜小屋ナ

織ルコト染  
ルコトノ

リ、須賀多多美ハ菅臺ナリ、伊夜佐夜斯岐ハ彌清敷ニテ醜キ小屋ナル故ニ菅臺  
ヲ敷キ重テ清淨ナラシメシナリ。是皇后ノ其ノ自家ニ坐シシ時ノ形狀ナリ。  
貴族ノ女ノ家宅ナラ尙然リ。况ヤ卑賤ノ輩ニ於テハ葦茅草ナドヲコソ敷設物  
トハ爲シタリクメ。而シテ其ノ衾ノ如キハ古事記上卷八千茅神ヲ云フ其ノ后  
神ニ通ヒ給フ條ニ多久夫須麻佐夜具賀斯多爾云云トアリ。多久夫須麻ハ袴被  
ナリ。佐夜具ハ其ノ夜被ノサヤサヤト鳴ルナリ。斯多ハ下ナリ。袴ノ木ノ皮ヲ以  
テ織レル衾ヲ被リテ寝タマヘルヲ云フナリ。太古有勢ノ神スラ此ノ如シ。况ヤ  
卑賤ノ者ニ於テハ、藁或ハ茅草ヲ被リテモ寝シナルベシ。  
○六 節太古ノ衣服 一般人民ハ上述ノ如ク穴居シテ、男ハ食物ニ從事シ、女  
ハ衣服ニ從事セリ。然レハ衣服ヲ調フルハ専婦女ノ業ニシテ、木皮革皮ノ腺維  
アルヲ求メ、之ヲ絲ニ績ギ、以テ衣類ヲ作りタリ。而シテ織ルコト及染ムルコト  
モ神代ニ於テ既ニ發明セラレタリ。即太神天窟ニ隠レ給ヘル條ニ、倭文布ヲ織  
ルコトアルニテ知ルベシ。蓋織リテ後ニ草汁ヲ以テ染メタルナリ。雪白色ヲ  
最上等トシ、赤色之ニ次ク、又青色黑色モアリキ。獸皮ハ貴人ヨリ下民ニ至ル

衣服・原料

マデモ、衣服ニ用井タルコト史冊ニ見エズ。但敷物及器財ニ用井タルモノ、如  
シ。殊ニ後世ノ様ト異ナルハ、絹繩ノ用ナリ。絹繩ハ蠶ノ繭ヨリ糸ヲ得テ織リ  
成スモノナレド、最初ハ繭ヲ煮ルコトヲ知ラサル故ニ、口中ニ合ミテ糸ヲ曳キ  
出セリ。故ニ其ノ糸ニ太キ細キアリテ、其糸ヲ得ルコト難カリシカバ、人民多ク  
麻穀ヲ用ウルヲ便トセリ。日本書紀神代上卷ニ引キタル一書五穀及蠶ノ初メ  
テ成レル條ニ、蠶ヲ裏合シ便糸ヲ抽クコトヲ得タリ。此ヨリ始メテ養蠶ノ道ア  
リトアルヲ見テ知ルヘシ。口中ノ暖ヲ取リテ糸ヲ曳キタラシニハ、其ノ曳クコ  
トモ亦速ナラス、不便ナリシコト思フベシ。此ノ如ク養蠶ノ道ハ太古ヨリアリ  
シカド、其ノ繭絲ヲ以テ織ル所ノ絹繩ハ粗製ナリケレバ、人多ク布類ヲ愛シテ  
絹繩ヲ賤シトセリ。コレ後世ノ人ノ思想ト甚異ナル所ナリ。

火食

○七 節太古ノ食物 本邦ノ人民ハ最初ヨリ火食ノ術ヲ知リタルコト言フ  
マデモナシ。而シテ神代ニ於テ既ニ五穀ヲ得タルヨリ之ヲ常食トセリ。日本  
書紀神代上卷ニ曰ハク、天熊人悉取リテ持チ去リ、而シテ之ヲ奉進ス。時ニ天照  
太神喜バレテ曰ハク、是ノ物ハ則顯見蒼生ノ食ヒテ活クベキモノナリト。則粟

五穀ヲ常食トスル始

瑞穂國ノ號

副食物

銅鏡

細戈千足ノ國ノ稱

(四六)

稗麥豆ヲ以テ陸田ノ種子ト爲シ、稻ヲ以テ水田ノ種子トナシタマフト、コレ五穀ヲ常食トスル始メナリ。又同書神代下卷天孫降臨ノ條ニ、天照太神ノ勅ヲ載セテ曰ハク、「我が高天原ニ御ス齊庭ノ穂ヲ以テ、亦當ニ吾ガ兒ニ御ルヘシト、此ノ種子善ク國土ニ適シテ成熟繁茂シタルヨリ瑞穂國ノ號起レリ。魚類ハ之ヲ釣リタリ。又鵜ヲ以テ取ルコトモアリシニヨリ養鵜部ト云フモノアリキ。又鵜ヲ用井、網ヲモ引キタリ。

○八節 太古ノ器具 本邦ノ人民太古ヨリ劍ト鏡トヲ尊重シタリシハ最著キ事實ナリ。殊ニ劍ハ天國ヨリ持チ傳ヘタルモ多ク、而シテ天孫及天孫ニ先ダチテ此ノ土ニ入りシ諸神ノ土蕃ヲ征服シタルモ、名劍ノ德ニ依ルモノ多シ。サレバ大國主命ハ出雲ヲ天孫ニ讓リ給フトキ、其ノ帶ク所ノ平國廣矛ヲ天使ニ附シテ奉リ給ヘリ。又矛、弓、矢、鞍、楯、鞘ノ如キ武器モアリタリ。故ニ神代ヨリ細戈千足國ノ稱アリキ。兵器精練ニシテ充滿セル義ナリ。又時ニ鐵身石頭ノ劍及木椎ヲモ用井タリ。鏡ハ曾テ此ニ影寫シタル祖神ノ靈ノ永ク留止スル所ナリトシテ、子孫之ヲ尊崇シタルモノカ、祭祀ニ必之ヲ懸クルハ、太古ヨリ今ニ

瑠玉

陶器

机

車及船

至ルマテ改マラザル習慣ナリ。又裝飾ニハ多ク瑠玉ヲ用井、其ノ種々ナル標品ハ今ニ遺レリ。處々ニ玉造部ノ民アリテ世之ヲ造ルヲ業トシタリ。飲食ニハ素焼ノ陶器ヲ用ウ。葉盤半餐、瓊手扶我等ノ種類アリ。其ノ木葉ヲ縫ヒ合セテ作レルヲカシハデト云フ。飯ヲ盛ルニ用井タリ。皆机上ニ置キテ食ス。机ハ、ツキスニ、蓋ノ義ナリ。又鈕アリ、斧アリ、以テ木ヲ伐リ家ヲ作ル具トス。陸ヲ行クニハ天車羽ト云フモノアリ、海ヲ行クニハ二岐小舟、土舟、檣、檣舟ナド稱スルモノアリキ。

第五章 綏靖天皇ヨリ崇神天皇ニ至ル

(四八)

綏靖天皇

○一節綏靖以後八帝 綏靖天皇ハ神渟名川耳天皇ト申ス。神武天皇ノ第三ノ御子ナリ。風姿岐嶷、少ニシテ雄拔ノ氣坐ス。壯ナルニ及ビテ容貌魁偉、武藝人ニ過ギ給フ。而シテ志尙沈毅ナリ。四十八歳ノ時神武天皇崩シ給ヘリ。神渟名川耳尊、孝性純深ニ坐ヘルヲ以テ悲慕止ムコトナク、特ニ心ヲ哀葬ノ事ニ留メ給フ。時ニ其ノ庶兄手研耳命、諒闇ノ際ニ乘マ、二弟ヲ害シ自立セント圖ル。神渟名川耳尊、兄神八井耳命ト陰ニ其ノ謀ヲ知り、善ク之ガ備ヲ爲シ給ヘリ。山陵ノ事畢ルニ及ビ、弓部稚彦ヲシテ弓ヲ造ラシメ、倭ノ鍛部天津眞浦ヲシテ眞鹿ノ鏃ヲ造ラシメ、矢部ヲシテ箭ヲ作ラシメ給フ。弓矢既ニ成ル。尊以テ手研耳命ヲ射殺サント欲ス。會、手研耳命、獨片岡ノ神大害中ノ大牀ニ臥ス。尊神八井耳命ト相共ニ進入シ、其ノ戸ヲ突キ開キ給ヘルニ、神八井耳命ハ手脚戰慄シテ矢ヲ放ツト能ハス。尊即兄ノ持チ給ヘル弓矢ヲ擧キ取リテ手研耳命ヲ射、一發貫ニ中テ、再發背ニ中テ、遂ニ之ヲ殺シ給ヘリ。是ニ於テ神八井耳命、慙然自服シ、神渟

神八井耳命

名川耳尊ニ讓リテ曰ハク、吾ハ兄ナガラ懦弱ナリ、今汝特挺シテ自元惡ヲ誅ス。宜ナル哉。汝ノ天位ニ光臨シ、以テ皇祖ノ業ヲ承クルコト、吾當ニ汝ノ爲ニ之ヲ輔クベシト。明年<sup>紀元八十年</sup>神渟名川耳尊位ニ即キ給フ。天皇在位三十三年ナリキ。

安寧天皇トス。綏靖ノ御子ナリ。磯城津彦玉手看天皇ト申ス。在位三十八年ナリキ。

懿德天皇トス。安寧ノ御子ナリ。大日本彦桓友天皇ト申ス。在位三十四年ナリキ。

孝昭天皇トス。懿德ノ御子ナリ。觀松彦香殖稻天皇ト申ス。在位八十三年ナリキ。

孝安天皇トス。孝昭ノ御子ナリ。日本足彦國押人天皇ト申ス。在位百二年ト稱ス。

孝靈天皇トス。孝安ノ御子ナリ。大日本根子彦太瓊天皇ト申ス。在位七十六年ナリキ。

孝元天皇

次ヲ孝元天皇トス。孝靈ノ御子ナリ。大日本根子彦國牽天皇ト申ス。在位五十七年ナリキ。天皇ニ二男一女坐ス。第一ヲ大彥命ト曰ヒ、第二ヲ稚日本根子彦大日々天皇ト曰ヒ、第三ヲ倭迹迹姬命ト曰フ。大彥命ハコレ阿部臣、阿部臣、阿閉臣、狹々城山君、筑紫國、造越國、造及伊賀臣ノ始祖ナリ。天皇ノ妃伊香色謎命、彦太忍信命ヲ生ミ給フ。是武内宿禰ノ祖父ナリ。次ノ妃埴安媛ハ武埴安彦ヲ生ミ給ヘリ。

(五〇)

開化天皇

次ヲ開化天皇トス。孝元ノ御子ナリ。在位六十年ナリキ。以上八代ノ間叙スベキ事變ナシ。但毎代遷都ス。其ノ坐シ、宮名及葬リ奉リシ陵ノ名并ニ史ニ存ス。按スルニ崇神天皇ノ時ニ至ルマデハ、神武ノ業ヲ繼ギ祭事ト權威トヲ以テ社會ヲ團結シ給ヘリシヲ以テ、殊ニ近畿ノ人民ハ皆善ク王化ニ服シテ内外ニ安寧ヲ破ルベキ原因トナルモノナカリシナリ。

○二崇神天皇 第十代ノ天皇ヲ御間城入彦五十瓊殖天皇ト申ス。開化第二ノ御子ナリ。天皇十九歳ノ時立チテ皇太子ト爲リ給フ。嚚性聰敏、幼ニシテ雄略ヲ好ミ給ヘリ。既ニ壯ニシテ寬博謹慎、神祇ヲ崇重シ、恒ニ天業ヲ經綸スル御

崇神天皇ノ御性質

瑞籬宮

心坐シキ。開化天皇崩御ノ時年既ニ六十歳ナリ。即位ノ元年都ヲ磯城ニ遷シ給フ。之ヲ瑞籬宮ト云フ。

安民ノ詔

四年紀元五百七十年十月詔シ給ハク、惟フニ我が皇祖諸ノ天皇等、宸極ニ光臨シ給ヘルハ、豈一身ノ爲ナランヤ。蓋人神ヲ司收テ、天下ヲ經綸シタマフ所以ナリ。故ニ能ク世ヲ立功ヲ闢キ、時ニ至德ヲ流シ給フ。今朕大運ヲ奉承シ、黎元ヲ愛育ス。何ゾ正ニ皇祖ノ跡ニ事遵シテ、永ク無窮ノ祚ヲ保タザラン。其群卿百僚、爾ノ忠貞ヲ盡シ、並ニ天下ヲ安クセヨ。亦可ナラズヤト

神祇ヲ敬フ疾疫ヲ息給フ

五年、國內疾疫流行シ、民大半死亡ス。天皇之ヲ憂ヒ、神淺茅原ニ幸シ、八百萬神ニトシテ大物主神、國大神、祭リ、又大國魂神ヲ祭リ、天社、天神、國社、神地、神戶ヲ定メ、以テ祭神ノ用度ヲ豐ニシ給ヒシカバ、疾疫始メテ息ミ、年豐ニシテ民安カリキ。

○三神人別處 然ルニ天皇ノ六年ニ至リ、百姓流離シ、或ハ背叛スル者アリ。其ノ勢德ヲ以テ治メ難シ。因リテ天皇又頻ニ神祇ヲ祭リ給ヒ、又神器ト殿ヲ共ニシ床ヲ同シクスルヲ長レ、爲ニ別宮ヲ造リテ之ヲ安置セントシ給ヘリ。按

未給ノ皇女  
ヲ以テ齋宮  
トナス始メ  
神器新器ノ  
二トナル

ズルニ神武建國ノ初ニ於テハ神代ヲ距ルコト未遠カラズ、神トシ崇フ念ハ、祖  
トシ敬スル心ト異ナル所少ク、神器ト處テ同ヲクシ給フハ、猶父祖ト居テ同ヲ  
クシ給ヘルガ如キ感アリキ。然ルニ世ヲ經ルニ從ヒテ崇神ノ念ハ敬祖ノ心ニ  
勝テ、遂ニ朝夕同處スルハ神聖ヲ瀆ス恐アリトシ給フニ至リシナリ。大日本史  
レハ、太神ノ宮中ヲ出テイフ。乃大倭ノ笠縫邑ニ神籬ヲ立テ、神鏡神劔ヲ移シ  
奉リ、皇女豐鍬入姬命ヲシテ之ヲ齋キ祭ラシメ給ヘリ。未婚ノ皇女ヲ以テ齋官  
トスルコト此ニ始マル。而シテ神代ニ神鏡ヲ鑄タリシ石凝姪命ノ子孫ヲシテ  
別ニ神鏡ヲ摸造セシメ、神劔ヲ作リタリシ天目一箇神ノ子孫ヲシテ別ニ神劔  
ヲ摸造セシメテ殿内ニ安置シ、以テ天皇護身ノ器ト爲シ給フ。是ヨリ神器ノ傳  
來新器舊器ノ二派ニ分レヌ。八尺瓊曲玉ハ別ニ新器ヲ造ラズ、舊物ノマ、常ニ  
皇宮ニ置キテ、天皇ノ御身ヲ離シ給フコトナカリキ。

○四 四道將軍 十年七月、天皇群卿ニ詔シ給ハク、道民ノ本教化ニ在リ、今  
既ニ神祇ヲ禮シ、災害皆耗キヌ。然レドモ遠荒ノ人等猶正朔ヲ受ケズ、是未王化  
ニ習ハザルノミ。是ニ群卿ヲ選ミテ四方ニ遣シ、朕ノ意ヲ知ラシメヨト。九月

四道將軍ノ  
稱

王化ヲ荒遠  
ニ布キ給フ

大彥命<sup>孝元</sup>、皇子<sup>天皇</sup>ヲ北陸ニ遣シ、武渟川<sup>別</sup>ヲ東海ニ遣シ、吉備津彥<sup>ヲ</sup>西海ニ遣シ、  
丹波道主命<sup>ヲ</sup>丹波ニ遣ス。皆皇族ナリ。天皇四將ニ命シテ宜ハク、若敷ヲ受ケザ  
ル者アラバ、兵ヲ舉ゲテ之ヲ伐テト。以上四人ヲ四道將軍ト稱スルコトハ、日  
本書紀ノ文ヨリ始マリシニテ、上古ヨリ此ノ職名アリシニ非ズ。是ノ時ニ當  
リ軍戰ノ術ニ老ケタルモノ既ニ物部氏ノ如キ、大伴氏ノ如キ者アリキ。然レド  
モ此等ヲ措キテ特ニ皇族ヲ遣サレシハ、皇室ノ尊威ヲ負ヒテ王化ヲ遠荒ニ布  
カシメ給ハンガ爲ナリ。而シテ兵馬ノ權ハ中古ニ至ルマテ曾テ王室ヲ離ル、  
コト無カリキ。

○五 武埴安彥背叛

諸將未發セズ、時ニ武埴安彥<sup>其ノ</sup>妻吾田媛<sup>ト共ニ</sup>  
反シ、夫ハ山背ヨリ婦ハ大坂ヨリ入リテ帝京ヲ襲ハントス。是ニ於テ天皇五  
十狹芹彥命<sup>ヲ</sup>遣リテ吾田媛ノ師ヲ擊タシメ給フ。命乃之ヲ大坂ニ遮リテ大ニ  
其ノ軍ヲ破リ、遂ニ吾田媛ヲ殺ス。又大彥命<sup>ト</sup>彥國彥命<sup>ト</sup>山背ニ向ケテ武  
埴安彥ヲ擊タシメ給フ。西軍ト挑川<sup>今川</sup>ニ會ス。彥國彥命<sup>武埴安彥ヲ</sup>射テ其ノ  
臂ニ中テ之ヲ殺シ、賊軍ヲ追ヒテ河北ニ至ル。斬首半ニ過ギ、屍多ク溢レタリキ。

武埴安彦  
叛ノ理由

豐城命ヲシテ  
東國ヲ治  
メシメ給フ

(五四)

武埴安彦ハ孝元天皇ノ皇子ニシテ、崇神天皇ノ叔父、大彦命ノ異母弟ナリ。其ノ謀叛何ノ故ナルヲ知ラズト雖、當時ノ景況ヲ以テ之ヲ察スルニ、武埴安彦身ハ皇親タリト雖、仄ニ支那ノ文化ヲ聞キテ之ヲ喜ビ、我が邦ヲ不開化トシ、遂ニ朝廷ヲ襲ヒテ天位ヲ奪ヒ古來ノ制令ヲ改メテ以テ天下ヲ一變セント欲セシモノカ。土所賦然ルニ其ノ敗北ハ却リテ天皇ノ權威ヲシテ益々強固ナラシメタリ。十月朔、詔シ給ハク、今反者悉誅ニ伏シ、畿内無事ナリ。唯海外ノ荒俗ハ騷動未止マズ。ソレ四道ノ將軍等今忽ニ發セヨト是ニ於テ諸將途ニ上リ、北會津ニ至リ、西九州ヲ極メ、翌年四月ニ至リテ歸リ、戎夷ヲ平ゲシ狀ヲ以テ復命ス。是ノ歲異俗多ク歸シ、國內安寧ナリキ。後四十八年ニ第二ノ皇子豐城命ヲ遣シテ東國ヲ治メシメ給フ。是上毛野君下毛野君ノ始祖ナリ。

○六節 弭調手末調 十二年三月、天皇詔シ給ハク、朕初メ天位ヲ承ケテ宗廟ヲ護保スルニ當リ、明掩フ所アリ、德綏キコト能ハズ。是ヲ以テ陰陽鑿錯シ、寒暑序ヲ失ヒ、疫病多ク起リテ、百姓災ヲ蒙レリ。然レドモ今ハ罪ヲ解キ、過ヲ改メ、敦ク神祇ヲ禮シ、亦教ヲ垂レテ荒俗ヲ綏クシ、兵ヲ舉グテ不服ヲ討ツ、是ヲ以テ官

弭調手末調  
ノ義

科稅ノ事史  
始ニ見エタル

造船ノ詔

ニ廢事ナク、下ニ逸民ナシ、教化流行ハレ、衆庶業ヲ樂ミ、異俗譯ヲ重テテ來リ、海外既ニ歸化ス。宜シク此ノ時ニ當リテ更ニ人民ヲ校シ、長幼ノ次第及課役ノ先後ヲ知ラシムベシト。九月ニ至リ人民ヲ校シ、更ニ調役ヲ科シ給フ。之ヲ男ノ弭調女ノ手末調ト云フ。弭調トハ男子弓ヲ以テ獲ル所ノ獸皮ノ類ヲ獻ゼシムルヲ謂ヒ、手末調トハ女子手ヲ以テ織ル所ノ絹布ノ類ヲ獻ゼシムルヲ云フ。本邦科稅ノ事此ニ於テ始メテ史ニ見エタリ。天皇ハ人民ニ代リテ神祇ヲ祭リ不順ヲ制シ、以テ國內ヲ綏クシ給フニ因リ、其ノ資ヲ人民ヨリ徵發シ給ヘルモノニシテ、天皇ヨリ直接ニ一般人民ニ命令ヲ下シ給ヒシコトノ明ニ見エタルモ此ノ時ヲ始メトス。然レドモ校民ノコトハ前ニモアリシヲ以テ、三月ノ詔ニ更ニトハ宣ヘルナリ。

○七節 造船及堀池 十七年七月詔シ給ハク、船ハ天下ノ要用ナリ。今海邊ノ民船ナキニ由リ、甚步運ニ苦ム。ソレ諸國ニ令シテ船舶ヲ造ラシメヨト。十月ニ至リ、諸國船舶ヲ造ル。

六十二年七月、詔シ給ハク、農ハ天下ノ大本ナリ。民ノ恃ミテ以テ生ズル所ナリ。

今河内狭山ノ埴田水少シ。是ヲ以テ其ノ國ノ百姓農事ヲ怠ル。ソレ多ク池溝ヲ開キ、以テ民業ヲ寛メヨト。十月、依網池ヲ造リ、十一月、荊坂池、反折池ヲ作ラシメ給フ。

六十八年十二月、天皇崩シ給フ。時ニ御年百二十歳ト傳フ。皇太子活目尊位ヲ嗣ギ給フ。之ヲ垂仁天皇トス。崇神天皇能ク神祇ニ事ヘ、民庶ヲ統ベ給ヒシヲ以テ、風雨時ニ順ヒ、百穀用テ成リ、家給リ人足リ、天下太平ナリキ。故ニ稱シテ御葬國天皇ト申ス。

○八 海外ノ交通 神武天皇以來數百年間、靜穩無事ナリシ國家ノ、崇神天皇ノ時ニ至リ、俄ニ多事トナリシハ、何ノ故ゾト云フニ、此ノ時ニ於テ日本ノ社會ハ外國ノ人民ノ爲ニ刺激セラレタルニ因ルモノナリ。開化天皇ノ末年ヨリ、我が中國及西國地方ノ人民ニシテ、朝鮮及支那ニ交通セシモノ、往々之アリキ。此等ノ人民ハ漢國ノ文藝事物ノ進歩シタルヲ見シナラン。又支那及朝鮮ノ人民ノ、我が海邊諸國ニ住居シテ、我が邦一般人民ノ未知ラザル工藝ヲ齎シ、制度ヲ傳ヘシモアリシナラン。是ニ於テ我が國ノ人民ニシテ、固有ノ事物ノ

固陋ナルヲ歎シテ、外邦ヲ慕ヒシ者モアリシナルベク、外邦ノ官民ニシテ、此ノ勢ニ乘シテ權勢ヲ我が境域ニ振ハント試ミシ者モアリシナルベシ。其ノ證トスベキハ、天皇六年ノ詔ニ、百姓流離シ、或ハ背叛スルモノアリト宣ヒ、又七年、天皇ノ御夢ニ、大物主神ノ天皇ニ諭シ給ヘリシ語中ニ、吾ガ兒大田々根子ヲシテ、吾ヲ祭ラシメ、則立ニ平ガノ。海外ノ國ニアリテハ、自當ニ歸伏スベシトアリ。十年ノ詔ニ、遠荒ノ人等、猶正朔ヲ受クズ。是未王化ニ習ハザルノミトアリ。同年十月ノ詔ニ、畿内無事ナリ。唯海外ノ荒俗ハ、騷動未止マズトアル。是ナリ。而シテ四道將軍ヲ發シテ、不順ヲ制ヒシメ給ヒシニ、因リ、海外人民ノ我が境内ニ在ル者、其ノ敵シ難キヲ知リテ、歸順セシヲ以テ、十一年ノ紀ニ、異俗多ク歸シ、國內安寧ナリト見エ、十二年ノ詔ニ、異俗譯ヲ重テ來リ、海外既ニ歸化ストアルニ至リシナリ。

○九 三韓トノ關係

是ノ時ニ當リ、韓地ハ我ト唇齒ノ關係ヲ爲シ、其ノ動靜ハ常ニ我ニ影響セリ。初メ韓地ハ馬韓一統シテ辰國ト稱ス。漢ノ初メ其ノ西境ナル朝鮮ノ王、準、燕人衛滿ニ逐ハレ、馬韓ニ亂入シテ王ト稱ス。尋イテ馬



三韓ノ別

神代ノ時三韓トノ關係

韓之ヲ滅シ辰國ヲ復ス。是ヨリ先秦人國難ヲ避ケテ韓ニ徙ル。馬韓其ノ東界ノ地ヲ與ヘテ之ニ居ラシム。種族漸繁殖シ辰韓ト稱ス。其ノ南方ノ韓種亦別レテ辨韓ト稱ス。百濟ハ其ノ一ナリ。馬韓ハ西方ニ在リテ三韓ノ中最大ニ、五十餘部落アリ。辰韓ハ其ノ東ニ位シテ十二部落アリ。辨韓ハ辰韓ノ南ニ位シテ亦十二部落アリ。此ノ三ヲ合シテ三韓ト云フ。即今ノ朝鮮國ノ在ル所ナリ。然ルニ日本ニテ三韓ト云フトキハ、此ノ三國ヲ指ス場合モアレド重ニ其ノ中ノ小國ニテ日本ト直接ノ關係アリシ新羅、百濟、高麗ヲ指スコト多シ。新羅ハ元辨韓ノ中ノ一部ナリ。南ト東トニ海ヲ受ケテ最日本ニ近ク、百濟ハ馬韓ノ中ニシテ新羅ノ西北ニアリ。西ト南トニ海ヲ受ケ、北ニモ小海アリ。高麗ハ古朝鮮ノ北方ニ位シ、元三韓ノ中ニハアラザリシナリ。

初メ神代ノ時ニ當リテ、月讀尊ノ經畧シ給ヒシ滄海ハ、蓋此ノ地方ヲ指スモノニシテ、素盞鳴尊、五十猛命モ亦嘗テ新羅ニ往キ給ヒ、大國主神ノ時ニハ新羅ノ王子天日槍我ガ邦ニ歸化セリ。神武天皇東征ノ時稻氷命亦此ニ航シテ國王トナリ、其ノ裔蕃衍シタリト云フ。サレバ當初ハ我が邦ノ版圖中ニ在リシモノナ

任那始メテ入貢ス

レド、天祖一統以來カテ内治ニ用井給フコト多端ニシテ、餘カテ外蕃ニ展ベ給フニ及バサリキ。是ヲ以テ漸皇化ニ遠ザカリ、往來途ニ絶エシモノナリ。崇神天皇ノ教化遠キニ覃ブニ及ビテ任那始メテ入貢セリ。實ニ天皇ノ六十五年紀元六百年ナリ。任那ハ新羅ノ西南ニ在リ、テ三韓ノ外タリ。本名ヲ加羅ト云フ。十小國ノ總名タリ。其ノ使人ヲ蘇那曷叱知ト曰ヒキ。

第六章 垂仁天皇及外患

垂仁天皇

○一節 狹穗彦反ス 垂仁天皇ハ活目入彦五十狹茅天皇ト申ス。崇神天皇第三ノ御子ナリ。幼ニシテ岐嶷壯ナルニ及ビテ儻大度率性眞ニ任ヲ矯飾シ給フ所ナカリキ。二年紀元三百年狹穗姫ヲ皇后ト爲シ、後譽津別命ヲ生ミ給フ。都ヲ經向ニ移シ、之ヲ珠城ノ宮ト云フ。後ニ丹波道主ノ女日葉酢媛命ヲ立テ、皇后トシ、三男二女ヲ生ミ給ヘリ。五十瓊敷入彦命、大足彦尊、大中姬命、倭姬命、稚城瓊入彦命是ナリ。

狹穗彦皇后

四年九月、皇后ノ母兄狹穗彦王謀反シ、皇后ノ燕居ヲ伺ヒ、説キテ曰ハク、ソレ色ヲ以テ人ニ事フル者ハ、色衰ヘバ寵緩ム。今天下佳人多シ、各選ニ進ミテ寵ヲ求メシ。豈永ク色ヲ持ムコトヲ得ンヤ。冀ハクハ吾鴻祚ニ登リ、必汝ト與ニ天下ニ照臨セシ。則枕ヲ高クシテ永ク百年ヲ終フベシ。亦快ナラズヤ。請フ我が爲ニ天皇ヲ殺セシト。仍リテヒ首ヲ取リテ皇后ニ授ク。皇后固ヨリ天皇ヲ弑シ奉ルコトヲ欲セズト雖、兄王ノ志亦變ズ可カラザルヲ知リ、爲ス所ヲ知リ給ハス。翌年

八綱田狹穗彦ヲ撃ツ

皇后狹穗彦ト共ニ自殺シ給フ

天皇來目ニ幸シ、高宮ニ坐ス。時ニ皇后ノ膝ニ枕シテ晝寢給ヘリ。皇后兄王ノ謀ル所ハ唯此ノ時ナリト思シ、若天皇ヲ殺シ奉ラザルトキハ、則天皇ノ兄王ヲ殺シ給フニ至ルベキヲ悲ミ、涙流レテ天皇ノ面ニ落ツ。天皇忽寤メテ皇后ニ語リ給ハク、朕今夢ニ錦色ノ小蛇朕カ頸ニ繞ハリ、又大雨狹穗ヨリ降り來リテ朕ノ面ヲ濡セリ。是何ノ祥ソヤト。皇后即包ム可カラザルヲ知リ、悚恐地ニ伏シ、奏スルニ兄王ノ反狀ヲ以テシ給ヘリ。天皇皇后ニノリ給ハク、是汝ノ罪ニ非ズト。乃近縣ノ卒ヲ發シ、八綱田ニ命ンテ狹穗彦ヲ撃ツシメ給フ。狹穗彦稻ヲ以テ城廓ヲ作り、防戦月ヲ除エヌ。皇后モ亦譽津別命ヲ抱キテ稻城ニ入り、兄王ノ罪ヲ免サレシコトヲ請ヒ給フ。然レドモ遂ニ免サズ、火ヲ稻城ニ放チテ攻メサセ給フ。是ニ於テ皇后兄王ト共ニ自殺シ給ヘリ。狹穗彦王ハ開化天皇ノ孫彦坐王ノ子ナリ。其ノ反スルハ何ノ故ナルヲ知ラズ。恐ラクハ武埴安彦ト同ク、外邦ノ開化ヲ聞キ、己天皇ニ代リテ制令ヲ改メ、新政ヲ施カシト企テタルモノナルベシ。天皇八綱田ノ功ヲ賞シ、武日向八綱田ノ號ヲ賜ヒキ。又武日トモ云ヘリ。

○二節 倭奴國王後漢ニ通ス 當時外國ノ形勢ヲ考フルニ崇神天皇ノ

四國ノ人民  
私ニ通ズ  
那ニ通ズ

倭漢ノ光武  
印綬ヲ賜フニ

宋年垂仁天皇ノ初年ニ當リテ三韓ノ分立セシコトハ、既ニ前章ニ述ベタルガ如シ。而シテ垂仁天皇ノ中世ニ當リ、支那ハ前漢亡ビ後漢興リテ、天下ノ形勢一變シ、制度文物ハ更ニ一層ノ發達ヲ見ルニ至リ、三韓モ亦從ヒテ進歩シタリ。是ヲ以テ我が西國ノ人民等私ニ三韓支那ニ通シテ往來シ、特ニ支那ノ大國ナルニ服シテ彼ノ封冊ヲ受ケ、我が朝廷ヲ輕蔑シテ貢獻セサル者アリ、又其ノ封冊ヲ受ケザレドモ、朝貢セスシテ良民ヲ掠ムル輩アルニ至レリ。コレラノ事我が國ノ歴史ニハ曾テ見ユル所無ケレドモ、後漢書ニ之ヲ載セタリ。且本邦ニモ其ノ疑フ可カラザル證據ヲ存セリ。  
後漢書卷ノ一、光武本紀ニ、中元二年春正月、東夷倭奴國王遣使獻云云トアリ。又同書卷ノ一百十五、東夷傳倭ノ條ニ、光武中元二年、倭奴國奉貢朝賀、使人自稱大夫、倭國之極南界也、光武賜以印綬云云ト見エタリ。中元二年ハ垂仁天皇ノ十八年ニ當レリ。此ノ倭奴國王ト云フハ、當時筑前ノ國怡土ノ地ノ縣主タリシ者ヲ言フト云ヘリ。此ノ時光武ノ倭奴國王ニ賜ヒシ印ハ、黃金ヲ以テ鑄造セシモノニテ、我が天明四年二月、筑前國那珂郡滋賀島ノ土中ニ於テ巨石ノ下ヨリ堀

本邦人民ノ  
支那ニ交通  
セシ始

四國人民ノ  
至リシ原因

垂仁天皇ノ  
敬神

リ出テタル蛇紐ノ金印即コレナリ。今東京上野ノ博物館ニ在リ。又同書ニ、倭在韓東南大海中、依山島爲居、凡百餘國皆稱王、自武帝滅朝鮮、使驛通於漢者三十許國、皆稱王、世々傳統、其大倭王居邪馬臺國トアリ。蓋本邦人民ノ支那ニ往來セシコトハ、周ノ時代ヨリナルコト、王充カ論衡卷ノ八卷ノ十九ナドニ見エテ、甚古キコトナレド、彼ノ國ノ正史ニハ見エズ、降リテ前漢ノ武帝ノ時ヨリ彼ニ往來シ、後漢ノ光武帝ノ時ニ至リテハ、密ニ往來スルノミナラズ、彼カ封冊ヲ受ケル者アルニ至レリ。西國ノ縣主等ガ此ノ如ク封冊ヲ受ケシハ、三韓ノ王等ガ之ヲ受ケテ各武威ヲ張リシテ漢ミテナルベシ。當時三韓ノ王等ハ皆支那ニ内屬シテ封冊ヲ受ケ、各其ノ堵ニ安ソシ居タリ。此ノ事ハ後漢書東夷傳、魏書東夷傳等ニ見エタリ。サレバ當時西國人民ノ智識發達シテ制シ難キニ至リタルハ、是海外諸國ト交際セシガ故ナリ。

○三伊勢神宮ヲ起ス 垂仁天皇モ亦父天皇ノ遺志ヲ繼ギ、神祇ヲ敬ス

ルコト更ニ重キヲ加ヘ給ヘリ。二十五年二月、武渟川別臣、彦國尊、和珥、大鹿島連、祖、十千根、連、祖、武日連、祖、ノ五人ニ詔シ給ハク、我が先皇御間城入彦五十

齊宮ヲ五十鈴川上ニ興シ給フ  
齊内親王

兵器ヲ神社ニ藏メ給ヒシ理由

瓊殖天皇ハ欽明聰達深ク謙損ヲ執リ志冲退ヲ懷キ機衡ヲ綢繆シ神祇ヲ禮祭シ己ヲ剋メ躬ヲ勤メ日一日ヨリモ慎ミ給ヘリ是ヲ以テ人民富足シ天下太平ナリキ今朕ノ世ニ當リ神祇ヲ祭祀スルコト豈怠ルヲ得ンヤト三月神器ヲ以テ更ニ倭姬命ニ託シ給フ倭姬命太神鎮座ノ所ヲ求メテ菟田ニ至リ還リテ近江國ニ入り東シテ美濃ヲ回リ伊勢ニ至ル時ニ天照太神倭姬命ニ教ヘ給ハク是ノ神風ノ伊勢ノ國ハ即常世ノ浪ノ重浪歸國ナリ傍國ノ可憐國ナリ是ノ國ニ居ラント欲スト乃太神ノ教ニ隨ヒ祠ヲ伊勢ニ立テ齊宮ヲ五十鈴川上ニ興シ給フ之ヲ磯宮ト云フ大鹿島命ヲ以テ祭主トス此ノ後代々ノ天皇皇女ヲシテ太神ニ奉侍セシメ給ヘリ之ヲ齊内親王ト稱ス

○四 節 兵器ヲ神社ニ藏ス 二十七年祠官ニ令シテ兵器ヲ神幣ト爲スコトヲトヒシメ給ヒシニ吉ヲ得タリ故ニ弓矢及横刀ヲ諸國ノ社ニ納メ仍リテ更ニ神地神戶ヲ定メ時ヲ以テ之ヲ祭り給フ按ズルニ當時兵庫ノ制未起ラズ而シテ諸國ニ令シ祭器トシテ武器ヲ守藏セシメ給ヒシハ一ハ以テ武運ヲ祈リ一ハ以テ萬一ノ用ニ備ヘ給ヒシナリ三十九年皇子五十瓊敷命茅渟ノ菟

物部氏石上ノ神寶ヲ治ス

任那將軍ノ派遣ヲ奏請ス

砥川上ノ宮ニ坐シテ鍛工河上ニ命シ劍一千口ヲ作ラシメ石上ノ神宮ニ藏メ給フ依リテ天皇五十瓊敷命ヲシテ石上神宮ノ神寶ヲ作ラシメ楯密倭文部神弓削部神矢作部大穴磯部泊樞部玉作部神刑部日置部大刀佩部並セテ十個ノ部民ヲ以テ命ニ賜フ五十瓊敷命老イ給フニ及ヒテ妹大中姬代リテ神寶ヲ主リ遂ニ物部十千根ニ授ケテ治メシメ給ヘリ是ヨリ物部氏ハ代々石上ノ神寶ヲ治ス同年又屯倉ヲ來目邑ニ興シ給フ蓋兵糧ヲ備ヘ給ヒシナリ

廿六年ニ天皇十千根ヲ出雲ニ遣リテ其ノ神寶ヲ校定セシメ八十八年ニ使ヲ但馬ニ遣シテ天日槍ノ新羅ヨリ齋シシ七種神寶ヲ檢定セシメ給ヘリ天日槍ハ前述ノ如ク新羅ノ王子ニシテ其ノ歸化ハ神代ニ在リ夫ノ垂仁天皇ノ初年ニ歸化セリト云フハ自別人ナラン

○五 節 任那ニ日本府ヲ置ク 年月ハ詳ニシ難ケレドモ此ノ天皇ノ御世ニ任那ニ鎮守將軍ヲ置カレタリコレ疑モナキ事實ナリ姓氏錄倭ニ詳ノ吉田連ノ條ニ曰ハク御間城入彦天皇仁垂ノ御世ニ任那ノ國奏シテ曰ハク臣ガ國ノ東北ニ三巴波ノ地アリ方三百里ナリ土地人民亦富饒新羅國ト相爭ヒテ

彼是攝治スルコト能ハス兵伐相尋キ民生ヲ聊セズ臣將軍ヲ請ヒテ此ノ地ヲ治メシメ即貴國ノ部ト爲サント天皇大ニ悅ビ群臣ニ勅シテ遣スヘキ人ヲ奏セシメ給フ卿等奏シテ曰ハク彦國尊命ノ孫鹽垂津彦ハ其ノ長五尺力衆人ニ過キ性亦勇悍ナリト天皇鹽垂津彦ヲ遣ス勅ヲ奉テ鎮守ス彼ノ俗宰ヲ稱シテ吉ト爲ストアリ此ノ鎮守將軍即吉ノ居ル所ハ任那十國ノ一ナル安羅ト云ヒシ國ニテ後ニ之ヲ日本府ト云ヘリ彼ノ國人ハ日本ノ鎮守將軍ニ敬服シタリキ日本書紀欽明天皇ノ條ニ夫任那ハ安羅國ヲ以テ兄ト爲シ唯其ノ意ニ從フ安羅人日本府ヲ以テ父ト爲シ唯其ノ意ニ從フナド其ノ國人ノ語ヲ載セタルニテ知ルベシ

日本府

按ズルニ蘇那曷叱知ノ崇神天皇ノ末年ニ來レルハ鎮守將軍ノ派遣ヲ請ハンガ爲ナリ而シテ其ノ事未決セズシテ天皇崩ヲ給ヒシナリ垂仁天皇ノ二年ニ至リ蘇那曷叱知國ニ歸ラント請フ天皇詔シ給ハク汝ノ來ルコト先帝ノ世ニ在リ先帝ノ御名ハ御間城入彦ナレバ今其ノ遺志ヲ追ヒ汝ノ國ヲ彌摩那任那ハ普通ト名ツクベシト而シテ將軍派遣ノ事ハ此ノ後ニ在リシナリ任那ノ建

任那ノ國名ヲ賜フ

因ハ光武皇帝ノ建武十五年トアリ是垂仁天皇ノ六十八年ナリ又姓氏錄ニ鹽垂津彦ハ彦國尊ノ孫トアリ而シテ彦國尊ハ垂仁ノ初年ニ尙朝廷ノ要路ニ在リキ是ヲ以テ鎮守將軍ノ派遣ヲ謀シ

○六節勸農 三十五年天皇五十瓊敷命ヲ河内國ニ遣シ高石池ト茅渟池トヲ作ラシメ又倭ノ狹城池ト迹見池トヲ作ラシメ給フ同年又諸國ニ令シテ多

天皇心ヲ農ヲ事ニ用非給

ク澗池ヲ開キ水利ヲ計ラシメ給ヘリ是ノ時堀ル所ノ池其ノ數八百ト稱ス天皇心ヲ農事ニ用非給ヒシコト斯ノ如シ是ニ因リ百姓富寛ニシテ天下太平ナリキ

○七節野見宿禰及角力 垂仁天皇ノ紀事ハ野見宿禰ニ及ブニ非ズベ完

當麻蹶速

キヲ得ベカラズ天皇ノ初年ニ當麻邑ニ當麻蹶速トイヘル者アリ人ト爲リ勇悍強力能ク角ヲ毀キ鉤ヲ伸ブ恒ニ衆ニ語リテ曰ハク四方ニ求ムルモ我が力ニ比ブベキ者ナキヲ遺憾トス強力者ニ遇ヒテ死生ヲ期セズ角爭スルコトヲ得ノコト是吾ガ一生ノ願ナリト天皇之ヲ聞キ群卿ニ問ヒ給ハク果シテ當麻蹶速ノ力ニ及ブ者ナキヤト一臣進ミテ曰ハク臣聞ク出雲國ニ勇士アリ野見宿禰ト云フ請フ召シテ之ヲ試ミ給ヘト天皇即日人ヲ遣シテ宿禰ヲ召シ

角力ノ始メ

其ノ至ルニ及ビテ之ニ命ヲテ驟速ト角力ヒシメ給フ。二人相對ヒテ立チ、各足ヲ擧ゲテ相蹴ル。宿禰則驟速ノ脇骨ヲ蹴折リ、又其ノ腰ヲ踏ミ折リテ之ヲ殺シヌ。因リテ驟速ノ地ヲ取リテ悉之ヲ宿禰ニ賜ヘリ。宿禰乃留マリ仕フ。廢殉ノ議起ルニ及ビテ更ニ勳功アリキ。

(六八)

○八殉死ヲ廢ス 殉死ハ本邦太古以來ノ習俗ナリシナリ。廿八年、天皇ノ同母弟倭彥命薨セラレシトキ、近習ヲ集メ生ケナガラ埋メテ陵域ヲ立テシニ、

野見宿禰功ヲ賞シ土部給フ

數日死ナズ、晝夜泣吟ス。死スルニ及ビテハ衆尸腐爛シ、犬鳥聚マリ瞰ム。天皇其ノ狀ヲ悲傷シ給ヒ、群卿ニ詔シ給ハク、生ケルトキ愛セル所ノ者ヲシテ殉亡ヒシムルハ甚傷シ。古風タリト雖、良キニ非ザルモノハ何ゾ從ハソ。自今以後議シテ殉ヲ止メヨト。三十二年、皇后崩ズ、廢殉ノ議更ニ起ル。爰ニ野見宿禰策ヲ按シ、出雲國ノ土部一百八ヲ喚上シ、自土部等ヲ領シ、楯ヲ取リテ人物及種々ノ物ノ形ヲ作り、以テ生人ニ易ヘテ陵墓ニ樹テント請フ。天皇大ニ喜ビテ其ノ議ヲ納レ給ヒ、乃令テ下シテ宣ハク、自今已後陵墓ニハ必此ノ土物ヲ樹ツベシ。人ヲ傷ルコト勿レト。厚ク野見宿禰ノ功ヲ賞シ、鍬地ヲ賜ヒ、土部ノ職ニ任シ給ヘリ。

因リテ本姓ヲ改メテ土部臣トス。是ヨリ土部等世々天皇喪葬ノ事ヲ主ル。按ズルニ石人ヲ以テ殉ニ易フル風ハ漢土古ヨリ之アリ、而シテ上世既ニ之ヲ本邦ニ傳ヘタルハ、盤井君ノ墓事屬體天皇ヨリ石人ヲ得タルニテ知ルベシ。サレハ野見宿禰モ亦仄ニ漢風ヲ聞キ、之ヲ摸シタリシニハ非ザルカ。

山道間守非時香菓ヲ求

○九常世國ニ臻ル 九十九年、天皇經向宮ニ崩シ給ヒキ。時ニ御歲百四十歳ト稱ス。是ヨリ先山道間守天皇ノ命ヲ奉シテ常世國ニ至リ、非時香菓ヲ求ム。今ノ橘ナリ。十年ヲ經テ歸ル。時ニ天皇既ニ坐サズ。山道間守悲歎シテ曰ハク、吾天命ヲ受ク百難ヲ冒シ、万里ノ波濤ヲ越エテ絕境ニ往ク。常世國ハ神仙ノ秘區、最臻リ難シ。聖帝ノ神靈ニ頼リ、僅ニ歸ルコトヲ得タルニ、天皇既ニ崩シ給ヒ、復命スル所ナレシ生キテ亦何ノ益アラント。乃天皇ノ陵ニ向ヒ、叫哭シテ自死ス。群臣聞キテ皆涙ヲ流ス。按スルニ橘ヲ生ズト云フヨリ推セハ、常世國ハ蓋南海ノ一島ナラン。

常世國

朝官ノ實略備ハル

○十朝政ノ形勢 本邦政體ノ進歩ニ就キテ注目スベキハ、垂仁天皇ノ朝ニ至リ、朝官ノ實略備ハリシコト是ナリ。崇神天皇ノ時既ニ群卿ニ詔シテ將

軍ヲ四道ニ遣シ給ヒシコトアレド、政事ヲ朝臣ニ議セラレシ趣ノ殊ニ明ニ見  
ニタルハ、垂仁ノ朝ヲ始メトス。即一事一物群卿ニ計リ、其ノ議ヲ聞キ而ル後制  
令ヲ發シ給ヘリ。而シテ其ノ群卿ト稱スルハ皇族又ハ臣下大氏ノ氏長ナリ  
シナリ。例ヘハ伊勢神宮ヲ興シ給フ時ニ於テ、詔ヲ受ケタル者五人、其ノ武渟  
川別命ハ孝元天皇ノ皇子大彥命四道將一、後ニシテ阿倍氏ノ氏長ナリ。其ノ彦  
國菴命武埴安彦ノ亂ヲ平ケシカハ孝昭天皇ノ皇子天足彦國押人命ノ後ニシテ、和珥氏  
ノ氏長ナリ。其ノ大鹿島ハ天兒屋根命ノ後ニシテ、中臣氏ノ氏長ナリ。其ノ十千  
根ハ饒速日命ノ後ニシテ、物部氏ノ氏長ナリ。其ノ武日ハ日臣命ノ後ニシテ、大  
伴氏ノ氏長ナリ。即初メノ二人ハ皇別ニシテ、後ノ三人ハ神別ナリ。シカドモ、  
因リテ按ズルニ當時未一定ノ官名アラザリシカドモ、朝廷事アル毎ニ皇族ノ  
功蹟アル者及臣下大氏ノ氏長ヲ集メテ奏議セシメラレシ者ナリ。又野見宿  
禰ノ如キモ天穗日命ノ十四世ノ孫ニシテ、加フルニ技能アリシヲ以テ、抽デラ  
レテ朝廷ニ任仕シタルナリ。

(七〇)

## 第七章 景行天皇

景行天皇

大碓命小碓命

我が國民ノ  
權勢ノ頓ニ  
増進シタル  
原因

○一節 帝權擴張ノ原因 景行天皇ハ垂仁天皇第三ノ皇子ナリ。大足彦忍  
別オホタラシヒコ天皇ト申ス。二年紀元七百三十二年播磨イハヒ日大郎姫オホヒロイメヲ立テ、皇后ト爲シ、二男ヲ生  
ミ給フ。雙生ニ坐ス。因リテ二王ヲ號ケテ大碓命オホウサ、小碓命オホウサト云フ。小碓命幼ニシテ  
雄略ノ氣アリ。壯ナルニ及ビテ容貌魁偉、身長一丈、力能ク鼎ヲ扛ケ給フ。日本武  
尊ト稱スル是ナリ。天皇又數妃アリ。生ミ給ヘル皇子凡ベテ八十ヤソ柱ト云フ。  
此ノ天皇ノ御宇ニ至リ、我が國民ノ權勢ハ頓ニ増進シタリ。其ノ近因ハ天皇ノ  
武威ニ富ミ給ヒシト、日本武尊ノ非常ノ英雄ニ坐シ、ト、武内宿禰トクノミ輔弼ノ大功  
アリシトニ存スレドモ、其ノ遠因ハ實ニ日本國民ノ邊境民種ト存立テ競ヒ、漸  
之ニ勝ツコトヲ得タルニ因ルナリ。凡社會ハ、外部ノ社會ト存立テ争フニ因  
リ、其ノ團結強固ヲ致シ、編制緻密ニ赴クコト古今ノ通理ナリ。景行天皇ノ時ヨ  
リ西ニ熊襲アリ、北ニ蝦夷アリ、時ニ支那モ亦其ノ後援ヲ爲シシカ故ニ、面前我  
ニ抗敵シ、我彼ヲ斃サズバ、彼必我ヲ斃サントスルニ至リシハ、是即第一期ノ終

ニ於ケル變遷ノ大原由ナリ。

○節 天皇熊襲ヲ征シ給フ 當時日向大隅薩摩ノ地ニ民種アリ熊襲

ト云フ前ニ所謂島帥民種ノ後ノ蕃殖セルモノナルベシ要スルニ天孫ト同種ノ民ニ非ズ而シテ平時ハ大倭ニ在シマス天皇ニ抗敵セザレドモ亦其ノ統治ヲ受タルコトヲ好マザリシモノナリ一説ニ神武天皇ノ伯父火閼降命ハ西國ニ居テ其ノ裔世熊襲ノ上ニ權勢ヲ得タリト云フ

熊襲反ス  
天皇筑紫ニ幸シ給フ

神夏磯媛天  
使ヲ奉迎ス

然ルニ天皇ノ十二年ニ熊襲反シ勢甚盛ナリ是ニ於テ天皇親征シ給フ其ノ途中ノ紀事ハ頗當時西國ノ物情ヲ知ルニ便ナリ 八月天皇筑紫ニ幸シ九月周芳ノ娑磨ニ到リ南ヲ望ミテ群卿ニ詔シ給ハク南方ニ烟氣多ク起ツ必賊アラント乃留マリテ先多臣ノ祖武諸木國前臣ノ祖菟名手物部君ノ祖夏花ヲ遣シテ其ノ狀ヲ察セシメ給フ爰ニ女人アリ神夏磯媛ト云フ一個ノ魁帥ニシテ其ノ徒甚多シ天皇ノ使者至ルト聆キ磯津山ノ賢木ヲ抜キテ上枝ニハ八握劍ヲ掛ク中枝ニハ八咫鏡ヲ掛ク下枝ニハ八咫瓊ヲ掛クマタ素幡ヲ船舳ニ樹テ參向シ啓シテ曰ハク我が屬類ハ必違カシ今將ニ歸德セントス唯殘賊アリ一ヲ

豐前ノ瓊賊

鼻垂ト曰フ妄ニ名ヲ假リ山谷ニ嚮集シテ菟狹ノ川上ニ屯セリ豐前國宇佐ニ

ヲ耳垂ト云フ貪婪殘暴ニシテ屢人民ヲ掠略スコレ御木ノ川上ニ屯セリ豐前國

毛郡ニ三ヲ麻剝ト曰フ潛ニ徒黨ヲ集メテ高羽ノ川上ニ居リ四ヲ

土折猪折ト曰フ綠野ノ川上ニ隱住シ山川ノ險ヲ恃ミテ多ク人民ヲ掠ム此ノ

四人ハ其ノ據ル所並ニ要害ノ地ナリ各眷族ヲ領非テ一處ノ長ト爲ル皆曰ハ

ク皇命ニ從ハサト願ハクハ急ニ之ヲ擊テト是ニ於テ武諸木等マツ麻剝ノ徒

ヲ誘ヒ赤衣禪及種々ノ奇物ヲ賜ヒ兼テ不服ノ三人ヲ召サシム乃衆ヲ率テ

テ來ル依リテ悉捕ヘテ之ヲ誅ス天皇遂ニ筑紫ニ幸シ豐前國長峽縣ニ到リ行

宮ヲ興テ在マス故ニ其ノ處ヲ號ケテ京ト曰フ 十月碩田國ニ至リマス時

ニ速見邑ニ女人アリ速津媛ト云フ一處ノ長ナリ車駕到リマセリト聞キテ自

奉迎シ奏シテ曰ハク此ノ山ニ大石窟アリ巖石窟ト云フ二ノ土蜘蛛アリ一ヲ

青ト曰ヒ二ヲ白ト曰フ又直入縣ノ禰野ニ三ノ土蜘蛛アリ一ヲ打殺ト云ヒ

二ヲ八田ト云ヒ三ヲ國摩侶ト云フ此ノ五人強力ニシテ衆類亦多シ皆曰ハク

皇命ニ從ハシト天皇來田見邑ニ權ニ宮室ヲ建テ之ニ在シ群臣ト議シテ宣

豐後ノ土蜘蛛

豐前ノ京



日向高屋宮

ハク、今多ク兵衆ヲ勳カサバ、土蜘蛛等畏レテ山野ニ隠レ、必後ノ愁ヲ爲サント。乃猛卒ヲ簡ヒテ謀ヲ授ク、山ヲ穿テ草ヲ排キ、遂ニ稻葉川上ニ至リ、悉石窟ノ土蜘蛛ヲ殺サシメ、進ミテ禰野ノ打獲ヲ討クノトシ給フ。禰野山ヲ越ユルトキ、賊虜ノ矢雨ノ如ク下ル、天皇因リテ城原ニ返リ、兵ヲ勒シテ先八田ヲ擊テ之ヲ殺シ給フ。打獲勝ツ可カラザルヲ知り、降ヲ請フト。雖聽シ給ハザリシヲ以テ、皆自洞谷ニ投シテ死ス。十一月、日向國ニ至リ行宮ヲ起テ、在マス。之ヲ高屋宮ト云フ。此ニ於テ熊襲ヲ討ツコトヲ議ス。天皇群卿ニ詔シ給ハク、朕聞ク熊襲國ニ厚鹿文、進鹿文ノ二人アリ。熊襲ノ渠帥ナリ、衆類甚多シ。之ヲ熊襲ノ八十島帥ト云フ。其鋒當ル可カラス。寡兵ヲ用ウルトキハ、賊ヲ滅スルニ足ラズ。大軍ヲ勳カサバ百姓ヲ害セシ。如何セバ則鋒刃ノ威ヲ假ラズシテ坐ナガラ其ノ國ヲ平ケ得ヘキト。一臣進ミテ曰ハク、熊襲島帥ニ二女アリ。姉ヲ市乾鹿文ト曰ヒ、妹ヲ市鹿文ト曰フ。容貌端正ニシテ、心性雄武ナリ。宜シク重幣ヲ以テ麾下ニ攝納レ、因リテ以テ其ノ消息ヲ伺ヒ、不意ヲ伐ツベシト。天皇此ノ謀ヲ可トシ、二女ヲ召シテ陽ニ寵シ給フ。市乾鹿文天皇ニ奏シテ曰ハク、熊襲ノ服セザルヲ愁ヘ給フ

熊襲ノ國平

コト勿レ、妾ニ瓦策アリト。即一二ノ兵ヲ從ヘテ家ニ返リ多ク醇酒ヲ設ケテ父ニ飲マシメ、其ノ醉ヒテ寝タルトキ、密ニ弦ヲ斷テ、從兵ヲシテ之ヲ殺サシム。天皇市乾鹿文ノ不孝ヲ惡ミテ之ヲ誅シ、妹市鹿文ヲ以テ火國造ニ賜フ。十三年五月、悉熊襲國ヲ平ケ給フ。而シテ尙高屋宮ニ在マス。コト六年ナリキ。十八年三月、天皇還幸セント欲シ、筑紫國ヲ巡守シ、夷守ニ到リマス。是ノ時石瀨ノ河邊ニ人多ク集マレリ。天皇兄夷守、弟夷守ヲ遣リ視シメ給フ。弟夷守還リ來リテ奏ス。是諸縣君泉媛、天皇ノ爲ニ大御食ヲ獻ラントシテ、其ノ族ヲ會セルナリト。四月、熊襲縣ニ到リマス。熊津彦ト云フ者兄弟二人アリ。天皇先兄熊ヲ召シ給フニ、則使ニ從ヒテ詣ル。而シテ弟熊ハ徵ニ應セザリシヲ以テ兵ヲ遣リテ之ヲ誅シ給フ。五月、葦北ヨリ船ヲ發シテ火國ニ至リ給フ。夜冥クシテ岸ニ著クコト能ハス。造ニ火光ヲ視詔シ給ハク、直ニ火ノ所ヲ指セト。則八代縣豐村ニ著クコトヲ得タリ。火ノ主ヲ問ヘドモ知ルコトヲ得ズ。茲ニ其ノ人火ニ非ザルヲ知ル。故ニ其ノ國ヲ名ツケテ火國ト曰フ。十九年九月、天皇日向ヨリ還御シ給ヘリ。

火國

熊襲ニタビ  
反ス

(七六)

○三節 日本武尊熊襲ヲ伐ツ 二十七年八月熊襲又反シ邊境ヲ侵シテ止マズ皇子小碓命ヲ遣リ之ヲ擊タシメ給フ小碓命時ニ年十六熊襲ノ國ニ到リ其ノ消息及地形ヲ窺ヒ給フニ魁帥アリ名ヲ取石鹿文ト曰ヒ又川上烏帥ト曰フ一日親族ヲ會シテ宴飲ス小碓命髮ヲ解キテ童女ノ姿ヲ作シ劍ヲ袖裏ニ佩キ宴室ニ入り婦女ノ中ニ居給フ川上烏帥其ノ容姿ヲ美トシ手ヲ携ヘテ席ヲ同クシ杯ヲ舉グ飲マシメテ戯弄ス更深ク人闌クニ及ビ命劍ヲ抽キ川上烏帥ノ胸ヲ刺シ給フ川上烏帥頭ヲ叩キテ曰ハク且待チ給ヘ吾言フ所アラント命劍ヲ留メテ待チ給ヘベ君ハ誰人ゾト問フ對ヘテ曰ハク吾ハ是大足彥天皇ノ子ナリ名ヲ日本童男ト云フト川上烏帥啓シテ曰ハク吾ハ國中ノ強力者ナリ故ニ我が威力ニ從ハザル者無シ吾多ク武力ノ人ニ遇フ而ルニ未皇子ノ如キ者ヲ見ズ因リテ尊號ヲ奉ラントス聽シ給フベキカト命之ヲ賜シ給ヘベ則啓シテ曰ハク自今以後皇子ヲ號シテ日本武皇子ト稱シ奉ルベシト言訖ヘテ胸ヲ通シテ之ヲ殺シ然ル後兵ヲ遣リ悉黨類ヲ斬リ給フ日本武尊歸途吉備ニ到リ穴海ヲ渡リ給フ時ニ惡神アリキ即之ヲ殺シ又難波ニ到リテ柏濟ノ惡

日本武尊川  
上烏帥ヲ誅  
シ給フ

武内宿禰北  
陸及東方諸  
國ヲ巡察ス

日高見國

東夷反ス

神ヲ殺シ給ヘリ蓋惡神ト稱スルハ部屬ノ長ニシテ自神ト稱シ王命ニ服セザリシ者ナリ 二十八年二月日本武尊平賊ノ狀ヲ奏セラレシカバ天皇大ニ其ノ功ヲ美メ給ヒキ

○四節 日本武尊東夷ヲ伐ツ 是ヨリ先天皇ノ二十五年ニ武内宿禰ヲ遣シテ北陸及東方諸國ノ地形ト百姓ノ消息トヲ察セシメ給フ二十七年武内宿禰還リ奏ス東夷ノ中日高見國アリ其ノ國人男女并ニ椎結文身ス人ト爲リ勇悍ナリ總ベテ蝦夷ト稱ス土地亦沃壤ニシテ曠シ擊チテ取ルベキナリト然レドモ久シク征伐ノ議ニ及バズ四十年東夷反シ邊境ヲ騷ガス天皇群卿ニ詔シ給ハク今東國穩ナラズ暴ブル神多ク起リ蝦夷悉叛シ屢人民ヲ掠ム誰人ヲ遣シテ其ノ亂ヲ平グント日本武尊曰ハク臣則先ニ西征ニ勞セリ是ノ役必大碓皇子ノ事ナラント大碓命之ヲ聞キ恐怖シテ草中ニ逃ケ隠レ給フ天皇使者ヲ遣シテ召シ且責メテ宣ハク汝欲セズバ豈強ヒテ遣ラシヤ何ソ未賊ニ對ハザルニ豫懼ルコトノ甚シキト此ニ因リ大碓命ヲシテ儲位ニ居ラシメズ美野ニ封シテ其ノ國ノ君トシ給ヘリ日本武尊乃自進ミテ亂ヲ平グント

日本武尊ニ  
勅シテ東夷  
ヲ征セシメ  
給フ

日本武尊伊  
勢神宮ヲ拜  
シ給フ

(七八)

請ヒ給フ。天皇之ヲ許シ給ヒ、乃宣ハク、朕聞ク東夷ハ讎性强暴、凌犯ヲ事トス。村ニ長ナク邑ニ酋ナシ、各封堺ヲ食リ、並ニ相盜略ス。亦山ニ邪神アリ、郊ニ姦鬼アリ。衢ヲ遮リ徑ヲ塞ギ、多ク人ヲ苦マシム。其ノ東夷ノ中ニ蝦夷最强シ、男女居ヲ交ヘ父子別ナシ。冬ハ則穴ニ宿リ、夏ハ則櫟ニ住ム。毛ヲ衣、血ヲ飲ミ、昆弟相疑フ。山ヲ行クコト飛禽ノ如ク、草ヲ行クコト走獸ノ如シ。恩ヲ承ケテハ則忘レ、死ヲ見テハ必報セントス。是ヲ以テ箭ヲ頭鬚ニ藏シ、刀ヲ衣中ニ佩ク。或ハ黨類ヲ聚メテ邊界ヲ犯シ、或ハ農桑ヲ伺ヒ、以テ人民ヲ略ス。擊テバ則草ニ隱レ、追ヘバ則山ニ入り、往古以來未王化ニ染マズ。今朕汝ノ人トナリヲ察スルニ、身體長大、容姿端正、力能ク鼎ヲ扛ク。猛キコト雷電ノ如クシテ、向フ所敵ナク、攻ムル所必勝ツ。即知ル形ハ我が子ニシテ、實ハ神人ナルヲ、是寔ニ天朕ノ不敵ト國ノ不平トヲ愍ミ、天業ヲ經綸セシメテ、宗廟ヲ絶エザラシメントスルカ。是ノ天下ハ即汝ノ天下ナリ。此ノ位ハ即汝ノ位ナリ。願ハクハ深ク謀リ遠ク慮リ、以テ姦鬼ヲ攘ヘヨト。乃吉備武彦ト大伴武日トニ命ヲテ尊ニ從ハシメ給ヘリ。

十月、東征ノ軍京ヲ發ス。日本武尊道ヲ柱ケテ伊勢ニ到リ、神宮ヲ拜シ、倭姬命ニ

倭姬命

弟橘姫海ニ  
入り給フ

辭シテ曰ハク、今大命ヲ被リ、東征シテ叛者ヲ誅セントス。倭姬命神託ヲ奉ツ、叢雲劍ヲ取リテ、日本武尊ニ授ケテ曰ハク、慎ミテ怠ルコト莫レト。同年、官軍駿河ニ至ル。其ノ國ノ賊陽リ降り、欺キテ曰ハク、是ノ野ニ麋鹿甚多シ。臨ミテ狩シ給ヘト。尊其ノ言ヲ信ツ、野ニ入りテ狩シ給フ時、賊火ヲ放チテ尊ヲ殺サントス。尊佩キ給ヘル叢雲劍ヲ以テ草ヲ薙キ攘ヒ、又燧ヲ鑽リテ向ヒ火ヲ放チ、却リテ悉賊衆ヲ焚キ殺シ給ヘリ。因リテ神劍ノ名ヲ改メテ草薙劍ト云ヒ、其ノ地ヲ名ケテ燒津ト云フ。今ノ益頭郡是ナリ。又進ミテ相模ニ入り、上總ニ往カント欲ス。海中暴風忽起リ、船漂蕩シテ渡ル可カラス。時ニ尊ノ妃弟橘姫啓シテ曰ハク、今風起リ浪溢クシテ、船將ニ没マントス。是必海神ノ心ナリ。願ハクハ妾ノ身ヲ以テ尊ノ命ヲ贖ハント。言訖ヘテ瀾ヲ披キ海ニ入り給ヘバ、暴風即止ミ、船岸ニ着クコトヲ得タリ。乃上總ヨリ轉シテ陸奥國ニ入り、海路ヨリ葦浦ヲ廻リ横ニ玉浦ヲ渡リテ蝦夷ノ境ニ臻リ給ヒヌ。時ニ大鏡ヲ船ニ懸ケタリ。蝦夷ノ賊首島津神國津神等竹水門ニ屯シ拒戦セントス。然レトモ遙ニ尊ノ船ヲ視テ其ノ威勢ニ怖レ、悉弓矢ヲ捨テ、望拜シ、且曰ハク、君ノ容貌ヲ仰ギ奉レバ人倫ニ

蝦夷降伏

吾妻

秀ヲ給ヘリ。神ノ御子ニハ坐サザルカ。願ハクハ姓名ヲ知ラント。尊對ヘテ曰ハク、吾ハ是現人神ノ子ナリト。現人神トハ即天皇ヲ申スナリ。是ニ於テ蝦夷等愈慄レ、裳ヲ褰ク、浪ヲ披キ、尊ノ船ヲ扶クテ岸ニ着ク。而縛テ罪ニ服ス。乃其ノ罪ヲ免シ、唯首帥等ノミヲ俘ニシ給ヘリ。

蝦夷既ニ平キヌ、尊乃信濃國及越國ノ王化ニ從ハザル者ヲ征シ給ハントシテ、甲斐ヨリ北シ、武藏、上野ヲ經、西シテ碓氷ノ坂ニ逮リ、弟橘姬ヲ追慕シ給フ情禁ズルコト能ハズ。峯ニ登リ三嘆シテ、吾嬬者耶トノリ給フ。是ヨリ山東ノ地ヲ稱シテ、吾妻ト曰フ。是ニ於テ道ヲ分チ、吉備、武彦ヲ越國ニ遣シテ地形民情ヲ察ホシム。而シテ尊ハ進ミテ信濃ヨリ美濃ニ至リ給フニ、武彦越國ヨリ歸リテ此ニ會シ、共ニ尾張ニ入ル。尊尾張連ノ女宮寶媛ヲ娶リ、滯留月ヲ除ニ給フ間ニ、近江ノ膽吹山ニ暴神アリト聞キ、即神劔ヲ解キテ宮寶媛ノ家ニ置キ、徒行シテ膽吹山ニ至リ給ヘリ。傳ヘ云フ、時ニ山神化シテ大蛇トナリ、毒氣ヲ吹キテ尊ヲ苦マシメタリト。蓋未開ノ世ハ山谷毒氣多キ處モアリシナラン。尊是ニ於テ病ヲ得、尾張ニ還リ、轉シテ伊勢ノ能褒野ニ至リ給ヘル時ニ、御病殊ニ甚シ。乃蝦夷

(八〇)

俘ヲ神宮ニ命セシメ給フ

日本武尊能褒野ニ薨シ給フ

ノ俘等ヲ以テ神宮ニ獻シ、武彦ヲ還リテ天皇ニ奏シテ曰ハク、臣命ヲ天朝ニ受ケ、遠ク東夷ヲ征ス。即神恩ト皇威トニ頼リ、反者罪ニ伏シ、荒神自調ヘリ。是ヲ以テ甲ヲ卷キ、戈ヲ戡メテ凱旋セリ。然レドモ天命忽至リ、隙駟停メ難シ。獨曠野ニ臥シテ誰モ語ルコト無シ。豈身ノ亡スルヲ惜マンヤ。唯天顏ヲ拜セザルヲ悲ムノミト。遂ニ此ノ所ニ薨シ給ヘリ。時ニ年三十。天皇之ヲ聞キ、晝夜喉咽泣悲シ之ヲ能褒野ノ陵ニ葬リ給フ。尊後ニ白鳥ニ化シ飛ビテ大倭ノ琴彈原ニ至リ。又河内ノ舊市邑ニ至リ給フ。因リテ其ノ所ニモ亦陵ヲ建テラレタリ。

○節五 天皇東巡 五十三年八月、天皇群卿ニ詔シ給ハシ、朕愛子ヲ願ミルコト何ノ日カ止マン。冀ハシハ小碓王ノ平クシ所ノ國ヲ巡狩セント欲スト。是ノ

月、乘輿伊勢ニ幸シ、轉シテ東海ニ入り、十月上總國ニ至リ、海路ヨリ淡水門ヲ渡リ給フ。時ニ覺賀鳥ノ聲ヲ聞キ、其ノ鳥ノ形ヲ見ント欲シテ、尋テ海中ニ出デ、因リテ白蛤ヲ得給ヘリ。隱臣ノ遠祖名ハ磐鹿六鴈浦ヲ以テ手繼トシ、白蛤ヲ贈ニ造リテ之ヲ進ム。是ニ於テ六鴈臣ノ功ヲ美メ、膳大伴部ヲ賜フ。十二月、東國ヨリ還リテ伊勢ニ在マス。之ヲ綺宮ト謂フ。抑此ノ東巡ハ唯愛子ヲ追慕シ給

伊勢綺宮

東遷ノ理由

ハル故ノミニ非ズ、熊襲ハ已ニ親征シ給ヒシカドモ、東方ノ平定ハ之ヲ日本武尊ニ委任シ給ヒシガ故ニ、今ニ至リ親シク其ノ地形民情ヲ察シ、以テ國郡ノ境界ヲ定メ、天業ヲ恢弘シ給ハシガ爲ナリシナリ。

彦狹島王ヲ東山道ノ都トシ給フ

○六節御諸別王ヲ東國ニ封ズ 五十五年二月、彦狹島王ヲ以テ東山道

十五國ノ都督ニ拜シ給フ。是豐城命ノ孫ナリ。王春日ノ穴作邑ニ到リ、病ヲ得テ薨ズ。時ニ東國ノ民王ノ至ラザルヲ悲ミ、竊ニ其ノ尸ヲ盜ミテ上野國ニ持テ歸リ、之ヲ葬レリト云フ。五十六年八月、御諸別王ニ詔シ給ハク、汝ノ父彦狹島王未任所ニ赴カズシテ薨ゼリ。故ニ汝ニ命シテ專東國ヲ領セシム。是ニ於テ御諸別王命ヲ奉シ、父ノ業ヲ成サント欲シ、行キテ之ヲ治メ、早ク善政ヲ得テ、時ニ蝦夷騒動ス。乃兵ヲ舉ゲテ之ヲ擊ツ。蝦夷ノ首帥足振邊大羽振邊、遠津關男邊等順首シテ罪ヲ受ケ、盡其ノ地ヲ獻ズ。王因リテ降ル者ヲ免シ、服セザル者ヲ誅ス。是ヲ以テ東ノ方久ク無事ナリキ。日本書紀蓋此ニ東山道ト云ヘルハ、後世近江以東ヲ指シテ云ヘルト同シカラズ。山東ノ諸國ヲ吾嬬國ト曰フナドアルト同シク、信濃ト上野トノ界ノ山ヨリ東ヲ指スナリ。彦狹島王ハ狹穗彦謀反ノ時功

蝦夷ノ首帥降ル

アリシ八綱田命ノ子ニテ、祖父豐城入彦命ノ時ヨリ世々東國ヲ有チシ因アリ、且政ヲ治ムルオアリシヲ以テ、カク數國ヲ統轄セシメラレタルナリ。但都督ト云フハ、日本書紀編纂ノ時ニ付シタル名義ニシテ、當時實ニ此ノ職名アリシニ非ズ。

○七節帝國版圖統一ノ難點

此ノ時代ヲ研究スルニ當リ、地形上ヨリシテ帝國統治ノ難易ニ影響シタル所以ヲ觀察スルトキハ、後ノ變遷ヲ知ルニ大ナル便利アラソ。抑、日本國ノ地形ハ、東北ヨリ西南ニ延長シ、氣候風土大ニ異ルガ上ニ、西南ハ海ヲ以テ中部ト分離シ、東北ハ山ヲ以テ畿甸ト隔絶セルヲ以テ、中國ヲ本據トシ給ヘル天皇ノ統治ハ、常ニ西國ト東國トニ於テ多クノ障礙ニ遭ヒタリ。故ニ不順ノ徒アル毎ニ、西邊ヲ恃マザルトキハ必東方ニ據リキ。中古ニ至リテモ全國ニ畫一ノ制ヲ布クコト能ハズシテ、西ニ太宰府ヲ設ケ、東ニ鎮守府ヲ置カレタリ。而シテ四國九州ノ如キハ、其ノ中國ヲ去ルコト甚遠カラズ、加フルニ航海ノ利アリシヲ以テ、外國無事ノ日ニ在リテハ、常ニ治平ニ歸シタレドモ、東國ニ至リテハ、碓氷、函根ノ峻險アリテ、往來ニ便ナラズ、隨ヒテ

我が國ノ地形統治ノ難易ニ影響ス

四國九州ノ地勢

東國ノ地勢

王化ノ此ニ及フコト遅々タリキ。是ヲ以テ所謂武士ハ關東ヨリ起リテ、遂ニ  
京都ノ文政ヲ傾ケタリ。夫ノ平氏ノ如キ、初メハ東國ニ起リシカドモ、後ニ京師  
ニ據ルニ及ビテ、忽源氏ノ爲ニ斃サレタリキ。賴朝ノ鎌倉ヲ本據トシタルハ、蓋  
勢ヲ東國ニ失ハザランガ爲ナリ。北條氏モ亦鎌倉ニ居リ、京都ニ六波羅ヲ置  
キテ、中國及西國ノ鎮護ト爲シ、以テ其ノ權力ヲ保持スルコトヲ得タリ。足利氏  
モ亦之ニ倣ヘリ。徳川氏ニ至リ、更ニ江戸ヲ以テ本據トシ、關西ニ駿府ヲ置キ、  
又巧ニ親藩ノ制ヲ定メ、以テ三百年ノ治平ヲ致スコトヲ得タリ。知ル可シ、我が  
國地形ノ歴史ニ影響シタル所亦輕少ニアラザリシヲ、

(八四)

## 第八章 成務天皇及地方制度

成務天皇

國郡ニ造長  
ヲ立テ縣邑  
ニ稻置ヲ置  
キ給フ

○節一 地方制度ヲ定ム 成務天皇ハ景行天皇第四ノ皇子ナリ。景行天皇  
ノ時西熊襲ヲ伐チ、東蝦夷ヲ征シ給ヒテヨリ、天皇ノ命ヲ承クベキ土地人民大  
ニ増加シタリ。是ヲ以テ成務天皇ニ至リ、此ノ土地人民ヲ統治スル制度ヲ定メ  
給フニ汲々タリキ。四年紀元七百九十四年天皇詔シ給ハク、我が先皇大足彦、天皇聰明  
神武、靈ニ騰リ圖ヲ受ケ、天ヲ治メ人ニ順ヒ、賊ヲ撥ヒ正ニ反シ、德覆森ニ伴シク  
道造化ニ協ヒ給ヘリ。是ヲ以テ普天率土王臣タラザルハナク、稟氣懷靈各其ノ  
處ヲ得タリ。今朕寶祚ヲ嗣踐シ、夙夜兢惕ス、然レドモ黎元森爾トシテ野心ヲ悛  
メズ、是國郡ニ君長ナク、縣邑ニ首渠ナクレバナリ。自今以後國郡ニ長ヲ立テ、縣  
邑ニ首ヲ置キ、即當國ノ幹了ナル者ヲ取リテ其ノ國郡ノ首長ニ任ツ、是ヲ以テ  
中區ノ蕃屏トシ日本ト。

五年九月、諸國ニ令シテ國郡ニ造長ヲ立テ、縣邑ニ稻置ヲ置キ、並ニ楯矛ヲ賜ヒ  
テ以テ表ト爲シ給フ。山河ヲ隔テ、國縣ヲ分チ、阡陌ニ隨ヒテ邑里ヲ定メ、因リ

日横  
山陰  
面背

(八六)

テ東西ヲ以テ日縦ト爲シ、南北ヲ以テ日横ト爲シ、山陽ヲ影面ト曰ヒ、山陰ヲ背  
面ト曰フ。是ヲ以テ百姓居ニ安ンシ、天下事無カリキ。日本  
古事記ニハ、故建内宿禰ヲ大臣ト爲シ、大國小國ノ國造ヲ定メ賜ヒ、國々ノ境及  
大縣小縣ノ縣主ヲ定メ賜ヒキト見エタリ。此ノ時ニ於ケル地方官職ノ編制  
ハ如何ナリシカヲ知ルコト頗難クレドモ、要スルニ後世ノ如ク一統セル職制  
アリシニ非ズ、其ノ大縣ハ左ニ述ブル所ノ如クナリシナルベシ。  
皇子皇孫ノ特ニ智勇アル者ヲ選ミテ地方ニ遣シ、數國ヲ鎮撫セシメタマヘル  
モノ之ヲ別(或ハ和氣ト書ス)ト云フ。然レドモ國中至ル所別ノ管轄タリシニ  
非ズ、唯要地ニノミ之ヲ置カレタルモノナルベシ。且此ノ職ヲ置カレシハ專皇  
室ノ威勢ヲ地方ニ輝シ給フヲ以テ目的トシ、平時ノ政務ハ之ヲ國造縣主ニ委  
任セラレタリシモノ、如シ。  
別皇子ノ在ス所ニテハ其ノ下ニ立チ、別皇子ノ在サス所ニテハ獨立シテ土地  
人民ヲ支配シタル者ヲ國造及縣主トス。其ノ國ト云ヒ縣ト云フモ唯大小ノ差  
アルノミ、等級ノ別アリシニ非ス。故ニ又之ヲ總稱シテ國ト云ヘリ。古ノ縣ニシ

地方政務ノ  
國造

村邑

テ後ニ郡トナリタルモノ多キニヨリ、或ハ國ノ内ニ縣アリシガ如クニモ思ハ  
ルベクレド、其ノ實ハ然ラザリシヲ神武天皇ノ功臣ヲ或ハ國造ニ封フ、或ハ縣  
主ニ封フ給ヒシニテ知ルベク、又古事記ニ、大國小國ノ國造大縣小縣ノ縣主ト  
續ケ云ヘルニテモ知ルベシ。上文ノ詔ニ、國郡ニ造長ヲ立テトノリタマヘル郡  
ハ、後ヨリ指シタル詞ニシテ、即縣ヲ云フナリ。而シテ縣主ヲモ國造ト云フ中ニ  
合メタルモノ、ナリ。次ニ國及縣ノ内ヲ更ニ分チテ村邑トシ、稻置ヲシテ之ヲ主  
宰セシメラレタリ。上文ノ詔ニ、村邑ニ稻置ヲ置キトアル是ナリ。稻置ハ國造  
縣主ノ下級ニ立チテ、其ノ命ヲ奉シタルガ如クナレドモ、其ノ關係ハ今ニ於テ  
明確ニ知リ得ベカラス。

○二別皇子 日本書紀景行天皇ノ條ニ、七十餘子皆國郡ニ封セラレ、各其  
ノ國ニ如ク。故ニ當今諸國ノ別ト謂フ者ハ即其ノ別王ノ苗裔ナリト見エ、古事  
記ニ、七十七王ハ悉國々ノ國造亦和氣及稻置縣主ニ別ク賜ヒキト見エタリ。  
和氣ト云フ稱ハ是ヨリ以前古事記境岡宮ノ段ニ、血沼別、多遲麻竹、別アリ、伊邪  
河宮ノ段ニ、葛野之別、近淡海蚊野、別若狹耳、別三川穗別ナド見エタレド、其ハ未

別國造縣  
主ノ上ニア

一國ト云フガ如キ廣大ナル土地ヲ治ムル職名ニハ非ザリシナリ。而シテ  
行ノ御世ニハ皆一國トモ云フベキ州縣ヲ皇子等ニ授ク給ヘルヲ以テ其ノ權  
勢ハ國造縣主ノ上ニ出テ自餘ノ地方諸官ヲ總管シタルモノ、如シ今其ノ一  
二例ヲ書ハ、水沼ニハ水沼縣主アリシカド、國乳皇子ハ水沼別トナリテ尙廣  
ク其ノ上ヲ管轄シ、火國ニハ火國造アリシカド、豐戸別、皇子ハ火國別トナリテ  
尙廣ク其ノ上ヲ統治セラレタル類ナリ。其ノ後孝德天皇大化二年正月改新  
ノ詔ニ、昔在天皇立テ給ヘル子代ノ民處々ノ屯倉及ヒ別臣連伴造村首ノ所有  
ノ部曲ノ民ヲ罷ムトノリ給ヘルニテモ別國造ノ上ニ在リシコトヲ知ルヘ  
シ。

上古ノ國

○三國造 國造ハクニノミヤツコト訓ム。國トハ古事記ニ大國小國ト云  
ヘルガ如ク廣大ナル區域ニシテ、後ニ一國ト立テラレシモノモアリ。又タ一郡  
一鄉ベカリノ狹小ナル區域モ有リシナリ。大和地方ニテ言ハバ吉野ヲモ吉野  
國ト云ヒ、泊瀨ヲモ泊瀨國ト云ヒタリ。サレバ國造ヲ封シタル國々ニモ大小  
アリテ、其ノ大ナルハ筑紫國造、紀伊國造、科野國造、高志國造ノ如キ、皆後ノ一國

國造ノ名義

國造二三種  
アリ

ニモ當ルベク、其小ナルハ葛城國造、國難國造等イツレモ大和國內ノ一地ニ過  
ギザリキ。又東國ニハ須惠國造上郡、馬來田國造同郡、上海國造同郡、伊基國  
造同郡、武社國造同郡、菊麻國造同郡等アリキ。是皆上總國ノ一地方ナリシナリ。  
又筑波國造常陸郡、茨城國造同郡、新治國造同郡、久自國造同郡、高國造同郡、仲國  
造同郡等アリキ。是亦常陸國ノ一地方ナリシナリ。カク大小ノ差別アリシヲ、古  
事記ニハ總シテ大國小國ノ國造ト云ヘルナルヘシ。「ミヤツコ」ノ名義ハ「ミ」ハ  
御ナリ、ヤツコハ家之子ナリ。天皇ヨリ臣下ヲ親ミテ宣フ稱ナリ。故ニ臣ノ字ヲ  
充ツレドモ、臣ニハ別ニ「オミ」ト云フ訓アリテ、特ニ宮廷ニ奉職スル者ヲ指シ、廣  
ク諸人ニハ及ハズ、ヤツコハ廣ク一般ノ臣民ニ亘ル稱意アルナリ。  
古ハ天皇ニ對シ奉リテハ、上ハ大臣ヨリ下ハ諸人ニ至ルマテ皆「ヤツコ」ナリシ  
ナリ。サレバ國造ハ國ヲ宰ムル御臣ノ謂ナリ。サテ國造トシテ地方ヲ治メシム  
ルニハ如何ナル人物ヲ用井ラレシカト云フニ、三種アリシガ如シ。曰ハク功臣、  
曰ハク土着ノ酋長、曰ハク皇子是ナリ。神武天皇登極ノ初、椎根津彥命ヲ大倭  
國造ニ、劍根命ヲ葛城國造ニ、彥己曾保理命ヲ凡河內國造ニ、阿多根命ヲ山代國



國ヲ制キテ  
下ニ賜ヘ  
ル始

造ニ天日別命ヲ伊勢國造ニ爲シタマヘルハ功臣ヲ封セラレタルナリ。又美志印命ヲ遠江ノ素賀國造ニ天道根命ヲ紀伊國造ニ宇佐都彦命ヲ宇佐國造ニ弟猪ヲ猛田縣主ニ弟磯城ヲ磯城縣主ニ建彌己命ヲ島津縣主ニ爲シタマヘルハ舊國ノ主ヲ其ノマヽニ封セラレタルナリ。此ノ朝廷ニ於テ國ヲ制キテ臣下ニ賜ヘル事ノ始メナル。

神武天皇ノ御代ニ置キ給ヘル國造凡九國開化天皇ノ御代ニハ一國崇神天皇ノ御代ニハ十一國景行天皇ノ御代ニハ七國合セラ二十八國ナリシヲ成務天皇ノ御代ニ更ニ六十三國ヲ建テサセ給ヒキ其ノ國々ハ左ノ如シ。

- 伊賀國造
- 參河國造
- 蘆原國造原河原郡
- 无邪志國造武藏郡
- 上海國造同海郡
- 菊麻國造同市原郡
- 島津國造志摩郡
- 遠淡海國造遠江郡
- 相武國造相模郡
- 須惠國造上總郡
- 伊甚國造同齊郡
- 阿波國造同安郡
- 尾張國造
- 珠流河國造同駿河郡
- 師長國造同餘長郡
- 馬來田國造同長郡
- 武社國造同武郡
- 新治國造同常陸郡

- 仲國造同河郡
- 近淡海國造近江郡
- 斐陀國造飛騨郡
- 伊具國造具志郡
- 信夫國造同信郡
- 石城國造同城郡
- 三國國造同坂井郡
- 伊彌頭國造同水郡
- 但遲麻國造同但郡
- 伯岐國造同伯耆郡
- 吉備品治國造同備後郡
- 熊野國造同熊野郡
- 末羅國造同前郡
- 天草國造同肥後郡
- 高國造同多郡
- 三野後國造同美濃郡
- 思國造
- 浮田國造同多郡
- 石背國造同代郡
- 能登國造
- 丹波國造
- 稻葉國造同因郡
- 針間鴨國造同賀茂郡
- 大島國造同周郡
- 比多國造同高郡
- 葛津國造同前郡

之ヲ前代ニ置カレシ二十八國ニ通計スレハ九十一箇國ナリ是ニテ大八洲ノ

國內王化ノ  
及ハメ所ナ

別國ト縣トノ

普通ノ縣ト  
御縣トノ別

國內ニ王化ノ及ハメ所無カリシヲ知ルベシ。此ノ後ニ至リ仲哀天皇ノ御代ニ二國應仁天皇ノ御代ニ二十一國仁德天皇ノ御代ニ七國反正天皇允恭天皇ノ兩御代ニ各一國雄略天皇ノ御代ニ三國繼體天皇ノ御世ニ一國其ノ外ニ建置ノ時代詳ナラザル者八箇國アリ、カク繼々ニ増シ世カレタレバ總計一百二十五國トナリタリ。是皆景行天皇ノ經綸ヲ御代御代ノ天皇ノ繼キ施シ給ヒシ結果ナリ。國遺本紀考等

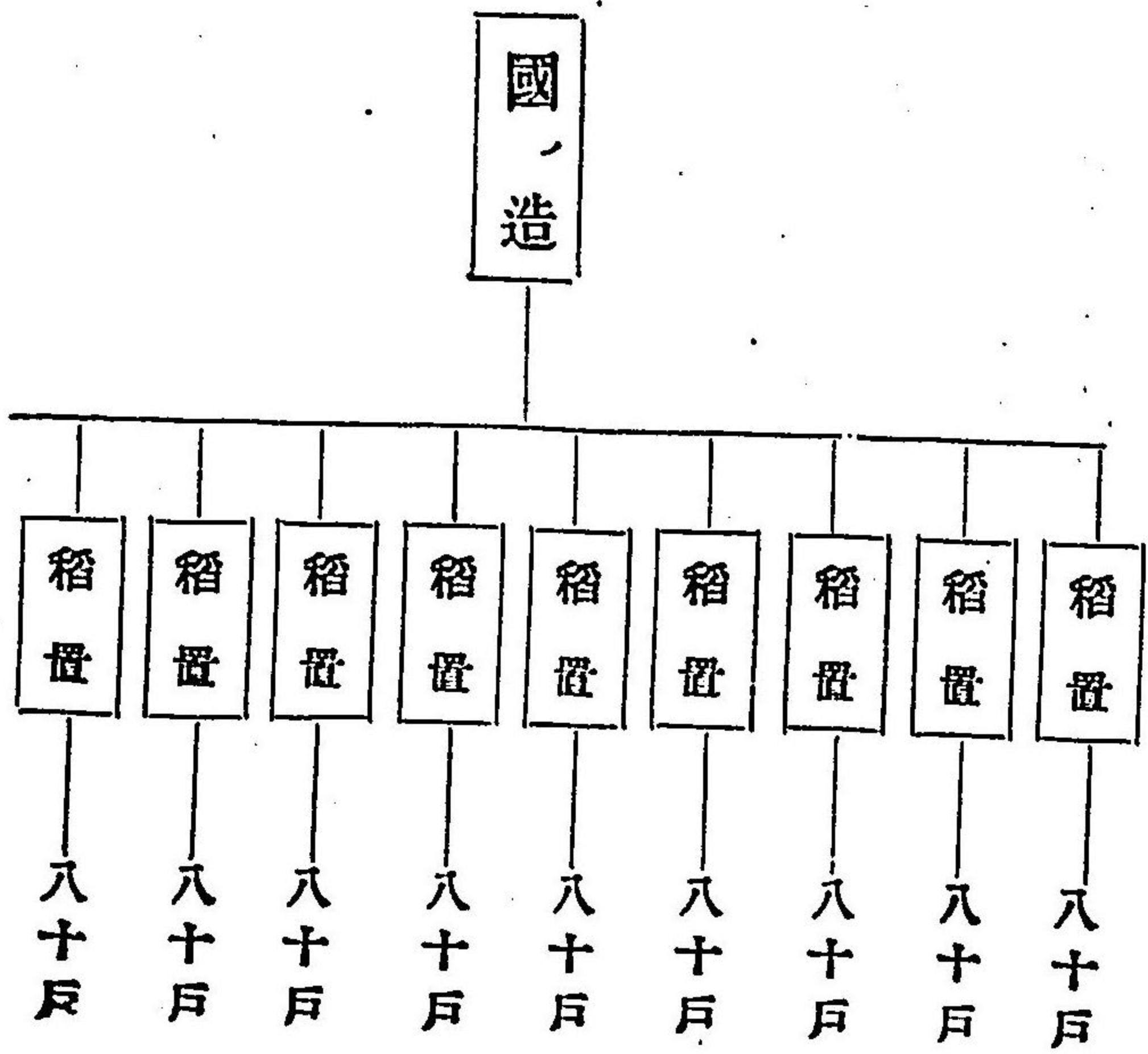
○四縣主 次ニ縣主トイヘル官職アリ。縣トハ上古ノ制ニ一國ノ内ニテ其ノ土地ノ形勢ニ從ヒテ、人民ノ部落ヲナシ、田島ヲ墾キ、家屋ヲ立テタル場所ヲ云ヒテ、後世ニ郡ト云ヘル程ノ地ナリ。マゾ國ト縣トノ差別ヲ言ハバ、國ハ山

嶽河海ヲ總括シタル稱ニシテ廣ク、縣ハ人民田宅ノ在リシ所ヲ云ヘル名ニシテ狹カリキト知ルベシ。一説ニ、アガタハ在方ナリ。村ヲ古ク「アレト」云フ。在處ノ義ナリ。今ハ昔ニテ在ト云ヘリト。縣主ハ大和國內ニ在ル縣ヲ始メトシテ國々ニ在ル縣ヲ治ムル者ノ稱ナリ。然レドモ普通各地ニ在リシ縣ハ、之ヲ御縣ト區別スルコト緊要ナリ。古御縣ト唱ヘシ朝廷ノ御料アリキ。是供御ノ料ノ物ヲ

作リテ奉ル御莊國ナレバ、京畿ノ内ニ定メラレテ、大和國內ニ高市、葛城、十市、志貴山、邊曾布ト凡ベテ六ヶ所ノ御縣アリタリ。此ノ御縣ニモ田島及人民ノ居處等ノ有リシコトハ、孝德紀ニ、倭國六縣ニ使ヲ遣シ、宜シク戶籍ヲ造リ、并ニ田畝ヲ校スベシトアルニテ知ラレタリ。御縣ヲ定メラレシ始メハ、歴史ニ見エザレドモ、古クヨリ有リシモノナリ。而シテ成務天皇ノ時ニ其ノ主ヲ置カレタル縣ハ、自此等ト別ニシテ、各國ニテ古來某ノ縣ト稱シ來レル地ヲ云フナリ。而シテ其ノ縣主ノ司リシ所ノ事ハ、國造ニ異ナリキトモ見エズ。ソハ葛城縣主ヲ日本書紀神武天皇ノ段ニハ葛城國造ト書クルニテ知ラレタリ。

○五稻置 稻置ノ國縣ノ内ニ在リシコトハ、北史ノ倭國傳ニ、軍尼一百二十人アリ。猶中國ノ牧宰ノゴトシ。八十戶ニ一伊尼翼ヲ置ク。今ノ里長ノ如シ。十伊尼翼一軍ニ屬ス。トアリテ、軍尼ハ「クニ」ト訓ム。即國造ナリ。伊尼翼ハ「イニキ」ト讀ム。即稻置ナリ。漢土ノ書ニ依リテ、當時我が國官制ノ一斑ヲ知り得ラル、モ亦奇ナリト謂フベシ。此ノ條ハ松下見林ノ著セル異稱日本傳ニ之ヲ引キ、蒲生君平ノ職官志ニモ載セタレバ、人ノ善ク知レル所ナリ。今試ニ其ノ書ニ據リテ

圖ヲ作ルトキハ左ノ如シ。



稻置 八十戸

稻置ノ名義

斯ノ如ク判然制定セラレタルニハ非ザルベケレドモ、其ノ大槩ハ推シテ知ラ  
 ル、ナリ。而シテ此ノ御世ヨリ以前ニモ、蒲生、稻置、伊賀、稻置、那婆理、稻置、三野、稻  
 置ナドノ名ハ古事記ニ見エタリ。「稻置」ノ名義ニ關シテハ一定ノ説ナシ。又其  
 ノ職務モ詳ナラズ。案ズルニ村邑ノ長ニシテ、其ノ職ヲ世ニシタルモノナラン  
 カ。一説ニ、太古國用ノ重キモノハ稻米ナレハ、諸國ニ産出セル稻米ヲ各地ニ納  
 メ置キテ國用ヲ辨ゼシメ、村長ヲシテ之ヲ掌司セシメキ。即稻置ノ名アル所以  
 ナリ。註序ト云フ。

第九章 神功皇后及三韓征服

仲哀天皇

○節一 仲哀天皇

成務天皇在位六十年ニシテ崩シ給ヒ、嗣子マサズ、因リテ

神功皇后

日本武尊ノ御子ヲ立テ給フ。仲哀天皇是ナリ。是ヨリ先歷代皇父子相繼ギ給ヒシガ、此ニ至リテ姪ヲ以テ叔父ノ後ヲ承ケ給フ例起レリ。二年元八百氣長足姫尊ヲ立テ、皇后トシ給ヘリ。神功皇后ト證シ奉レル即是ナリ。皇后ハ開化天皇ノ曾孫氣長宿禰王ノ御女ナリ。御母ハ新羅ノ王子ニテ我ニ歸化シタリシ天日槍ノ子孫多遲摩比多訶ノ女ニマス。故ニ善ク外國ノ事情ニ通ツタマヒシガ如シ。是ヨリ先、天皇叔父ノ女大中姫ヲ娶リテ妃トシ、鹿城皇子及忍熊皇子ヲ生ミ給フ。然レドモ更ニ氣長足姫尊ヲ立テ、皇后トシタマヘルハ、其ノ武勇ニマシ、ニ因レルナラム。

熊襲三々反ス  
天皇親征

天皇角鹿越前教實管飯宮ニ幸シ、紀伊ヲ巡リ給フ。時ニ熊襲復反シ、西國不穩ナリシカバ之ヲ親征セント思ホシテ、穴門長門豊浦津ニ至リマス。皇后角鹿ヨリ往キテ會シ給ヘリ。八年、遂ニ筑紫、熊襲ニ至リ。櫛日香宮ニ坐シ、軍議ヲ爲シ給フ。皇后熊

皇后神託ヲ  
メシ給フ

襲ヲ援クル者ノ海外ニ在ルヲ知り、天皇ニ白シ給ハク、神アリ我ニ託シ誨ヘテ曰ハク、天皇何ゾ熊襲ノ服セザルヲ憂ヘン。是等ノ空國ゾ、豈兵ヲ舉ゲテ伐ツニ足ランヤ。此ノ國ニ愈リテ寶ノ國アリ、譬ヘバ美女ノ珠ノ如キ向津國ナリ。對岸國ハ美女ノ珠ノ如キナムト云フ。眼炎、金銀彩色、多ク其ノ國ニ在リ。是ヲ栲衾新羅ノ國ト謂フ。若能ク吾ヲ祭ラバ、則曾テ乃ニ血ヌラズシテ其ノ國必服シ、熊襲モ亦自服セント。天皇乃高岳ニ登リ遙ニ大海ヲ望ミ給ヘドモ國ヲ見ズ。因リテ神言ヲ疑ヒ給フ。九年二月、天皇忽痛身アリテ、明日軍中ニ崩シ給ヘリ。皇后、大臣及中臣烏賊津連、大三輪大友主、君物部勝昨連、大伴武以連ニ詔シ給ハク、今天下未天皇ノ崩ヲ知ラズ、百姓之ヲ知ラバ、懈怠アラソカト。乃四大夫ニ命ヲテ百寮ヲ領シテ宮中ヲ守ラシメ、竊ニ天皇ノ屍ヲ收メテ武内宿禰ニ付シ、海路ヨリ穴門ニ遷リ、豊浦宮ニ殯ヒシメ給フ。

天皇軍中ニ  
崩シ給フ

○節二 三韓ノ遠征

皇后天皇ノ神託ニ從ハズシテ早ク崩シ給ヒシヲ傷ミ、更ニ齋宮ヲ小山田邑ニ造リ、親神主ト爲リ、武内宿禰ニ命ツテ琴ヲ撫セシメ、中臣烏賊津使主ヲ喚シテ審神者ト爲シ、以テ諸神ヲ祭り給フ。乃新羅ヲ伐タント

皇后神ヲ祭  
リ新羅ヲ伐  
チ給フ

欲シ、四月、火前國前松浦縣ニ至リ、河側ニ食シ給フトキ、針ヲ勾ゲテ釣ト爲シ、粒ヲ取リテ餌ト爲シ、裝糸ヲ抽キ取リテ網ト爲シ、之ヲ河ニ投シ、所リテ宜ハク、朕西ノカタ財國ヲ求メント欲ス。若事成ルコト有ラバ、河魚釣ヲ飲メト。竿ヲ擧グルニ細鱗魚ヲ得給ヘリ。乃神教ノ驗アルヲ識リ、西征ノ志ヲ決シ給フ。皇后還リテ檀日ノ浦ニ至リ、髮ヲ解キ海ニ望ミテ宣ハク、吾神祇ノ教ヲ被リ、皇祖ノ靈ニ頼リ、滄海ヲ浮涉シ、躬西征セント欲ス。是ヲ以テ今頭ヲ海水ニ濯グ。若驗アラバ、髮オノヅカラ分レテ兩ト爲レト。即海ニ入リテ之ヲ洗ヒ給ヒシニ、髮自分レヌ。皇后便分髮ヲ結ヒテ髻ト爲シ、因リテ群臣ニ詔シ給ハク、夫師ヲ興シ衆ヲ動カスハ國ノ大事ナリ。安危成敗必斯ニ在リ。今征伐スル所アルニ、事ヲ以テ群臣ニ付スルトキハ、若事成ラザルトキハ、罪群臣ニ在ラン。是甚傷マシ。吾婦女ニシテ、マタ不肖ナリ。然レドモ暫男貌ヲ假リテ、強ヒテ雄略ヲ起シ、上ハ神祇ノ靈ヲ蒙リ、下ハ群臣ノ助ニ藉リテ、兵甲ヲ振ヒ、峻瀕ヲ度リ、艦船ヲ整ヘ、以テ財土ヲ求メントニ、若事就ラバ、群臣共ニ功アリ。事就ラザルトキハ、吾獨罪アラン。既ニ此ノ意アリ。ソレ共ニ之ヲ議セト。群臣皆曰ハク、皇后天下ノ爲ニ宗廟社稷ヲ安ソ

皇后ノ軍令

スル所以ヲ計リ、且罪ヲ臣下ニ及ボサザラントシ給フト、頓首シテ詔ヲ奉ズ。九月、諸國ニ令シ船舶ヲ集メ、兵甲ヲ練ル。時ニ軍卒集メ難カリキ。皇后宜ハク、必神ノ御心ナラント。乃大三輪社ヲ立テ、刀矛ヲ奉リ給フニ、軍衆自聚リヌ。是ニ於テ、吾父ノ海人烏摩呂ヲシテ西海ニ出テ國ノ有無ヲ察セシメ給フ。還リテ曰ハク、國見エザルナリト。又磯鹿ノ海人名草ヲ遣リテ視シメ給フ。日ヲ經テ還リテ曰ハク、西北ニ山アリ、帶雲横ニ組ル。蓋國アルカト。乃吉日ヲトシテ發セントシ給フ。皇后親斧鉞ヲ執リ、三軍ニ令シ給ハク、金鼓節ナク、旌旗錯亂セバ、則士卒整ハズ。財ヲ食リテ欲多ク、私ヲ懷ヒ内ヲ顧ミバ、必敵ノ虜ト爲ラン。ソレ敵少ナルモ輕ンズルコト勿レ。敵強ナルモ屈スルコト勿レ。則奸暴ハ聽スコト勿ク、自服ハ殺スコト勿レ。戰勝タバ必賞アラン。背キ走ラバ自罪アラント。既ニシテ神降有リ。曰ハク、和魂玉身ニ服ヒテ壽命ヲ守リ、荒魂先鋒ト爲リテ師船ヲ導カント。因リテ依網吾彥男垂見ヲ以テ祭ノ神主トナシ、之ヲ拜禮シ給フ。時ニ適、皇后ノ開胎ニ當レリ。則石ヲ取リテ腰ニ挿ミ、祈リ給ハク、事竟ヘテ還ラン日、茲ノ土ニ産マント。其ノ石後世マテ伊都縣ノ邊ニアリキ。乃荒魂ヲ搦キテ軍ノ先鋒ト

シ、和魂ヲ請ヒテ王船ノ鎮トシ、十月、和珥津ヨリ發シ給ヘリ。時ニ風神ハ風ヲ起シ、海神ハ浪ヲ擧ケ、海中ノ大魚悉浮ヒテ船ヲ挾ミ、大風順ニ吹キテ、帆船波ニ隨ヒ、楫ヲ勞セズシテ新羅ニ到レルニ、隨船ノ潮浪漲リ溢レテ遠ク國中ニ遠ビヌ。即知ル、天神地祇ノ悉助ケ給ヘルヲ、新羅王大ニ懼レ、狼狽シテ身ヲ措ク所ナシ。諸人ヲ集メテ曰ハク、新羅建國以來未曾テ海水ノ國ヲ凌グヲ聞カズ。若天運盡キ、國海トナルカト、是ノ言未訖ハラザルニ、船師海ニ滿チ、旌旗日ニ耀キ、鼓吹聲ヲ起シ、山川悉振フ。新羅王遙ニ望ミ以爲ヘラク、非常ノ兵將ニ己ガ國ヲ滅ボサントスト。響レテ失神ス。少焉アリテ醒メテ曰ハク、吾聞ク東ニ神國アリ、日本ト謂フ。又聖王アリ、天皇ト謂フ。必其ノ國ノ神兵ナラン。豈力ヲ以テ拒ムベケンヤト。乃索旆テ自服シ、索組ヲ以テ面縛シ、圖籍ヲ封シ、王船ノ前ニ降り、叩頭シテ曰ハク、今ヨリ以後、乾坤ト與ニ長ク伏シテ飼部トナリ、船柁ヲ乾サズシテ春秋ニ馬梳及馬鞭ヲ献ゼン。復海ノ遠キヲ煩ハズ、以テ年毎ニ男女ノ調ヲ貢セシト。重テ誓ヒテ曰ハク、日西ヨリ出テ、阿利那禮河逆ニ流レ、河石昇リテ星辰トナルニ及ブマテ、春秋ノ朝ヲ闕キ梳鞭ノ貢ヲ廢メバ、天神地祇共ニ討タント。時ニ

新羅王降ル

八十艘ノ調  
貢ヲ何トス

高麗百濟降  
ルヲ何トス

新羅王ヲ殺サント曰フモノアリ。皇后宣ハク、初メ發スルニ臨ミ、三軍ニ號令シテ自服ヲ殺スコト勿レト言ヘリ。彼既ニ自服ス、之ヲ殺スハ不祥ナリト。乃其ノ縛ヲ解キテ飼部ト爲シ、遂ニ國中ニ入りテ、重寶府庫ヲ封シ、圖籍文書ヲ收メ給ヘリ。時ニ皇后杖キ給ヘルヲ以テ新羅ノ王門ニ樹テ、後葉ノ印ト爲シ給フ。新羅王波沙寐錦微叱己知波珍干岐ヲ以テ質トシ、金銀彩色及綾羅縵絹ヲ贈シ、八十艘ノ船ニ載セテ官軍ニ從ハシム。是ヨリ後新羅常ニ八十艘ノ調ヲ以テ我ニ貢スルヲ例トシタリキ。高麗百濟二國ノ王、新羅ノ圖籍ヲ收メテ日本國ニ降ルヲ聞キ、密ニ其ノ軍勢ヲ伺ハシム。則勝ツベカラザルヲ知り、自營外ニ來リ叩頭シテ曰ハク、今ヨリ以來、永ク西蕃ト稱シ、朝貢ヲ絶タマフト。因リテ内官家ヲ定メ給フ。是所謂三韓ナリ。皇后新羅ヨリ還リ、十二月、皇子魯田別尊ヲ筑紫ニ生ミ給ヘリ。

○三 麿坂王、忍熊王謀反。皇后群卿百寮ヲ領井テ穴門、豐浦宮ニ移リ、天

皇ノ喪ヲ收メ、海路ヨリ京ニ向ヒ給ハントス。時ニ麿坂王、忍熊王密ニ謀リテ曰ハク、今皇后皇子アリ、群臣皆從フ、必共ニ讒シテ幼主ヲ立テ、吾等何ゾ兄ヲ以

テ弟ニ從ハシヤト乃山陵ノ石ヲ運ブト稱シ兵ヲ淡路ニ匿シテ皇后ヲ待ツ而シテ倉見別五十狹茅宿禰モ亦鹿坂王ニ從ヒ相議シテ兵ヲ住吉ニ屯ス。皇后乃武内宿禰ニ命シ太子ヲ奉リ轉リテ南海ヨリ紀伊ニ至ラシメ而シテ皇后ハ直ニ難波ニ向ヒ給フ是ヨリ先鹿坂王菟野ニ狩シ赤猪ニ噛マレテ死シ忍熊王獨軍ヲ督ス。是ニ於テ退キテ菟道ニ軍ス皇后皇太子ト紀伊ニ會シ武内宿禰ト武振熊和理臣トニ命シテ忍熊王ヲ擊タシメ給フ。武内宿禰精兵ヲ帥井進ミテ菟道河ノ北ニ屯ス忍熊王遂ヘテ戰ハントス武内宿禰衆ヲシテ弦ヲ督中ニ藏シ各木刀ヲ佩カシメ乃皇后ノ命ト稱シ誘ヒテ曰ハク吾敢テ天下ヲ食ルニ非ズ唯幼主ヲ懷キテ君王ニ從フ者ナリ豈拒戰セシヤ共ニ弦ヲ斷チ兵ヲ捨テ、與ニ連和シ而シテ後君王天位ニ登リ給ヘト乃顯ニ軍中ニ令シテ悉弦ヲ斷チ刀ヲ解キテ之ヲ水中ニ投ゼシム忍熊王之ヲ信シ亦軍衆ニ令シテ弦ヲ斷チ刀ヲ投ゼシム武内宿禰急ニ儲フル所ノ弦ヲ張り、其刀ヲ佩カシメ河ヲ渡リテ進ム。忍熊王兵ヲ引キテ退ク武内宿禰之ヲ追ヒ、逢坂ニ至リテ之ヲ破ル。忍熊王瀬田ノ渡ニ投マテ死シ亂平キヌ。皇子譽田別尊立チ給フ之ヲ應神天皇

トス。天皇幼ク坐ケル故ヲ以テ皇后高機ヲ攝行シ給ヘリ。本邦攝政ノ制此ニ始マル。

○節外藩ノ制度

是ヨリ後四十餘年間新羅百濟ハ年々朝貢ヲ怠ラズ高麗モ亦從順ナリキ。皇后攝政ノ四十六年紀元九百零六年ニ至リ志摩宿禰ヲ卓淳ニ遣

リ百濟ヲ殺撫ヒシメ給フ翌年百濟及新羅ノ貢物ヲ檢スルニ新羅ノ貢物ハ珍異甚多ク百濟ノ貢物ハ少賤ニシテ其カラズ乃其ノ故ヲ問ヒ給フニ百濟ノ使久氏等對ヘテ曰ハク臣等道ヲ失ヒ沙比ニ至ル則新羅人臣等ヲ捕ヘテ圍圍ニ投マテ遂ニ殺サストス臣等因リテ天ニ向ヒテ咒詛シタルニ新羅人忍レテ敢テ殺サズ則我が貢物ヲ奪ヒテ己ガ國ノ貢物ト爲シ賤物ヲ以テ相易ヘテ臣ガ國ノ貢物ト爲シ臣等ニ謂ヒクテ若此ノ辭ヲ誤ラバ遠ラソ日ニ及ビテ汝等ヲ殺スベシト故ニ臣等恐レテ從ヘルノミト。四十九年荒田別鹿我別ヲ以テ將軍ト爲シ新羅ヲ伐タシメ給フ將軍久氏等ト共ニ兵ヲ勅シテ渡リ新羅ヲ擊テ之ヲ破リ比自煉南加羅國安羅多羅卓淳加羅ノ七國ヲ定ム爾後雄略天皇ノ朝ニ至ルマテ三韓半島復我ニ背クモノ無カリキ。

日本府

内官家

渡屯家

外藩鎮撫官

(104)

當時朝鮮地方ヲ外藩トシテ治メラレシ有様ヲ察スルニ、垂仁天皇ノ時ニ置カレシ日本府ハ尙勢力ヲ有シタリシ事實明白ナレバ、中間本國トノ交通ハ無カラシカドモ、三韓征服ノ後ハ自之ヲ總括スル機關トナリシコト疑フ可カラズ。又上ニ載セタル日本書紀ノ文ニ、内官家ヲ置クトアル官家ハ、御宅トモ屯倉トモ書キテ、天皇ノ御料地ノ官衙ヲ云フナリ。古ヨリ新地ヲ得ル毎ニ、其ノ幾分ヲ天皇ノ御料地トシテ屯倉ヲ置カル、例ナリシガ、今三國ヲ征服シ給ヘルニ因リ、此ニモ屯倉ヲ置キ、内國ノ屯倉ノ如クセラレタルヨリ、内官家トハ云ヒレナリ。古事記ニハ之ヲ渡屯家ト書ケリ、渡ハ海ニテ海外ノ義ナリ、イゾレモ皇國內ノ屯倉ニ準ズル義ナリ。

又此ノ屯倉ニ別ニ鎮撫ノ官トシテ、ミコトモチトイヘルヲ置カレタリト見ユ。其ハ日本書紀載スル所ノ一書ニ、一人ヲ留メテ新羅ノ宰ト爲シテ還ルトアリ。又姓氏錄眞野臣ノ條ニ、天足彦國押人命ノ裔孫大矢田宿禰、息長足姫尊、神ニ從ヒ新羅ヲ征伐ス、凱旋ノ日便留メテ鎮守將軍ト爲シタマフトアリ。案ズルニ是、新羅ノミニ止マラス、餘ノ二國ニモ必之ヲ置カレシナラン。又應神天皇ノ時

筑紫都督府起元

ニ至リ、武内宿禰ヲシテ筑紫ニ居ラシメ、以テ日本府及鎮撫官ニ遣應セシメラレタリ。是蓋筑紫都督府ノ起元ナリ。

韓土征服ノ後ハ、布帛、金銀器械ヨリ、文藝、智巧ニ至ルマテ多ク新物ヲ輸入シタルニ因リ、大ニ内國ノ文化ヲ刺激シ、爲ニ國民ノ形勢一變スルニ至レルハ、是第二期歴史ノ大觀ナリ。此ニ第一期ノ敘事ヲ了フ。



國民團結ノ  
中心

國民内部ノ  
團結益強固  
トナル

## 第二期 國民隆盛ノ代

### 第十章 社會ノ組織

○節一 前期復説 第一期ニ於ケル歴史ノ要點ハ、天孫ニ於テ祖神ノ正統ニ坐シ、故ヲ以テ、同種ノ他氏ヲ統一シ給ヒシニ因リ、祖神ノ祭祀ト族制トハ、國民團結ノ中心ノ勢力トナリ、又異ナル民種ニ屬スル島舛民族ト土脚蜘蛛夷トハ武力ヲ以テ之ヲ征服シ給ヒシニ因リ、兵事モ亦政權ノ重大ナル要素トナルニ在リ。然リ而シテ此ノ三ノモノニ依リ團結シタル國民ヲ外ヨリ襲ヒテ破ラントスルモノ崇神天皇以後ニ於テ頻ニ起レリ。乃西ハ熊襲ヲ伐テ、東ハ蝦夷ヲ征セラレタリ。是ニ至リテ地方制度ノ基本漸定マリヌ。又熊襲ノ患累世息マザルモノハ、其ノ根據海外ニ在ルヲ知リシカバ、終ニ我ヨリ起リテ三韓ヲ征服シタリ。社會學者ノ語ヲ以テ謂ハバ、是ノ時代ハ社會ノ存立競争ニ際セシナリ。此ノ競争ノ結果トシテ、國民内部ノ團結ハ益々強固ヲ致シ、既ニシテ十分發達セル國民ヲ爲スニ至リヌ。故ニ此ノ所ニ於テカク成リ出テタル國民ノ内部

民族ノ團結

大氏小氏

氏上

家部

(108)

ノ組織ヲ開示スルトキハ、是ヨリ後ノ變遷ヲ知ルニ甚便ナラン。

○二節 氏族

此ノ時代ニ於テ日本國民ノ内部ニ組織ノ基本ヲ爲シタルモノハ、實ニ氏族ノ團結ナリ。即全體ノ民ハ分レテ幾多ノ大氏トナリ、其ノ中ニモ天孫ノ氏ハ最尊ク、次ハ代々天皇ノ皇子ヨリ出テタル諸氏、又其ノ次ハ諸ノ天神地祇ヨリ出テタル諸氏ニシテ、皇族ニモ非ズ、又天神地祇ノ後ニモ非ザル者ハ獨立ノ資格ナク、以上諸氏ノ中ニ隸屬シタリ。又一ノ大氏ハ數多ノ小氏ヲ包含シ、一ノ小氏ハ數家ヲ以テ成リタリ。其ノ一家ト云ヘルハ、今日コソ家主ト其ノ妻子トアルニ止マレド、上古ニ於テハ、三世四世一戸ニ住居シテ、常ニ五六十テ一家ヲ統理シ、其ノ財産ヲ專有シ、長老タリトモ正嫡ニ非ザルトキハ家長トナラズ、唯家長ヲ補ケタリ、又小氏ニ小氏ノ氏上アリテ、其ノ包含スル所ノ諸家ヲ統督シ、大氏ニ大氏ノ氏上アリテ、之ニ屬スル諸ノ小氏ヲ總督シタリ。孰モ其ノ小氏又ハ大氏ト正嫡相繼ギテ氏上トナリシナリ。又家ニハ家族ノ外ニ私有ノ人民アリ。之ヲ家部ト云フ。而シテ大小ノ氏ニモ多少ノ人民ヲ私有シタ

部曲

支那ノ姓

リ、之ヲ部曲ト云フ。『古ハ生筋ノ義ナリト云フ。又生地ノ説アリ。之ニ姓ノ字ヲ充テ用ウルハ、古ニリ有ルコトナガラ、社會學上ノ理論ニ據ルトキハ日本ノウヂハ支那ニテ姓ト指スモノト全ク相同シカラズ。姓トハ、モト異ナル部屬ノ同一邦土ニ移轉シ來リテ、初メ相争鬪シ、後ニ團結シテ一箇ノ國民ヲ爲スニ至リ、舊來ノ異同ヲ表センガ爲ニ稱スル所ノ者ナリ。例ヘバ支那ノ如キハ大陸ノ國ナルニ因リ、崑崙ノ地ヨリ河流ニ沿ヒテ遷徙シ來リ、中原ニ殖民シタル者數部屬アリ。其ノ各部屬後ニ一姓ヲ爲ヒ、即提提氏、有巢氏、燧人氏、庖犧氏、神農氏、軒轅氏、蜀山氏、及庖犧氏ノ下ニ附クル飛龍氏、潛龍氏、降龍氏、水龍氏、火龍氏等ハ皆別部屬タリシナリ。而シテ黃帝出テ、大ニ外姓ヲ征服シ、玄孫帝堯ニ至リ、始メテ善ク諸姓ヲ和合シタリ。堯ニ克明俊德、以親九族、九族既親、平章百姓、百姓昭明、協和萬邦、黎民於變時雍ト云ヘル是ナリ。此ニ百姓ト云ヘルハ、今ノ如ク一般人民ヲ指スニ非ズ。一般人民ハ即黎民ニテ百姓ト云ヘルハ、百ノ姓族ナリ、百ハ其ノ多キヲ云フ、平章ハ諸姓ノ大小強弱ニ應シテ官職地位ヲ與ヘ、以テ其ノ權衡ヲ保タシメタルヲ云フ。此ノ如ク姓ハモト部落ノ異ナリシヲ示スモノ

同性相婚ヲ  
禁スル慣例

日本ノ姓氏

(110)

ナリ而シテ上古ハ他ノ部落ヨリ掠取シタル婦女ヲ妻トスル習慣アリシニ因  
リ、姓ノ存スル所ニアリテハ、必同姓相婚ヲ禁ズル慣例アリキ。支那、印度、羅馬、皆  
然リトス。二部制進化論第 然リト雖氏ハモト同一部落ノ異ナル人々ノ系統ニ外  
ナラザルカ故ニ、相婚ヲ禁ズルコト固ヨリ有ラズ。本書第三章ノ終ニ述ベシ  
ガ如ク、我が日本ノ民種ハ、雜合民種ニ非ズシテ本來單純ナリ。即一姓ニシテ數  
氏アルノミル。大日本史ノ序ニ、天下一姓ト書キタサレバ日本ノ歴史ニ於テ姓ノ  
字ヲ用ウルハ、是唯假用ニシテ、實ハ支那ノ姓ト全ク異ナルモノヲ指スナリ。

○節三 大氏、小氏及氏上 上文開説スルガ如ク、一ノ大氏數多ノ小氏ニ分

カレ、大氏ニ大氏ノ氏上アリ、小氏ニ小氏ノ氏上アリテ、遞次統括シタルコトハ  
第四期以前即上古ノ國家社會ノ形勢ヲ知ル爲ニ甚重要ノ事ナリトス。故ニ古  
來ノ學者ニシテ氏族ノ組織ヲ講究シタル者亦多シ。其ノ中文年間ノ著述ニ  
係ル姓序考細川直ト云フ書最精密ナリ左ニ其ノ一段ヲ抄出セシ。

大氏小氏ノ  
別

「氏ニ大氏小氏ノ別アリ、其テ云ヘバ、阿倍氏ハ大氏ナリ。是ヨリ別レタル阿倍、  
志斐、阿倍、間人、阿倍、長田、阿倍、陸奥、阿倍、安積、阿倍、信夫、安倍、柴田、阿倍、會津、阿倍、

大氏ハ本家  
小氏ハ分家

發島、阿倍、久努、阿倍、小殿、和、阿倍等ハ皆小氏ナリ。又物部氏ハ大氏ナリ。是ヨリ  
別レタル物部、肩野、物部、韓國、物部、飛鳥、物部、門、物部、多、物部、石上、物部、射、物部、  
部、淨志、物部、海、物部、鏡、物部、匠、物部、中原、贊、田、物部、相、槻、物部、坂、戶、物部、二、田、物、  
部等ハ皆小氏ナリ。小氏ハ大氏ニ從ヘル者ナリ。サレト小氏ニモ氏上ハ有ル  
ナリ。大氏衰ヘヌレバ、小氏ノ然ル可キ人ヲ以テ大氏ヲ繼グコトナリ。大同元  
年春正月壬午、左京人正七位上阿部、小殿朝臣眞直、從五位下阿部、小殿朝臣眞  
出等、姓ヲ阿部、朝臣ト賜フト見エシハ、阿部、小殿氏ヨリ、大氏ノ阿部ニナレル  
ナリ。又弘仁三年二月辛亥、左京ノ人阿部、長田朝臣節麿、從七位上阿部、長田朝  
臣高繼等八人、姓ヲ阿部、朝臣ト賜フトアルモ同例ナリ。俗言ニ云ヘバ、大氏ハ  
本家、小氏ハ分家ナリ。阿部ノ大氏ハ大同ノ頃ハ衰ヘタレド、氏人ニ家守、東人  
小笠、象主、弟當、宅麻呂、犬養、眞勝、益成、鷹野、兄雄等十餘人アルニ、眞直、高繼等ノ  
十人ヲ加ヘテ、ニテ外ノ氏人ハイト多カリシヲ思ヘ、是ニ準ヘテ、小氏ニ  
モ十、二十ノ氏人ハアリシナルヘシ。其ノ下ニ又部、曲ノ人アリ、是ニハ姓ハナ  
ク、唯阿部、某ト云ヘルノミナリ。其ノ趣ヲ云ハシニ部、曲ノ阿部、長田、某ト云フ

小氏ノ兵上  
大氏ノ兵上

氏ノ長者

(1111)  
人々ヲ皆阿部長田朝臣某ト云フ人氏上ナレバ管領リ。大氏ノ阿部朝臣某ト云フ人ノ大氏上ナルニハ阿部某ト云ヘル部曲ノ人々其ノ外小氏ノ阿部某ト云フ氏上ヨリシテ各部曲マテヲモ統領ルヲナリ少故ノ事ハ小氏ノ氏上大氏ノ氏上ト計リテ事ヲ糺シ治メ大故ノ事ニ非ザレハ朝廷ニ申スコトナシサルカラ上古ハ朝廷ハ閑寂ナリキ各國モ諸氏ノ人々頒領リ天皇ノ御料地ノ御田ヲモ作り男ハ弓弭女ハ手末ノ貢ヲ進セリ略サテ此ノ氏上ト云フモノゾ後ノ氏長者ナリケル氏長者ハ氏長者ト云フニマカナルヲ漢土ニ長者ト云フコトニナレハ上古ノ居處ヲ云ヒキコトナラシメ今ヨリ諸國ニ長者ト云フモノナリ此ノ如ク氏上ノ定マレルカラ各氏ノ系統亂ルコトナク氏人ノコトゴト小氏大氏ニ附貫セレバ大氏ノ氏上ニ詔アレバ氏人トモ皆承リ傳ヘテ其ノ事ヲ爲スユニ事通リヤスク紛ルコトナシ故ニ太古ハ爲スコト少クテ善ク事ノ整ヒシナリ。

○四節 世襲業務及氏名 上古氏族ノ組織ニ關シテ最顯著ナルモノハ各氏一定ノ職掌アリテ之ヲ世ニシ同一氏ニ屬スル諸家ハ皆同ヲ業務ニ從事シ

職名ヲ氏名トス

地名ヲ氏名トス

特別ノ由緒ニヨリテ氏名ヲ賜ハル

テ世更メス其ノ職名ヲ以テ氏名トヒシコト是ナリ。例ヘバ玉作氏ハ世玉ヲ作ルヲ業トシ爪工氏ハ世蓋ヲ作りテ貴人ノ坐ヲ筋ル事ヲ業トシ鏡作氏ハ世鏡ヲ作ル事ヲ業トシ石作氏ハ石棺ヲ作り土師ハ陶器ヲ作り兼テ野見宿禰ノ故事ニ因リ宮中ノ凶儀ヲ掌リ船氏ハ船賦ヲ掌リ書氏ハ書記ヲ掌リ譯語氏ハ通辨ヲ掌リ多米氏膳氏ハ朝廷食饌ノ事ヲ掌リ水取氏ハ水替ノ事ヲ掌リ服部氏ハ機械ノ事ヲ掌リ衣縫氏ハ裁縫ノ事ヲ掌リ車持氏ハ車乘ノ事ヲ掌リシ類枚舉ニ追アラス是皆其ノ氏族及部曲ヲ率非テ世襲ノ職業ニ從事ヒシモノナリ以上諸氏ハ大抵氏名ヲ其ノ職掌ニ取リシモノナリ。又世國造縣主トシテ一定ノ地方ヲ治ムルヲ以テ職トスル者アリキ此等ハ多ク其ノ地名ヲ以テ氏名トヒリ。例ヘバ胸形氏山雲氏高市氏蒲生氏血沼氏葛城氏難波氏下毛野氏ノ類ナリ或ハ又特別ノ由緒ニ因リ天皇ヨリ氏名ヲ賜ハリシモアリキ例ヘバ仁徳天皇ノ朝ニ高麗ヨリ鏡的ヲ貢シタルトキ武内宿禰ノ子盾人宿禰射テ之ヲ貢キタルヨリ的戸田宿禰ノ名ヲ賜ハリタリト云ヒ垂仁天皇ノ朝ニ皇子譽津別年三十歳ニシテ泣キ給フコト見ノ如ク常ニ首ヒ給ハサリシニ一口鶴ヲ

氏ニ附屬スル人民

觀テ始メテ言ヒ給ヒシカバ、天皇喜ビマシテ、天湯河板舉トイヘル者ニ其ノ鳥ヲ捕ヘヨト命シ給ヒシトキ、但馬國ニ至リ捕ヘテ奉リシ緣ニ因リ稱ヲ鳥取ト造ト賜ハリタリト傳ヘ、野見宿禰ハ土偶ヲ以テ殉死ニ易ヘタリシ功ニ因リ、土部臣ノ稱ヲ賜ヒ、子孫世、其ノ功ヲ以テ朝廷ニ事ヘタリト見エタル類勝ケテ數フ可カラス。

(二四)

○五部曲

上文開示スルガ如ク、各氏ニハ其ノ氏人タル男女ノ外ニ、血統ノ連絡ハナカリシカドモ、他ノ緣故ニ因リ其ノ氏ニ附屬スル人民アリテ、之ヲ部曲ト書キ、トモベ、又ハムレト訓メリ。天、太玉命ヨリ出テタル齊部氏ハ、諸國ニ部曲ヲ派シテ供饌ノ料ヲ産殖セシメシコト前ニ述ベタリ、即此等ノ部曲ヲ某國ノ忌部ト云フ。綏靖天皇尙皇子ニ坐シシトキ手研耳命ヲ伐チ給ヒシ段ニ、弓部、稚彥ヲシテ弓ヲ作ラシメ、倭、鍛部天津眞浦ヲシテ眞鷹ノ鏃ヲ作ラシメ、矢部ヲシテ矢ヲ作ラシムトアルハ、稚彥ハ弓部ヲ領スル氏族ノ氏、上ニシテ天津眞浦ハ倭、鍛部ヲ領スル氏族ノ氏、上ナリ、而シテ其部ト云フハ、是皆部曲ナリ。野見宿禰出雲ノ土師部一百人ヲ喚上シ人馬ヲ造作セシ段ニ、天皇厚ク野見宿

禰ノ功ヲ賞シ、亦鍛田ヲ賜ヒ、即土部ノ職ニ任シ、因リテ本姓ヲ改メテ土部臣ト稱フ。是土部、連等ガ天皇喪葬ノ事ヲ主ル緣ナリトアリ、出雲ヨリ喚上シタル一百人ノ土師ノ子孫ハ、世、土部氏ノ部曲ト爲リシナリ。安閑天皇ノ紀何々天ハ、一段日本書紀中其ノ下ニ、物部大連尾與十市部伊勢國來狹々色登伊色ノ贊土師部筑紫國ノ勝狹山部ヲ以テ天皇ニ獻ゼシコトアリ、又第三期ニ屬スレド、皇極天皇ノ紀ニ、大臣蘇我、蝦夷ノ横行ヲ叙セル段ニ、舉國ノ民并ニ百八十ノ部曲ヲ發シ、豫双墓ヲ今來ニ造ル云云、更ニ悉上宮一太子ノ乳部ノ民ヲ聚メテ瑩兆所ニ使役ストアリ。此等ハ皇族以下ノ氏々ニ部曲ノ民アリテ、大氏ニハ其ノ口數モ自多カリシ證ナリ。

○六奴婢

此ノ序ニ、我が國ニ於テモ上古ニハ奴隸ノ有リシ事ヲ述ベザル可カラズ、第四期ニ至リ成文法典ノ始メテ出來シトキ、奴婢ニ關シテ綿密ナル規程ヲ發セラレタリ、故ニ其ノ源ハ遠ク此ノ時代ニ在リシコトヲ豫述ベ置クヲ要ス。世界孰ノ邦國モ、上代ニ於テ奴隸ナキ者ハ有ラズ、而シテ其ノ起源ハ、爭鬪ノ世ニ於テ敵人ヲ捕ヘテ俘トシタルニ在ルコト、社會學上ノ事實ナリ。

奴婢ノ起源

俘虜ヲ奴隷トス

犯罪者ヲ奴隷トス

サレバ我が國ニ於テモ、日本武尊ノ東夷ヲ征シ給ヒシトキ其ノ魁首ノ降レルヲ虜トシ尊途ニ於テ病發シテ起テ難キヲ思ヒ其ノ虜ヲ伊勢太神宮ニ獻テ給ヒシコト、上既ニ之ヲ述ベタリ。又代々熊襲ヲ征伐セラレシトキモ四虜必多カリシナルベシ。歴史ニモ面縛テ降ルト云フコト處々ニ見エタリ。是降服ノ儀式ニシテ、當時征服セラレタル者ヲ虜トスル習慣ノアリシニ因リテ起レルコトナリ。又三韓ノ征服セラレシトキハ其ノ王ハ面縛シテ降リ、永ク日本天皇ノ馬飼部トナラント請ヘリ。即奴隷タラント請ヒタリシナリ。

又罪ヲ犯シタル者ヲ收メテ奴隷トスル習慣モ上世ヨリ既ニ存シ、其ノ證ハ歴史ニモ見エタリ。應神天皇ノ九年紀元九百三十八年ニ武内宿禰ヲ筑紫ニ遣シテ百姓ヲ監察セシム時ニ武内宿禰ノ弟甘美内宿禰兄ヲ讒シ、筑紫ヲ裂キ、三韓ヲ招キテ己ニ朝セシムル密謀アリト告グヌ。天皇因リテ使ヲ遣シテ武内宿禰ヲ殺サシメントシ給フ。茲ニ壹伎直真根子トイフ者容貌甚武内宿禰ニ肖タリ。其ノ罪ナクシテ殺サレシコトヲ惜ミ、代リテ自殺ス。武内宿禰竊ニ筑紫ヲ出テ、奉朝シテ無罪ヲ辯ズ。天皇兄弟ヲ推問シ給ヒシニ、各堅執シテ是非決シ難シ。因リテ神祇

ニ盟ヒ、磯城ノ川濱ニ出テ、探湯セシメ給ヒシ時、武内宿禰勝チ便横刀ヲ執リテ甘美内宿禰ヲ毆打シ、遂ニ殺サント欲ス。天皇勅シテ釋サシメ、仍リテ紀伊直等ノ祖ニ賜フトイフコト見ユ。即一家私有ノ民ト爲シタルナリ。又日本書紀、仁徳天皇ノ五十三年紀元五百一十五年新羅朝貢セザリシニ因リ、田道ヲ遣シテ之ヲ擊タシメ給ヒシ條ニ、新羅軍潰ユ。因リテ兵ヲ繼テ之ニ乗シ、數百人ヲ殺ス。即四邑ノ人民ヲ虜トシ、以テ歸ルトアリ。雄略天皇ノ九年紀元五百一十五年ニ采女大海紀、小弓宿禰ノ遺骸ヲ收メテ三韓ヨリ歸リ、大伴室屋大連ニ依リ、奏請シテ葬地ヲ賜ハリシ段ニ、大海大ニ悦ビ自默スルコト能ハズ。韓奴室兄麻呂弟磨御倉小倉針ノ六口ヲ以テ大連ニ送ル。吉備上道、蚊島田邑家人部是ナリトアリ。是囚俘ニハ非スシテ、紀、小弓、宿禰ノ私使ノ爲ニ買ヒ得タリシモノナルベシ。

第十一章 國家ノ編制

(二八)

○一節 天皇ト臣民トノ關係 前章ニ於テハ、氏族ノ團結ヲ以テ社會一般ノ組織ノ中心トシタルコトヲ述ベタリ。而シテ本章ニ於テハ此ノ如ク組織セラレタル社會ニ於テ、國家ヲ統治シタル公權ノ成立ヲ述ベントス。統治ノ主體ハ天皇ニ坐セルコト千古一定ナリ。然リト雖政治ノ變遷ヲ講究セシニハ上古ニ於ケル天皇ト臣民トノ關係ノ大ニ後世ト異ナルモノアリシヲ理會スルコト重要ナリ。

上古天皇統治ノ體ニ關シ、第一ニ注意スベキハ、他ナシ。後世ノ如ク天下ノ民衆ヲ舉ゲテ、直接ニ天皇ノ統治ヲ被ルベキ國家ノ公民トセル關係ハ未起ラズ、只天皇ノ民、即皇族ニ屬セル男女ノミ、天皇之ヲ直領シ、其ノ他ハ皆他ノ諸氏ノ私民トシテ間接ニ天皇ノ統治ヲ被ルノミナリシコト是ナリ。當時ノ社會ハ、前述ノ如ク各氏ニ氏上アリテ、其ノ氏ノ諸家及自己ノ家族ト、其ノ部曲トヲ領率シ、各家ニ家長アリテ、自己ノ家族及家人ヲ領率シタリ。而シテ天皇モ一方ニ於

天皇直領ノ私民ト諸氏ノ私民

諸氏ノ私民ハ天皇ノ直領ニ非ザリ

天皇所屬ノ民ノ増加セシ原因

テハ氏上ニ坐シ、ヲ以テ、其ノ直接ニ領率シ給ヒシ所ハ、皇親及其ノ部民ト皇族諸家及其ノ私民トノ外ニ有ラザリシナリ。故ニ天皇ニシテ若國家ノ爲ニ他氏ノ私民ヲ徵發シ使役セントシ給フトキハ、直ニ其ノ私民ニ命令セスシテ、先其ノ氏ノ氏上ニ命令シ給フテ順序トシタリ。是ヲ以テ天皇ノ威權強ク、氏上ノ勢力弱キトキハ命令善ク行ハレシカドモ、第三期ニ至リ、諸氏ノ勢力強大ナルニ及ビテハ天皇ノ命令モ兎角ニ行ハレザリシナリ。カク此ノ時代ニ於テ他氏ノ私民ハ天皇ノ直接ニ領率シ給ヘル所ニ非ザリシ證據ハ、後ニ大化改新ノ時其ノ二年ノ詔ニテ、コトサテ諸氏ノ部曲ノ民ヲ廢セラレタルニテ知ルベク、或ハ又罪ヲ犯シタル者、其ノ部下ノ人民ヲ奉リテ罪ヲ贖ヒタルニテモ知ルベク、此等ノ人民ハ常ニ其ノ屬スル所ノ氏上ノ領セシ所タレバ、コソ、氏上ノ配下ヨリ轉リテ、朝廷ニ獻進スト云フコト、モ起リシナレ。

○二節 御名代ノ民 然レドモ天皇ハ他ノ氏上ニ比スルトキハ甚重キ地位ニ坐シマセバ、其ノ直接ニ領率シ給フベキ人民モ亦自他ノ諸氏ヨリ多キヲ要シタリ。而シテ天皇所屬ノ人民ノ代々増加スル原因トナレルモノ此ノ時代ニ

御名代ノ民

存シタリ。即天皇皇子、后妃ニ御子無キトキ、其ノ名ノ後世ニ傳ハラザラシコトヲ恐レテ、別ニ民部ヲ置キ、之ニ其ノ天皇皇子、又ハ后妃ノ名ヲ負ハセ給ヒシ慣例是ナリ。之ヲ御名代ノ民ト曰ヒ、又子代ノ民トモ曰ヘリ。第二期ノ史乘ニハ其ノ例甚多シ。例ヘバ垂仁天皇ノ皇子伊登志和氣ノ王、御子ナカリシニ因リ、其ノ子代トシテ伊登志部ヲ定メ、景行天皇ノ皇子日本武尊ハ、御子アリシカドモ皇位ニ即カセ給ハザリシヲ以テ、其ノ功績ノ紀念ヲ留メンガ爲ニ武部ヲ定メ、仁徳天皇ノ皇后葛城磐之媛命ノ御名代トシテ葛城部ヲ定メ、皇子去來穗別尊、履中瑞齒別尊、天皇大日下王、若日下王ノ御名代トシテ壬生部、蝦部、大日下部、若日下部ヲ定メ、允恭天皇ノ皇子木梨輕皇子、皇后忍坂大中姬命、及田井中姬ノ爲ニ輕部刑部、河部ヲ定メ、雄略天皇ノ御名代トシテ長谷部舍人ヲ定メ、清寧天皇皇子坐サマリシニ因リ、諸國ニ白髮部舍人、白髮部、鞆夫、白髮部、鞆負ノ兵士中ノ一隊ヲ置キテ御名ヲ後ニ留メ、武烈天皇モ亦繼嗣坐サマリシニ因リ、雄略天皇ノ舊例ニ因リテ、小泊瀬舍人ヲ置キ給ヒシ類是ナリ。此等ノ子代ノ民ハ、所在ニ部曲ヲ爲シテ、或ハ土地ヲ耕作シ、或ハ舍人、膳夫、鞆負トナリ、以テ天皇ニ奉仕ス

子代ノ民

ルコト他ノ氏族ノ部曲ニ同シカリキ、而シテ允恭天皇ノ條ニ、諸國ノ國造等ニ科シテ衣通姫ノ爲ニ藤原部ヲ定ムトアルヲ見レバ、人口ヲ諸國ヨリ徵發シテ子代ノ民ニ充テ給ヒシモノナリ。

歸化及貢獻ノ民ハ天皇ノ直隸タリ

○三歸化及貢獻ノ民 又外國ヨリ貢獻シ、又ハ自歸化シタル人民ハ他ノ氏ニ附屬スルコト無ク、必天皇ニ直隸スル民部トナリ、常ニ朝廷ノ指揮ヲ受ケテ宮中ノ用品ヲ調貢シタリ。是亦代々ニ其ノ數甚多カリシナリ。蓋歸化ノ民ハ多ク有益ナル技術ニ達シ學識ヲ備ヘタリシヲ以テ、尋常部曲ノ民トハ異ナル待遇ヲ受ケ、或ハ他ノ氏族ニ對立スル資格ヲ賜ハリシ者サヘアリキ。例ヘバ吳王ヨリ應神天皇ニ獻シタル兄媛弟媛、吳織穴織ノ子孫ハ衣織氏トナリテ、專代々ノ天皇ニ供御ノ絹帛ヲ織リテ獻進セシガ如シ。又同天皇十五年ノ紀ニ、秦氏分散シ臣連等各、欲スル隨ニ驅使シ、秦造ニ委テ、是ニ由リテ秦造酒甚

以テ愛ト爲ス、而シテ天皇ニ仕テ、天皇之ヲ愛寵シタマヒ、詔シテ秦ノ民ヲ聚テ秦酒公ニ賜フ。公仍リテ百八十種勝ヲ領率テ先ハ多ク勝ヲ以テ名ト爲ス。秦氏ノ水勝不破勝ノ類是ナリ。故ニ其ノ氏族ヲ勝部トテ、庸調御調絹線ヲ奉獻シテ朝廷曰フ。今攝津因幡上越等ノ諸國ニ勝部村有リ。庸調御調絹線ヲ奉獻シテ朝廷



ニ充積ム。因リテ姓ヲ賜ヒテ禹豆麻佐ト曰フ。一ニ云フ、禹豆母利ト。皆盈積ノ説  
アリ。其ノ他代々ニ韓及吳國  
ヲ七百十氏アリト云フ。亦少数ニ非サルナリ。トアル類是ナリ。

○四 沒收ノ民 初メニ述ベシガ如ク、惡事ヲ爲シタル者アルハ、贖罪ノ

沒收ノ民  
天皇ノ直轄

料トシテ犯者ノ私有ノ人民ヲ朝廷ニ奉ラシメラレタリ。是亦天皇御所有ノ人  
民ノ漸次増加シタル原因ノ一ナリ。例ヘバ日本書紀安閑天皇元年九百  
十二月ノ條ニ曰ク、

是ノ月、盧城部連、積菖、噲ノ女、幡媛、物部大連尾與、瓊瑤ヲ偷ミ取リテ春日、皇  
后ニ獻ズ。事發覺スルニ至リ、積菖、噲ノ女、幡媛ヲ以テ采女ノ丁ニ獻リ、并セテ  
安藝國過戸ノ盧城部ノ屯倉ヲ獻リ、以テ女ノ罪ヲ贖フ。物部大連尾與事ノ己  
ニ由ルコトヲ恐レテ自安キヲ得ズ、乃十市部伊勢國來狹狹登伊來狹狹登伊  
ノ贊土師部筑紫國膽狹山部山林ニ使役ヲ獻サタリト。

又清寧天皇ノ紀ニ星川皇子ハ雄略天皇ノ妃吉備稚姫ノ子ナリ。帝位ヲ奪ハ  
ト欲シテ殺サル。稚姫ノ父吉備上道臣某皇子ヲ救ハントテ船四十艘ヲ連テテ  
來リタル段ニ曰ハク、

「天皇使ヲ遣シ上道臣等ヲ噴讓シ、其ノ領スル所ノ山部ヲ奪ヒ給フト。」

○五 天皇ト土地トノ關係 次ニ上古ニ於ケル統治ノ状態ヲ詳ニセシ

主治權

領有權

ニハ、天皇ト土地トノ關係モ亦其ノ後世ニ於ケルト異ナル所以ヲ知ルコト緊  
要ナリ。即土地ニ對スル權利ニ二種アリテ、後世ニハ二者井然分離シタレド、  
上古ニ於テハ兩者混同シタリシナリ。第一ハ主治權ニシテ、地租ヲ收メ、土地  
領有ヲ序理スル例規ヲ定メ、公益ノ爲ニ私有ノ土地ヲ收用シ、又私有者ナキ土  
地ハ自之ヲ使用スル權ナリ。第二ハ領有權ニシテ、實際一定ノ土地ヲ占領シ、之  
ヲ自家ノ目的ノ爲ニ使用スル權ナリ。即今日ニ於テハ此ノ二ノ權利全ク分離  
シ、土地領有者ハ其ノ所有ノ土地ニ對シテ公然ノ命令ヲ發スルヲ得ズ、他人ノ  
土地ヲ借用スル者ハ其ノ貸主ニ對シ純然タル土地貸借上ノ義務ヲ有スルノ  
ミナレドモ、上古ニ於テハ則然ラズ。天皇ノ人民ニ對スル主治權ハ、直ニ各個臣  
民ニ行ハレズシテ氏上ヲ經由シタルガ如ク、其ノ土地ニ對スル主治權モ亦其  
ノ領主ヲ經由シタリ。而シテ領主ハ多ク氏上タリシナリ。即各氏ノ氏上ハ其ノ  
氏ニ屬スル土地ノ領主トナリテ之ヲ其ノ私民ニ分貸シ、以テ其ノ產物ヲ收メ、

上古天皇直領ノ土地

領有權ハ諸氏ノ氏上ニ在リ

皇家ノ私領御縣

國事ノ須要アルトキハ其ノ幾分ヲ朝廷ニ奉リタルナリ。是ヲ以テ天皇ノ權勢盛リニ坐セルトキハ、土地ニ對スル命令モ善ク行ハレタレド、其三期ニ至リ帝權緩ムニ及ビテハ、領主ハ動モスレバ土地ニ關シ天皇ノ命令ヲ奉ゼズ、或ハ借地者ヨリ租稅ヲ收メテ黎民ヲ苦メタリ。上古ニ於テ天皇ノ直接ニ領有シ給ヘル土地トイヘバ、唯帝室及皇族ニ屬スル土地アルノミナリキ。此ノ證據ハ大化ノ改新ニ至リ二年ノ詔ヲ以テ、コトサテ諸氏所有ノ田園ヲ廢シテ之ヲ公田トシ給ヒシニテモ知ルヘク、又罪ヲ犯ス者アルトキ、其ノ土地ヲ獻シテ之ヲ贖ハシメ給ヒシ例ノ多キニテモ知ルヘシ。上古ニ於テ天皇ハ土地ヲ主治シ給ヒシノミナラズ、又悉ク之ヲ領有シ給ヘリト思フハ誤ナリ、神話ニモ、朕ガ子孫ノ可王國ト宣ヒテ、可領地トハ宣ハズ、即領有權ハ諸氏ノ氏上ニ在リシニ非ザルヨリハ、贖罪ノ科ニ供スベキ關係ヲモ生ゼザルナリ。

○六屯田 然リト雖天皇ハ統治ノ天職ヲ行ヒ給フ費用モ亦自大ナリシヲ以テ、其ノ皇家ノ私領トシテ有テ給ヘル土地ノ外ニ、別シテ國家ノ主長トシテ他氏ヨリモ多クノ田園ヲ要シ給ヒシナルヘシ。皇家ノ私領ハ之ヲ御縣ト云ヒ、

屯田  
田部  
田令屯田司  
屯倉  
屯倉首  
屯家

御縣ハ大和ニ六箇處アリテ其ノ出ダス所ヲ宮中ノ用度ニ充テ給ヒシコト前述ノ如シ。而シテ御縣ノ外ニ別ニ屯田ト稱スルモノヲ諸國ニ置キテ、其ノ出ダス所ヲ以テ國用ニ充テラレタリ。上古ノ制、新ニ得タル土地アルトキハ、先其ノ土地ニ屯田ヲ置キ、餘ル所ヲ以テ皇子朝臣ヲ封セラレキ。屯田ヲ耕作セシムル爲ニ置カレシ役所ヲ田令又ハ屯田司ト云ヒ、其ノ稻米ヲ藏メ置ク所ヲ屯倉ト云ヒ、之ヲ掌ル役人ヲ屯倉首ト云ヒ、其ノ屯倉アル所ノ官舎ヲ屯家ト云ヒタリ。垂仁天皇ノ二十七年ニ屯倉ヲ來目邑ニ、興ストアリ、是ヨリ前ニモアリシナルベシ。此ノ後景行天皇ノ五十七年紀元七百八十七年ニ、諸國ニ令シテ田部屯倉ヲ興サシメ、仁德天皇ノ朝ニ、額田大仲皇子ハ大和ノ屯田屯倉ヲ掌ラントセラレシコトアリ。其ノ段ニ、景行天皇ノ勅旨トシテ載スル所ニ曰ハク、倭ノ屯田ハ毎ニ御宇天皇ノ屯田ナリ。ソレ帝皇ノ子タリト雖御宇ニ非ザルヨリハ掌ルコトヲ得ズト。仁德天皇ノ時、神皇ノ屯倉ヲ置カレシコト播磨風土記ニ見エタリ。同天皇ノ十三年紀元九百一十五年ニ、茨田屯倉ヲ立テ春米部ヲ定メ、又安閑天皇ノ時、皇后及次妃ノ爲ニ小墾田、櫻井、難波ノ屯倉ヲ立

テ、又三島ノ竹村、廬城部、横淳、橘花、多氷、倉標ノ屯倉ヲ定メ、尋イテ筑紫、穗波、鎌豊、國廣、崎桑原等二十六處ノ屯倉ヲ置キ、櫻井田部、連縣、犬養、連難波、吉士等ヲシテ其ノ收稅ノ事ヲ掌ラシメラレタリ。

又第三期ニ涉リテモ、欽明天皇ノ十七年紀元千二百年ニ、備前、兒島郡ニ屯倉ヲ置キ、葛城、山田、直瑞子ヲ田令トシ、又大和國ノ韓人、大身狹、屯田、高麗人、小身狹、屯倉ヲ置キ、處々ノ韓人、高麗人ヲ以テ其ノ屯倉ノ田部トシ、又紀伊ニ海部、屯倉ヲ置カレシニ、三十年ニ田部ノ籍ヲ脱シテ課ヲ免ル、者衆キニ因リ、膽津ヲ遣シテ白猪田部ノ丁籍ヲ檢定セシメ、此ノ功ニ依リテ膽津ニ白猪史ノ姓ヲ賜ヒ、田令ニ拜シテ瑞子ノ副タラシメ給ヘリ、又推古天皇ノ十四年紀元千二百年ニハ、每國ニ屯倉ヲ置キ給ヒキ。

○七收没ノ地 又罪ヲ犯シタル者アルトキ、其ノ土地ヲ收メテ贖罪ノ料トシタル例ハ頗多シ。例ヘバ仁徳天皇四十年紀元千二百年ノ紀ニ雌鳥皇女ト、準別皇子ト親婚ノ罪ヲ以テ誅セラレシ條ニ曰ハク、

「時ニ皇子雌鳥皇女ヲ率井テ伊勢神宮ニ納ラント欲シテ馳ス、是ニ於テ天皇

準別皇子逃走スト聞キ、即吉備品運部雄御、播磨佐伯直阿能胡ヲ遣シテ曰ハク、之ヲ追ヒ、逃テ所即殺セト、爰ニ皇后奏言ク、雌鳥皇女寔ニ重罪ニ當レリ、然レドモ其ノ殺サノ日、皇女ノ身ヲ露サノコトヲ欲ヒズト、乃因リテ雄御等ニ勅スラク、皇女實ス所ノ足玉手玉ヲ取リ貢レト、雄御追ヒテ伊勢、蔭代野ニ及ビテ之ヲ殺シヌ、時ニ雄御等皇女ノ玉ヲ探リテ、裳中ヨリ之ヲ得タリ、乃二王ノ屍ヲ以テ廬杆河邊ニ埋メテ復命ス、皇后雄御等ニ問ハシメタマハク、皇女ノ玉ヲ見タリヤ、對ヘテ言サク、見ザルナリト、是ノ歲新嘗ノ月ニ當リ、宴會ノ日ヲ以テ酒ヲ内外ノ命婦等ニ賜フ、是ニ於テ近江山君稚守山ノ妻ト、采女磐坂媛ト、二ノ女ノ手ニ瓦珠ヲ纏ヘリ、皇后其ノ珠ヲ見タマフニ、既ニ雌鳥皇女ノ珠ニ似タリ、則之ヲ疑ヒ、有司ニ命ツ、是ノ玉ヲ得シ所由ヲ問フ、對ヘテ曰ハク、佐伯直阿能胡ノ妻ノ玉ナリト、仍リテ阿能胡ヲ推鞠ス、對ヘテ曰ハク、皇女ヲ誅スル日ニ探リテ之ヲ取レリト、即將ニ阿能胡ヲ殺サントス、是ニ於テ阿能胡乃己ノ私地ヲ獻シテ死ヲ免レント請フ、故ニ其ノ地ヲ納レテ死罪ヲ赦ス、是ヲ以テ其ノ地ヲ名ヅクテ玉代ト曰フト、

又安閑天皇元年ノ紀ニ曰ハク、

朝廷領有ノ  
地益増加ス

〔内膳卿膳臣大磨勅ヲ奉シテ使テ遣シ、珠ヲ伊甚ニ求ム。伊甚國造等京ニ詣ル  
コト遅晩、時ヲ除ユレドモ進メズ、膳臣大磨大ニ怒リ國造等ヲ收縛シ、所由ヲ  
推問ス。國造稚子直等恐懼シテ後宮ノ内寢ニ逃ケ匿ル。春日皇后直ニ入レル  
ヲ知ラズ、驚駭シテ顛レ、慚愧シタマフコト已ムコトナシ。稚子直等兼テ闕  
入ノ罪ニ坐シ、科重ニ當ル。謹ミテ專皇后ノ爲ニ伊甚屯倉ヲ獻リ、闕入ノ罪ヲ  
贖ハント請フ。因リテ伊甚屯倉ヲ定ム。今分ケテ郡ト爲シ、上總國ニ屬ク。ト。  
是皆私領ノ地ニシテ、天皇ハ之ヲ主治シ給ヒシカトモ、之ヲ領有シ給ハザリシ  
ニヨリテ獻ズトモ云ヒ、又其ノ獻ズルニ代ヘテ甚シキ罪ヲモ免サレシナリ、而  
シテ之ガ爲メニ朝廷領有ノ地ハ益増加シタリキ。

○八節 征服ノ地 土地ニハ歸化ト云フコト無クレドモ、猶外國ノ土地ヲ併  
スルコトナリ而シテ土地ヲ征服シタルトキハ、其ノ幾分ヲ收メテ官田ト爲シ、

天皇之ヲ直轄シ給ヒテ、所出ヲ國用ニ充ツルヲ例トセラレシコト、三韓征服ノ  
後其ノ國々ニ内官家ヲ置カレタリシニテ知ルベシ。

天皇ノ權力  
ハ土地人民  
ノ全歸ニ及  
ブ

○九節 天皇統治ノ範圍

「シラスト  
トノ別」

カク天下ノ衆民ハ皆國家ノ公民タリシニ非ズ  
シテ、獨御名代ノ民、沒收ノ民、及歸化ノ民ノミ直接ニ天皇ノ領率ニ屬シ、又天下  
ノ土地ハ皆朝廷ノ所領タリシニ非ズシテ、御縣、屯田、沒收地ノミ直接ニ朝廷ノ  
領有ニ屬シタルニ於テハ、天皇ノ人民土地ニ對シ給ヘル權力ハ甚狹隘ナリシ  
カ如シ。然リト雖其ノ實ハ、此ノ時代ニ於テモ、天皇ノ權力ハ、一定ノ關係ニ於  
テ人民土地ノ全體ニ及ビタリ。古語ニ此ノ關係ヲ「シラスト」云ヒ、所知ト書ク  
リ。古事記ニ建甕槌神ヲ下シテ大國主命ニ問ハシメ給フ條ニ、汝之宇志波祢  
流葦原中國者我子之所知國言依賜トアリ、カク並ベテ言ヘルカラニハ、ウシハ  
ク「ト」シラストノ間ニ區別ナカルベカラズ、即各氏ノ氏、上ガ其ノ氏ノ私民私田  
ヲ支配スルハ、ウシハクニテ「シラス」ニ非ズ、ウシハ大人ニテ主ノ義ナリ、ハクハ  
刀ハク「履ハク」ナド云ヘル「ハク」ト同シク、其ノ物ヲ身ニ添ヘ帶アル意義ナリト  
云フ。土地人民ニ就キテ之ヲ云ハベ、氏族ノ血統上ノ關係ニ依リテ領率スル義  
ナリ、之ニ反シテ「シラス」ハ國家ノ公權ヲ以テ、大體ニ就キテ統御スル義ナリ、故  
ニ大八洲國所知食天皇ト云ヘリ、則天皇ハ、子代ノ民、歸化ノ民、沒收ノ民、御縣、沒

三種ノ大權

收ノ地、及屯田ハ之ヲウシハキ且シテ給ヒシカド、日本全體ノ國土人民ハ之ヲウシハカズシテシラシ給ヒシナリ。崇神天皇四年ノ大詔ニ「惟フニ我が皇祖諸ノ天皇等宸極ニ光臨シタマヒシハ、豈一身ノ爲ナランヤ、蓋人神ヲ司、收テ、天下ヲ經綸シタマフ所以ナリトアリ、是所謂シラス」ノ義ナリ。即今日ノ語ニテ言ハバ統治ノ義ナリ。今此ノ統御ノ權ノ、上古ニ於テ事實ニ現レタル所ヲ擧グルトキハ三アリ。之ヲ上世三種ノ大權トス。其ノ目左ノ如シ。

(一) 國中諸氏族ノ總氏長トシテ國神ノ祭祀ヲ司行シ給フ事。

(二) 外國ニ對シ國中諸氏族ヲ代表シテ宣戰講和シ給フ事。

(三) 氏族ヲ創置シ、斷滅シ、氏、上ヲ命シ、其ノ爭訟ヲ決シ給フ事。

第一ハ天皇ノ神事大權ニシテ今ニ至ルマテ變ラズ、第二ハ後ニ分レテ天皇ノ外交大權及兵馬大權トナリ、近世ノ初メ一時之ヲ將門ニ委テタリシカドモ、今ハ古ニ復シテ天皇親シク之ヲ握ラセ給ヘリ。而シテ後世ニ至ルニ及ビテ大ニ趣ヲ變ヘタルモノハ即第三ノ大權ナリトス。是種々轉變シタル後、遂ニ今日ノ憲法上ノ行政大權及司法大權トナレルモノナリ。以下之ヲ別論ス。

三種大權ノ沿革

三種大權ノ

天皇ハ國民全體ニ代リテ神事ヲ給フ

○十神事大權

ソレ天御中主神ヨリ以下神代ノ諸神ハ日本國民ヲ爲セテ諸ノ氏族ノ祖神ナリ、而シテ諸ノ氏族ハ各、其ノ特別ノ祖神アリ、從ヒテ此等ヲ神別ト稱スレドモ、孰レモ天照太神ヲ以テ宗統ト仰キ、其ノ支流ニ立テル神祇ニ非ザルハ無シ。故ニ天照太神ノ直統ヲ受ケタル氏族即皇族ニ於テハ、此ノ中心正統ノ祖神ヲ祀リ給フ特權ヲ保有シ、代々ノ天皇ノ國民全體ニ代リテ神事ヲ指揮シ給ヘルコト理ノ當然ト謂フベシ。代々天照太神ノ遺禮ヲ繼ギテ、大嘗祭ニ天神地祇ヲ祭ラセラレシモ天皇ナリ。毎年新穀始メテ熟スル時、先以テ天神ニ報シ、而シテ後天下ト共ニ之ヲ嘗メサセラレシモ天皇ナリ。又國ニ大事アリ、師ヲ興シテ外ヲ征セントスルニ臨ミ、先天神地祇ヲ祭リテ勝敗ヲトシ給ヒシモ天皇ナリ。國ニ災害アリ、民疾疫ニ苦ムニ當リ、天神地祇ヲ祭リテ治癒ヲ禱リ給ヒシモ天皇ナリ。而シテ天皇ハ此ノ祭事ノ爲ニ天下各氏ノ男女ニ令シテ弭調、手末調ヲ出サシメ給ヒキ。是其ノ號令ノ各個臣民ニ及ビシ所以ナリ。古語拾遺崇神天皇ノ條ニ曰ハク、又六年八十万神ヲ祭リ、仍リテ天、社、國、社及神地神戶ヲ定メ、始メテ男ノ弭調、女ノ手末調ヲ貢セシム。今神祇ノ祭ニ熊皮鹿皮

神事ニ關シテハ万民直ニ命ヲ奉ゼザルヲ得ズ

三種大權ノ

外交ト戰時トニ關シテハ氏々ノ私民モ必天皇ノ命令ヲ奉ルヲ得ズ

角布等ヲ用ウルハ此ノ縁ナリト。乃知ル氏々ノ民衆ハ天皇ノ私民ニ非ズ、氏々ノ土地ハ天皇ノ私領ニ非ズ、直接ニハ唯諸氏ノ氏上諸地ノ領主ニ命令シ給ヒシノミナレドモ、獨神事ニ關シテハ、万民直接ニ天皇ノ命令ヲ奉ゼザルヲ得ザリシコトナリ。

○十一 兵馬大權 古ヨリ今ニ至ルマデ外交ノ事ト兵馬ノ事トハ二ニシテ一ナリ、蓋兵馬ハ外國ニ對シテ國權ヲ施スベキ要器ナレバナリ、而シテ戰端ヲ開クハ必天皇ノ詔旨ニ依ラントト要シ、又始メテ三韓ト交通セラレシトキヨリ、國ノ元首トシテ外國ノ使節ヲ請ク、朝貢ヲ收メ、外民ニ對シ國權ヲ擴張スルハ皆至尊ノ勅裁ニ出テナリシコト、崇神天皇以來ノ歴史ニ徴シテ明ナリ。

當時外國ト云ヘバ三韓支那ヲ主トスルコト勿論ナレドモ、東夷即蝦夷モ亦之ヲ外蕃トセラレタリキ。

天皇ニ此ノ大權アルヲ以テ、外交ト戰時トニ關シテハ、氏々ノ私民ト雖必天皇ノ命令ヲ奉ゼザルヲ得ザリキ、則或ハ軍費ニ供センガ爲ニ私産ノ一部ヲ朝廷ニ出ダサシメシ事ハ、崇神天皇ノ時外敵征討ノ必要アリシニ臨ミテ、更ニ人民

ヲ按シ、長幼ノ次第及課役ノ先後ヲ知ラシメラレシニテ、見ルベク、其ノ後同天皇諸國ニ命シテ武器ヲ作り、神社ニ藏セシメ給ヒシニテモ、見ルベク、神功皇后三韓ヲ伐タントシ給ヒシトキ、三輪ノ神ヲ祭リテ兵士ヲ集メラレシニテモ、見ルベシ。又外國ヨリ歸化セル人民及虜囚ハ、天皇ニ於テ處置ヲ專ニシ給ヒシモ、外交及兵馬大權ノ一端ナリシナリ。

三種大權ノ

天皇ハ氏族ノ爭訟ヲ決シ給フ權アリ

○十二 族制大權 天皇ガ諸氏ノ上ニ立チテ有テ給ヒシ權力ノ最重大ナル者ハ、神意ヲ承ケテ諸氏ヲ統括シ給フコト是ナリ。即天皇ハ新ニ氏族ヲ作り、氏族ト氏族トノ間ニ起レル爭訟ヲ裁斷シ、氏族ノ秩序ヲ害スル者アルトキハ、其ノ資格ヲ奪フ權ヲ有テ給ヒキ。其ノ氏族ノ爭訟ヲ決スル權ヲ有テ給ヒシ事實ヲ舉グレバ、日本書紀允恭天皇四年元一千七百七十五年ノ條ニ曰ハク、

「秋九月辛巳ノ朔己丑詔シタマハク、上古ノ治、人民所ヲ得、姓名錯レザリキ、今朕踐祚シ、茲ニ四年、上下相爭ヒ、百姓安ンゼズ、或ハ誤リテ己ガ姓ヲ失ヒ、或ハ故ニ高氏ト認ム、其ノ治ニ至ラサルモノ、蓋是ニ由ルナリ、朕不賢ト雖、豈其ノ錯レタルヲ正サヘランヤ、群臣議定シテ之ヲ奏セヨト、群臣皆言フ、陛下失シ

且神探湯

舉格枉ヲ正シテ氏姓ヲ定メタマハバ、臣等死ヲ冒サント、奏可ス。戊申、詔シタマハク、群卿百寮及諸ノ國造等皆各言フ、或ハ帝皇ノ裔所姓氏錄ニナリ。或ハ異シクテ天降レリ所姓氏錄ニト。然レドモ三才顯分シテヨリ以來、多々萬歲ヲ匿タリ。是ヲ以テ一氏蕃息シテ、更ニ万姓トナリ、其ノ實ヲ知り難シ。故ニ諸ノ氏姓ノ人等、沐浴齋戒シテ各、盟神探湯ヲ爲セ、則味アノカシ、榎丘ノ辭ハナシ、禍ハナシ、戸岬ノ名地ニ於テ探湯カ、資カヲ坐ユ、而シテ諸人ヲ赴カシメテ曰ハク、實ヲ得ノモノハ則全ク、僞ニル者ハ必害アラント。是ニ於テ諸人各木綿手織ヲ著クテ釜ニ赴キテ探湯ス、則實ヲ得ル者ハ全ク、實ヲ得ザル者ハ皆傷キヌ。是ヲ以テ詐ル者ハ愕然トシテ豫退キテ進ムコト無シ、是ヨリ後氏姓自定マリ、更ニ詐ル人ナカリキト。

又安閑天皇元年ノ紀ニ曰ハク、

〔武藏國造笠原直使主、同族小杵ト國造ヲ相争ヒテ、年ヲ經テ決シ難シ。小杵性阻ニシテ逆フコト有リ、高クシテ順フコト無シ。密ニ援テ上毛野君小熊ニ求メテ使主ヲ殺サント謀ル。使主覺リテ走り出テ、京ニ詣リテ狀ヲ言ス。朝廷臨斷シ、使主ヲ以テ國造ト爲シ、而シテ小杵ヲ誅ス。國造使主悚慙懐ニ充チテ、默

天皇ノ權力

ヲ以テ新ニ作ラシメテ

シ己ムコト能ハズ、護ミテ國家ノ爲ニ横濱、橘花、多氷、倉樅ノ四處ニ屯倉ヲ置キ奉ルト。

天皇ノ權力ヲ以テ新ニ氏族ヲ作ラレシ例ハ甚多シ。今其ノ一ヲ舉グレバ、日本書紀仁賢天皇ノ五年ニ、天父皇王ノ遭難ニ殉死シタル佐伯部賣輪又仲子ノ遺族ヲ實シ給ヒシ條ニ曰ハク、

〔五年春二月丁亥朔辛卯、普ク國郡ニ散亡セル佐伯部ヲ求メ、佐伯部仲子ノ後ヲ以テ佐伯連ト爲スト。〕

天皇ハ氏族ノ等級ヲ毀シ給フ權アリ、等級ヲ貶

又天皇ハ處爵トシテ氏族ノ等級ヲ貶シ、或ハ全族ヲ毀シ給フ權アリ、等級ヲ貶スヲ以テ刑罰ニ代ヘラレシ一例ヲ舉グレバ、允恭天皇二年ノ紀ニ曰ハク

〔初メ皇后母ニ隨ヒテ家ニ在リ、獨苑中ニ遊ビタマフ。時ニ關雞國造傍ノ徑ヨリ行キ、馬ニ乘リテ離ニ莅ミ、皇后ヲ嘲リテ曰ヒクタク、能ク國ヲ作ルカ汝者ト。且曰ハク、歷乞戸母、其ノ蘭一莖ヲト。皇后則一根ノ蘭ヲ採リテ馬ニ乘ル者ニ與ヘ、因リテ問ヒタマハク、何ノ用ニ蘭ヲ求ムルカト。馬ニ乘ル者對ヘテ曰ハク、山ヲ行キ、蟻ヲ撥フナリト。時ニ皇后意裏ニ馬ニ乘ル者ノ辭ノ無禮ヲ結

ヒ、即謂リタマハク首ヨ、余ハ忘レシト。是ヨリ後皇后登祚ノ年、馬ニ乘リテ闕ヲ乞ヒシ者ヲ覓メ、昔日ノ罪ヲ數ヘテ以テ殺サント欲ス。爰ニ闕ヲ乞ヒシ者類ヲ地ニ捨キテ叩頭シテ曰ハク、臣ガ罪實ニ万死ニ當レリ。然レドモ其日ニ當リテ貴者タルコトヲ知ラザリキト。是ニ於テ皇后死刑ヲ赦シクマヒ、其ノ姓ヲ貶シテ稻置ト謂ヘリト。

又主長罪アルトキ、其ノ全氏ヲ殺サレシ例ハ、雄略天皇七年紀元千百一十三年ノ紀ニ在リ曰ハク、

「八月、官者吉備弓削部虛空取急ニ家ニ歸ル。吉備下道臣前津屋虛空ヲ留メテ月ヲ經レドモ、京都ニ聽上ヒズ。天皇身毛君大夫ヲ遣シテ召サシメクマフ。虛空召サレテ來リ言サシク、前津屋ハ小女ヲ以テ天皇ノ人ト爲シ、大女ヲ以テ己ガ人ト爲シ、競ヒテ相關ハシメ、幼女ノ勝ツヲ見テハ、即刀ヲ拔キテ殺シツ。マタ小雄雞ヲ以テ呼ビテ天皇ノ雞ト爲シ、毛ヲ拔キ翼ヲ剪リ、大雄雞ヲ以テ呼ビテ己ガ雞ト爲シ、鈴ト金距トヲ著ク、競ヒテ闘ハシム。禿雞ノ勝ツヲ見テハ、亦刀ヲ拔キテ殺シツト。天皇是ノ語ヲ聞キ、物部ノ兵士三十人ヲ遣リテ前津

屋并ニ族七十人ヲ誅殺ヒシメクマヒキト。



### 第十二章 政治ノ機關(骨姓ノ制)

政府ノ組織

「カバネ」ノ制

姓ノ字ヲ用  
#シテ義

○一 骨姓ノ制 前章ニ於テハ天皇統治權ノ範圍ヲ述ベタリ。而シテ既ニ三種ノ統治事務アル上ハ、又之ヲ施行スル機關ナキヲ得ズ。故ニ本章ニ於テハ統治ノ機關タル政府ノ組織ヲ述ベントス。

抑、我が國上古ニ於ケル政府ノ組織ハ、全ク第十章ニ述ベタル氏族ノ團結ニ基キタルモノニシテ、氏族ノ段階ト官職ノ段階ト未分離セズ、上ハ相將ヨリ以下庶務ノ官ニ至ルマデ、皆或ル氏ノ氏上ノ累世奉職セル所ナリキ。此ノ制度ヲ指シテ「カバネ」ト云ヒ、骨又姓ノ字ヲ書キタリ。椽ヲ「カバ」ト云フモ同シ義ニテ、氏族ノ幹了ナル一人ニ於テ國家ノ職ヲ奉ズルヨリカク云フナリ、而シテ氏ハ異ナレドモ職ハ同シキコトアリ。例ヘバ物部氏ト大伴氏トハ其ノ氏ヲ異ニスト雖モ、骨ヨリ云フトキハイヅレモ連ナルガ如シ。日本ノ歴史ニ於テ「姓」ノ字ヲ用ウルハ即是ノ義ナリ。

○二 神別諸氏 骨制ノ起源ハ遠ク神代ニ在リ。即天照太神天、窟戸ニ隠レ

骨制ノ起源

五部ノ神

齋部氏  
中臣氏

按女君氏

給ヒシトキ、凝石姥命ハ八咫ノ鏡ヲ作り、玉祖命ハ曲玉ヲ作り、天兒屋根命ト天太玉命トハ幣帛ヲ執リ、祝辭ヲ宣ベ、天鈿女命ハ神樂ヲ奏シ給ヘリ。此ノ緣ニ因リ、天孫降臨ノ時、此ノ五部ノ神ハ天照太神ノ勅ニ從リ、天孫ニ陪侍シテ各、其ノ職ヲ奉ズルコト一ニ天上ノ儀ノ如クニヒラレタリ。而シテ經津主命ト武甕槌命トハ將帥ノ任ニ當リ、天忍日命ト天穗津大來目トハ攻防ノ事ヲ掌リタリ。是ヨリ此ノ諸神ノ後ナル氏上ハ、世、其ノ氏族及部曲ヲ率井テ朝廷ニ事ヘ、各、其ノ祖神傳來ノ職ヲ盡セリ。前期ノ事實ハ以テ之ヲ證スベシ。

神武天皇橿原宮居ノ時、天太主命ノ孫天富命ハ山材ヲ採リテ正殿ヲ構ヘ、天璽鏡、劔ヲ正殿ニ安キ、瓊玉ヲ懸ク幣物ヲ陳テ殿祭祝詞ス。是ヨリ其ノ後裔ヲ齋部氏ト稱シ、世、朝廷ノ祭祀ヲ掌ル。天兒屋根命ノ孫天種子命ハ、祖神ヨリ傳來セル中臣ノ禊ヲ宣ベテ天罪國ヲ解除ス。其ノ後裔ヲ中臣氏ト稱シ、世、宣奏ノ事ヲ掌ル。而シテ第二期以後ニ至リテハ、又政務ニ與リ、第四期ニ至リ其ノ稱ヲ改メテ藤原トス。天鈿女命ノ裔ハ、按女君氏ト稱シテ、中臣氏、齋部氏ノ掌ル所ノ祠祀ニ於テ神樂ノ事ヲ供ス。天忍日命ノ後ナル日臣命ハ、大伴來目ノ二部ヲ

大伴氏

物部氏

率井テ宮門ヲ守衛ス。是ヨリ其ノ後裔ヲ大伴氏ト稱シ、世、將帥ヲ以テ朝廷ニ事  
 フ。而シテ第二期ニ至リ、其ノ大氏ノ氏、上ヲ大伴、大連ト稱シ、世、大政ノ補佐タリ。  
 又鏡速日命命古事記ニ據レバ鏡速日ハ内物部ヲ帥井テ矛盾ヲ造備ス。是ヨリ其  
 ノ後裔ヲ物部氏ト稱シ、大伴氏ニ並ビ世、兵武ヲ以テ朝廷ニ事フ。而シテ第二期  
 ニ至リ、其ノ大氏ノ氏、上物部、大連ハ世、大政ノ補佐タリ。又珍彦後ニ名ヲ推根  
 津彦ト賜フ。ハ彦火火出見尊ノ孫ニシテ、皇舟ヲ迎ヘ導キ、又敵地ニ入リ香山ノ  
 巔ノ土ヲ取リテ祭祀ノ用ニ供シ、神武天皇ノ基業ヲ補佐シタル功ニ因リ、大和  
 ノ國造ニ封セラレ、其ノ後裔ヲ大和氏ト云ヒ、氏、上ヲ大和連ト稱シタリ。此ノ  
 外ニ天神ノ後ニシテ天孫ニ從ヒテ降來シ基業ヲ補佐シタル功ニ因リテ恩賞  
 ヲ受ケ、世、一定ノ職ヲ奉シタリ、シ氏族枚擧ニ遠アラズ。經津主命ノ後ニ矢作  
 氏アリテ、氏、上ヲ矢作連ト云ヒ、武甕槌命ノ後ニ倭川原氏アリテ、氏、上ヲ倭川原  
 忌寸ト云ヒ、櫛玉命ノ後ニ小山氏アリテ、氏、上ヲ小山連ト云ヒ、シ類皆姓氏錄ニ  
 詳ナリ。此等ノ諸氏ヲ總稱シテ神別諸氏ト云フ。蓋天神地祇ノ後ナレバナリ、然  
 レドモ此ノ稱ハ第四期ニ至リ姓氏錄編輯ノ時ニ立テラレシモノニシテ、古ハ

皇族ヨリ出  
テシ諸氏

唯其ノ實ノミヲ存シ、其ノ名ハ有ラザリシナリ。

○節三 皇別諸氏

カク天神地祇ノ後裔ニシテ基業ヲ佐ケタル者、各、職掌ア  
 リテ政府ヲ組織スル元素ノ一ト爲リシ外ニ、建國以來世代ヲ經シ間ニ等シク  
 強大ナル他ノ元素ヲ生シタリキ、即代々ノ天皇ノ皇子ノ後是ナリ。代々ノ皇  
 子ノ中或ハ父ヲ繼キ或ハ兄ヲ承ケテ天位ニ登リ給ヒシ外ハ、或ハ入りテ朝廷  
 ノ政事ヲ補ケ、或ハ出テ、地方ノ治務ヲ知り給ヒ、其ノ子孫蕃殖シテ各、一ノ氏  
 族ヲ爲セリ。茲ニ一二ノ例ヲ擧グン。孝昭天皇ノ皇子ニ天足彦國押人、命坐シ、  
 其ノ後ニ彦國尊アリテ、崇神ノ朝ニ武埴安彦、王ノ亂ヲ平ケ、其ノ子孫ヲ和珥氏  
 ト云フ。孝靈天皇ノ皇子稚武彦、命ノ後ヲ吉備氏ト云ヒ、氏、上ヲ吉備、臣ト云フ。  
 孝元天皇ノ皇子大彦、命ハ崇神ノ朝ニ武埴安彦、王ノ亂ヲ平ケ、其ノ子孫ヲ阿部  
 氏ト稱シ、氏、上ヲ阿部、臣ト云ヒテ世、朝廷ニ事フ。孝元天皇ノ皇子ニ彦太忍信  
 命アリ、其ノ孫ハ即武内宿禰ナリ。武内宿禰三韓征伐ノ時、其ノ功比ナク、應神  
 天皇ノ朝ニ棟梁ノ臣トナリ、其ノ數子ハ平群氏、紀氏、巨勢氏、蘇我氏等ノ祖トナ  
 レリ。開化天皇ノ皇子武豐葉類、命ノ後ヲ道守氏ト云ヒ、氏、上ヲ道守、朝臣ト

皇別ハ神別  
ヨリ實キ格  
式ヲ有シタ  
リ

云フ。崇神天皇ノ皇子豐城入彦命ハ出テ東國ヲ治メ給ヒ其ノ子八綱田命  
ハ垂仁天皇ノ朝ニ狹穗彦王ノ亂ヲ平ケテ功アリ子孫ハ世上毛野君及下毛野  
君タリ。景行天皇七十餘子皆諸國ノ別トナリ給フ而シテ其ノ子孫世治民ノ  
職ヲ繼ケリ。仲哀天皇ノ皇子譽田別命ノ後ヲ間人氏ト云ヒ氏上ヲ間人宿禰  
ト云フ。其ノ他新田部氏ノ安寧天皇ノ皇子磯城津彦命ヨリ出テ春日氏小野氏  
和安部氏和爾部氏櫛井氏ノ孝昭天皇ノ皇子天帶彦國命ヨリ出テシガ如キ枚  
舉ニ遠ナシ皆姓氏錄皇別ノ部ニ在リ。此等ノ諸氏ヲ皇別ト云フハ第四期以  
後ノコトナレドモ初メヨリ前節ニ述ベタル諸氏トノ間ニ自然ノ區別アリテ、  
由緒ハ神別諸氏ヨリ新シキニモ拘ラズ皇親タリシ故ヲ以テ神別ヨリモ貴キ  
格式ヲ有セントシタル形跡代々ノ事實ニ現レタリ。

○四節大臣、大連、臣連、

サテ以上二種ノ元素ヲ以テ政府ヲ組織シタル次  
第ヲ述ベンニ上ニ記載セル所ニ據リテモ既ニ知ラル、ガ如ク皇別諸氏ノ氏  
上ニシテ朝政ニ與リシ者ハ之ヲ某ノ臣ト稱シ非皇族即神別諸氏ノ氏上ニシ  
テ朝政ニ與リシ者ハ之ヲ某ノ連ト稱シタリ、オミハ大身ノ義ニシテムラシハ

「イハツキ」

群主ノ義ナリト云フ。後世ニ至リテハ此ノ區別モ多少混亂シタレドモ最初  
ハ判然タリシコト識者ノ疑ハザル所ナリ。カクテ上ナルハ一定ノ職制ヲ定  
メズ臣連ノ中ニテ當時有力ノ者ヲ御坐ノ前ニ集メテ朝政ヲ議セシメ給ヒシ  
ヨリ之ヲマヘツギミト云ヒ大夫又ハ臣ト書キタリキ。崇神天皇ノ紀ニハ群卿  
ニ詔ス「ト書ケリ。垂仁天皇ノ朝ヨリハ事アル毎ニ臣ト連トテ指名セラレタリ。  
第六節即同天皇二十五年伊勢大廟ヲ起シ給ヒシ詔ニ五人ノ大夫ヲ指サレタ  
ルガ如キハ此ノ類ノ詔勅ノ稍古キモノナリ。當時臣連ノ稱ハ未有ラザリシ  
ナラメド五人ノ中ニテ武渟川別阿部ト彦國登和耳トハ皇別ニシテ大鹿島  
中臣物部十千根氏及武日大伴ハ神別ナリキ。景行天皇ノ時ニ多臣ノ祖諸木  
國前臣ノ祖菟名手物部連ノ祖夏花等天皇ニ從ヒ熊襲ヲ征シ吉備武彦ト大伴  
武日ト日本武尊ニ從ヒ蝦夷ヲ討チシコト見ヘタレト天皇就中武内宿禰ヲ重  
用シ遂ニ命シテ棟梁臣トシ給ヘリム子トルハム子トアルノ義ナリ。成務天  
皇ノ三年ニハ武内宿禰ヲ大臣トシ給フ然レドモ是一ノ官職タリシニ非ズ特  
ニ尊重シテマヘツギミノ上ニ大ノ字ヲ加ヘ給ヒシノミ。仲哀天皇ノ時皇后

棟梁臣  
大臣

雄略天皇ノ  
朝大臣大連  
ヲ區カレ

天皇ノ喪ヲ秘スル事ヲ大臣武内中臣伊弉諾津連ト大三輪大友主君ト物部膽  
昨連トニ詔シ給ヘリ。カクテ第二期ニ移リ、第二十二代雄略天皇ノ時ニ至リ、  
皇別氏上ノ中ニテ特ニ權勢アルヲ舉ケテ大臣トシ、以テ諸ノ皇別氏上即臣等  
ヲ總督セシメ、又神別氏上ノ特ニ權勢アルヲ舉ゲテ大連トシ、以テ諸ノ神別氏  
上即連等ヲ統理セシメラレタリ。日本書紀ニ「天皇有司ニ命シ、役ヲ泊瀬ノ朝倉  
ニ設ケ、天皇ノ位ニ即キ、途ニ宮ヲ定メ、平群臣眞鳥ヲ以テ大臣ト爲シ、大伴連室  
屋物部連目ヲ以テ大連ト爲ストアル是ナリ。是ヨリ歷朝大臣大連ヲ並ベ置  
キ給フ例トナリシカド、此ノ所謂大臣スラモ後世官職トシテ置カレシ大臣ト  
ハ大ニ異リテ、唯臣ノ骨ヲ總督スル大氏ノ氏上ト云フ義ニ外ナラザリシヲ配  
憶スベシ。即氏族ヲ以テ組織シタル政府ノ最上ノ關節ヲ爲セル身分ノ稱タリ  
シナリ。カク諸ノ臣連諸氏ニ於テ、世朝廷ニ奉仕シテ種々ノ事ヲ掌リ、大臣大連  
之ヲ總理シタルハ、是上世政府ノ組織ナリ。當時唯氏族ノ貴賤アリシノミニ  
テ、別ニ官職ノ段階アリシニアラズ。

○五節 國造及伴造

臣連ハ朝政ニ與リシ諸氏ナリ、故ニ次ニハ地方及局部

地方及局部  
ノ政ニ與  
シ諸氏

ノ政務ニ與リシ諸氏ヲ述ベサル可カラズ、此ノ諸氏ヲ概シテ國造、伴造ト云、  
或ハ總稱シテ伴造トイヘリ。國造ノ事ハ前期ノ部ニ述ベタリ、而シテ此ノ職  
ニ居ル者ハ皇別モアリ、神別モアリシカド、大半ハ皇別諸氏ニシテ、皆其ノ職ヲ  
世襲シタリキ。

伴造

伴造ト稱スルハ一種ノ技術ヲ世業トスル部曲ノ民ヲ領シ、此ノ技術ヲ以テ朝  
廷ニ事ヘタリシ諸氏ノ氏上ヲ云フトモ、ハ即部民ノ義ニシテ、ミヤツコハ國造  
ノ「ミヤツコ」ト其ノ義一ナリ。此等ノ諸氏ハ多ク其ノ職業ヲ以テ名ニ負ヘリ。  
例ヘハ酒人氏、櫛代氏、衣縫氏、神社氏、宮部氏、佐伯氏、兵士ノ長ト稱スル門部氏、刑部  
氏、眞髮部氏、掃守氏、幡文氏、工氏、吳服氏、杯作氏等ナリ。伴造ノ氏上ノ貴キニハ  
連モアリシカド、多クハ首ト云ヘリ、例ヘハ度守首、鎗部首、刑部首、佐伯首、韓海首、  
靴編首、鶴飼部首、猪甘首、工首ノ類是ナリ。

伴造ノ氏上

又或ル場合ニハ伴造ノ氏上ヲ直トモ云ヘリ、雄略天皇十六年ノ詔ニ「漢部ヲ聚  
メテ其ノ伴造ヲ定メ、姓ヲ賜ヒ直ト云フトアル類是ナリ。又文書ヲ司ル諸氏  
ノ氏上ヲ史ト云ヒテ、伴造ノ一種ニ數ヘタリ。